

の喜劇作者中彼れの右に出づるものなしと稱せらる。彼れの最も力を盡くし又最も成功せしは對話の滑稽にして圓轉なるにあり。彼れは其の滑稽の爲めに喜劇の他の要素を放棄したるかの觀あり彼れは科介動作の不都合を問はず脚色結構の亂雜にして不條理なるをも顧みざりしなり。其の人物の性格の如きも頗る明かに區別せるもあれど動もすれば始めより之れを嘲弄し殊更に狂態を演ぜしむるが如き弊ありしかば彼のフッチェリー、シヤドエル等のに比して詞致優雅なりしにも拘らず其の着想の猥陋なることは却りて彼れに過ぎたり。

コングリーヴは劇壇にありしと僅かに六年なりき。彼れは二十一歳にして始めて『老獨身者』(“Old Bachelor”)といへるをもものしき(一六九三出版)とはフッチェリーを學びて成功せしものなり。此の作大にもてはやされしかば同九十四年又『The Double Dealer』を作しぬ。時人の玩賞は前作に劣りしが批評家は痛く賛美し就中ドライアンの如きはシェイクスピアにすら比せんとせり。かゝる激賞はコングリーヴのもどより當たり得ざる所なれど彼れが才華の亂發してモリエールと光彩を争ひし當時に於てはかゝる溢美の贊評も或は失當と思はれざりしならん。

さて翌九十五年に至り傑作『戀故の戀』(“Love for Love”)を作せり例の絢爛目を奪ふ底の風俗喜劇なり。翌々年又『The Mourning Bride』を作れり悽愴たる悲劇なり佛の悲劇家クレピロンに摸してかくまでの成功を得たるはオレンツ作家中たゞ一のコングリーヴあるのみ。一千七百年喜劇『The Way of the World』を作し後ち復た筆を執らず。此の作も多くは前の諸作に譲らざりしが其の滑稽あまりに皮肉なりしが爲め時人の斥くる所となり猥雜といふ非難の中に埋葬せられたんぬ。

John Vanbrugh (一六六六? — 一七二六) ヲ ヲンヅァンブルは快活なる作家にしてコングリーヴが名聲の地に落ちしころに出でしかば聊かの功によりて忽ち好地位を得たり。其の業とする所もと建築術にありしが故にや其の喜劇の構思のづから堅實なりき。華美豪壯なる詞句を駢ぶることは到底コングリーヴに及ぶべからざるを曉り彼れは専ら其の力を趣向脚色に傾け綿密の構思を以て詞藻の不足を補ひたりき。按ふにヴァンブルは嚴に評すれば詩人と稱すべきものにあらじむしろ縝密の用意によりて巧みに劇を構成せしものといふべきか而も其の社會と人物とに對する洞察鋭利なりしかば時には或社會の狀態をさながら

に活現し得たるものなきにあらず。*“The Relapse”*及び*“The Provoked Wife”*は彼れが始めて物したる作にして頗る成功の名あり。終生を通じてものせしもの十篇何れも單調の喜劇なり。但し其の中なる*“The Confederacy”*(一七〇五)は彼れが第一の傑作と稱せらる彼れは後ち帝室の技師となりて劇壇を去り士爵の位階を賜はりて一千七百二十六に歿しき。

Colley Cibber(一六七一—一七五七)ホルリース、シムズは十八世紀の終末に出でし作家にして其の作は半ば十八世紀に跨れり。噫馬の彫刻師の子にして幼より劇場に入り一千六百八十九年俳優となり七八年の後喜劇*“Love's Last Shift”*を作し頗る名あり。翌年*“Woman's Wit”*を作すこは劣作なれどもその翌年にもせる*“Love Makes a Man”*は頗る世評ありき。此の篇と一千七百五年にもせし*“Careless Husband”*とを其の傑作とす。爾後作する所殆んど三十篇。落想輕妙よく文學と劇場とを中和し着筆老練にしてコリエルの如き皮肉の癖なかりしが故に俗受けは當時彼れに及ぶものなかりき。かくて當期劇壇の最後に出でし脚本家をヨルマ、フリースローとなす。

George Farquhar エリザ朝の初めマアローが劇詩に於て初て表はれし光彩陸離たる詩劇の光炎はこゝにフルカールが最後の火花となりて其の影を滅しぬ。フルカールは一千六百七十八年愛蘭土なる名族の家に生れき。父は牧師なり。幼にして神學校に入りしが後ちダフリンの劇場に入りて俳優となりぬ。嘗てドレイデが『印度王』を演ぜしや佩刀を取り替ふるとを忘れて場に上り誤りて同僚を傷け大に悔いやがて劇場を退き遂に軍隊に入りて艦長となりぬ。一千六百九十七年ロンドンに來りて始めて喜劇*“Love and a Bottle”*を作しぬ。軍隊生活の可笑味を寫し輕妙頗る時人の喝采を博しき。次に*“The Constant Couple”*を上場せしめしが其の主人公たるハアリ、ワイルド、フェアなる一士人の性行大に看客をして笑倒せしめければ翌年續篇として更に『ワイルド、フェア』といふ一作をものしき。彼れ資性温雅容貌端麗なりしかば女性間の評判いと高かりしが遂に一少女の爲に身を誤り窮境に陥りぬ。彼れが最後の傑作 *“The Recruiting Officer”* (一七〇六)及び *“The Beaux' Stratagem”* (一七〇七)はこの間に成りぬ就中後者は臨終の病牀にて筆を執りきとす。一千七百七年没しき齡がに三十。

一千七百二年世に出だし、文集「Love and Business」の中に彼れ自ら語りて曰はく「今の所謂喜劇は教誨或は懲罰の旨を知らせんとて巧みに綴りたる物語に過ぎず」とこの言或は以てオレンツ派の戯曲を蔽ふに足らんか。ゴッス曰はく「王政復古終末の單調無味なる劇詩中吾人がやゝ心を慰するを得べきものはフェスカルが戯曲中の快活なる世界なり赤袍白袴の一群が笑聲の聲に打ち雜りて輕々繁々の軍樂を奏して進む様は頗る吾人が懶眠を破るに足ると」
 フアルカルが作のかく重んぜらるゝを見ても十七世紀戯曲の眞價は多く論ぜずして足りぬべし。

第四篇 十八世紀の文學

第一章 概論

英國文學のオーガスタス時代——その諸文士——クラブ街の窮才——社會の狀態——韻語の文學——散文の文學——小説及び歴史の興隆——劇詩界

内亂時代以後十九世紀以前の英國文學を稱して或は之を羅甸文學の全盛期に比し英國アウガスタス時代の文學とも謂へれど、こは甚だ當を失へる溢美の稱なり。

夫の羅甸文學のオーガスタス時代にはまづワーウールありホレーヌあり其の他幾多の傑出せる詩人吟客の星の如く輝きしと同時に上には詩眼ある賢君主オーガスタス帝の懇に詩文人を保護獎勵するありしかば一代の文華燦然として光を放ちて古今に驕れり。然るに所謂英國のオーガスタス時代に至りては其の趣痛く之れと異なれり。當代の英國王アーン女皇は孱弱にして才徳共に平庸なる一老女たるのみにして風流の鑑識の如きは殆ど空しく加ふるに當時の社會はた高尙なる審美眼を缺けりしなり、文學の爲に文學を愛重し美術の爲に美術を獎勵するが如き風尙は蕩然として見るに由なかりき。さもあれ今且らく内質の月且をば後にして單に詩文人の數と著作の量とよりいへば十八世紀の英國文壇は決して昌盛ならざりきとはいふべからず。例へば詩壇にはアレキサンデルポープ出で、一世を風靡してよりゴールドスミス、グレイ、バルトストムソン、コリンズ、ヤング等相ついで競ひ起り、散文界には博士ヂョソン、其の學識見によりて騷壇の霸權を握り、アヂソン、スフット、スチール等は諷刺の筆を揮ひ、デフォー、リチャードソン、フィールディング、スモーレット等は英國小説の基を開き、ローム、ギボン等は歴史家とし

て、バルク、シゴダン等は政治界の文士として、この令名を史上に止めき。其の他彼のクラフ、フ街に群居せりし小詩人所謂文壇の窮才子に至りては殆ど枚擧するに遑あらざる也。

かくの如く詞客文人の輩出せしは文學の漸く一種の職業視せらるゝに至りし自然の結果にして十八世紀文學の得失はた此の點に存するなり。當時は印刷の術出版法なども著く進歩したりしかば新聞紙雜誌類は此等小文人の爲にだに紙面を割與し、其の述作の屑々たるものすらも屢世に紹介せられき。さもあれ彼れ等文人の甚だ貧賤なるものに至りては權門に拜趨して庇護を受くる手藝を有せざるのみか其の才多くは謏劣にして清新の作を著述するの才もなければ只漫りに古書を取りて之れが註釋をなし若しくは粗笨杜撰なる翻譯に従事し或は書狀の代筆看板書きなど種々の筆耕の業に従ひ些少の潤筆料を得て辛うじて其の口を糊しむたり而して稀に多く金錢を得ることあれば直に馳せて酒樓に上りシャンパン酒、トケイ酒などに酔を買ひ愈氣昂然として分外の奢侈に耽り榮華をほしいまゝにすること數日、忽然として囊底空乏を告ぐるに至ればすなはちまた四層樓

上の假寓に蟄居し惘々然として曩日の豪遊を夢み日暮るれば敝衣破帽悄然として街巷を徜徉し徒らに車上の人を羨み料理店の前に立ちては佳香に垂涎し珍珠の口に入らざるを歎じ僅かに二三錢を懐に探り得て茶亭の一隅に咖啡を啜り以て一時の口腹を慰む。當代の詞人文士比々として此の類ならざるは稀なりき。前日の得意と後日の失意と實に霄壤の差ありしなり。かゝる輩の塵懷焉ぞ高雅の妙想を藏めんや、彼等は皆名聞に輾轉するの徒文界の寄生蟲に外ならざりし也。要するに當代の文人がかゝる墮落の極端に陥りしは其の氣概なく常操なかりしに職由すといへども一は亦た時勢の然らしめし所なり。

つら／＼千六百八十八年の革命後社會の狀態を見るに紀綱紊亂して法令行はれず賞罰當を失し上流社會は日に益、腐敗を加へ下等社會の如きは陋雜と殘暴との極端に沈淪せりき時の大臣等就中ナルポールの如き政治家は只管卑劣なる籠絡手段をめぐらして國會議員を操縱するを以て治國の能事畢るとなせりき。勢ひかくの如くなりしかばすべて政治家は苞苴の受授を尋常事となすに至り愛國の誠なく節義を重ずるの念なく宗教家を以て任ずる者も大概は虚儀是れ事とし人

倫の大義の如きは之れを餘所にし縦に醜行をなして愧づる色なかりき。政教の壞亂實に斯くの如くなりしかば口に筆に腕に政治上の卑劣なる鬭争不斷に行はれ詩歌文章の如きは殆ど其の一器具たるに過ぎざらんとするに至れり。堂々たる文壇の名家すらも概して此の風潮に捲かれて或は保守黨に屬し或は改進黨に屬し時としては單に一政黨の利用の爲に詩文を作れり。彼のスキフットの「ガリブ」巡島記「アヂソンの「Caro」如きだに一方よりいへば政治上の寓意あるが故に喝采を博せし也。當時嘲世諷俗の文の流行せしは偶以て當代の腐敗を證するに足る何となれば諷世嘲俗の文字を讀みて毫も發憤せざる社會は自家を嘲けられて平然たる社會なり、即ち自家の虚偽自家の耻辱を笑柄となして怪しまざる厚顔の社會なればなり。當代は個人を主とし人身攻撃を旨とせし時代なり。又俱樂部集會類の全盛期なり。而して此等の小團體小黨與は相協力して牽運の進歩を圖りしかといふにさにはあらで互に偏執して割據して區々たる小名譽を争ひあひしに外ならず。彼の無要なる古今文學優劣論の一時文壇を騒がせしが如き閑文壇の痴態を表章するに足れりといふべし。されば學者の理を研究すといふも

眞理其の者の爲に眞理を攻究せしには非ず。詩文人が詩文を愛すといふも文學其の者の爲に著作に熱中せしには非ず。宗教家の如きすら天道又は聖教の爲にせずして私利私黨の爲にせし者比々是れ也。酷評すれば十八世紀は憎怨嘲噓輕蔑の盛に行はれし時代也。此の故に當代の詩文人は動もすれば他の缺點短所のみを評きて其の美を看過し警句をもて他を嘲罵するをのみ得意とせり。所詮十八世紀は自負自慢主我利己の時代也個人としては自家をば獨り尊しとし社會としては當代の社會をば獨り尊しとなし、時代也。尠くとも眞摯幽玄なる詩歌の乏しかりし時代なりき。就中其の初期に輩出せし詩人はおしなべて韻語家即ち修辭家也眞に詩の神髓を解し詩人の天職を意識せしものは殆ど鮮し。十八世紀は又名けて擬古文學の時代といふ。蓋し佛蘭西を経て入り來たれる古文學の法則が當代の諸英才を拘束して瑣屑なる修辭の技にのみ専心せしめたりされば詞句の精鍊は前古に比なく抒情の詩景物の文筆は微に入り細を穿ちたれども創新の氣は甚だ貧なり。試にボーンが詩の一篇を取りて誦すれば其の調格は優雅を極め水晶盤上に珠玉を轉ずるが如き概ありて踏鏗たる餘響の耳朵に残

るを覺ゆれど更に深く翫味すれば思想の淺薄と感情の浮泛とは遂に之れを蔽ふべからず。一代の詩宗已に此くの如し他はまた謂ふに足らず。彼等の多數は感得する所ありしが故に作せしにはあらず、作せんが爲に工夫せし也。但し當代の後半に至りてバルンス、トムソン、コリンズ等輩出し自然の美に思を凝らし人心の誠に重きを置きしがそは猶新詩風の萌芽たるに止まり眞の醇なる神韻は十九世紀のウォーズワース、ゴールリッチ等の作を俟ちて世に布かれし也。

按ずるに第十七世紀の末に至るまでは詩歌、即ち律語の文學は常に英國文學の首位をしめたり散文の文學の如きは只僅に詩歌に附隨して徐々たる進歩をなし、に過ぎず。ウィックリフの譯筆や、ベニコシ、フッカーの論文や妙は即ち妙なれども其詩境未だチヨイサー、シェイクスピア乃至スペンサーに及ばざること遠かりしなり。換言すれば純文學の神髓たる想像の妙趣は概ね常に律語を以てのみ發揮せられたり散文に至りては毎にたゞ平直なる思想をのみ表白するの具たりし趣あり。然るにこの趨勢は第十八世紀の初期よりその傾向を異にし韻語はむしろ機械的技術となりゆき詩歌の神髓に至りては知りて他の散文學即ち彼のアチソン等の

散文に吸引せられたり。

これ實に所謂散文詩(小説)勃興の兆なりき。かくの如くにしてデフォー出で、こゝに英國寫實小説の曙光輝きそめリチャードソン出で、所謂心理小説の胎子成り、ついで十九世紀に至りてスコット、 Dickens、 サッカレー乃至ゾールヂ、エリオット出で、長足の進歩をなすに及びやがて英國の文學は詩歌散文の兩面共に始めて全きを得るに至りたり。而して其の初め西班牙に行はれし冒險譚を換骨奪胎してフィッランゴ、スモレット等の爲に新小説の途を開きし者は誰ぞといふに、そは佛の作家ヘルサース(The Sage)なれば佛の散文詩は英の散文詩の祖たりきといふも、とより不可なし而も佛の批評家等は公平に英の小説を歓迎し却りて其の出藍の功を稱しき。

その頃歴史的文學も亦著く進歩せりき。佛伊兩國人は從來傳記、史論の述作に名ありしかど歴史の本分の歐洲に實現せられしはじめはヒューム、ギッボンに負ふ所多しといふべしヒュームの『英國史』ギッボンの『羅馬衰亡史』出で、後歐洲の修史事業は面目を一新せりといふも過言にあらず。其の他哲學科學の實用を旨とす

る論文も漸次この面目を改めペーコンの簡樸ロマンの質實ドライブンの雄麗より進んで強健壯麗にして彈力ある一體を成すに至りぬ。

散文文學のかく著く發達せしに反して韻語文學の衰頹せしことは前にも一通りいへりし如くなるが劇詩界の凋落に至りては更らに一段甚しきものあり。蓋しこれより先き一千六百六十年の王政恢復より一千七百年に至る三百四十年間英國の劇壇は前十八年間興行を禁ぜられたりし反動にて大いに盛運を來たし彼のロングリーヴ、オートエー等各一派をなして斯界に掛立し共に新作に乏しがらす。然れどもその喜劇は彼のエリザ朝に行はれし人情上滑稽を失ひ去りて單に舉動容姿の上の可笑味を主とすることとなり、かくて遂に清淨教徒の嫌忌を受けて意に禁止せらるゝに至りぬ。されば一千六百九十九年には英國は歐洲中にて喜劇作者の多様なるを誇りたりしにそれより僅かに十年の後には喜劇の命脈はたゞコリー、シッパの筆によりて辛くも一縷の危きを維々に過ぎぬ有様となりき。かくて十八世紀の劇詩界は専門一派の作者といふもの全く跡を絶ち普通無修養の文士が折々に作を試みし迄の事なりしか故に隨うてその貢獻する所甚だ

少く、幾かにゴールドスミス、シェリダン等がロングリーヴ、ウィッチェリ等の作を修正して多少の作を出だしに過ぎず。十八世紀は實に劇界の暗黒時代ともいふべし。

第二章 アヂソンとスヰフト

アヂソン——其の生涯——其の著作——其の特質——其の文林——スヰフト——其の生涯及び著作——『植物語』『ガリヴァー巡島記』——其の特質。

此の詩歌不振の時代、いづれかといへば常職全盛の時代、散文學興隆の詞壇に諷刺家として評論家として鐵中鋒々の譽ありし者を誰れとかなす。曰はくアヂソンとスヰフトと是れなり。また博學多才にして文章を行ふに自在なると人を啓發し感動するに妙を得たると常に黨派心を脱すること能はざるとは二者ともに殆ど其の傾向を同じうす。而も其の閱歴と性癖とに至りては古來此の二家の如く相乖反する者は甚だ稀也。蓋しアヂソンは當世の寵兒にしてスヰフトは當代の憎まれ兒なり。前者は多幸にして後者は薄命、前者は温厚にして後者は酷薄、前者は優雅にして後者は粗獷、前者は人間を愛憐し後者は人間を憎怨し前者は其の最

も美なる時には君子の如く後者は其の最も醜なる時には怒れる夜叉の如し。
 Joseph Addison チョセフ・アチソンは一千六百七十二年五月我が朝靈元天皇の寛文十二年、伊藤東涯時に三歳ウエルトシヤに生まれき一牧師の子なり。幼にして其の友スチールと共にチャーターハウスにて學業を受け十五歳にしてオックスフォードなるクリンスコレッジに入るに及び夙に羅旬語もて韻語を綴りて詩名ありき。卒業の後幾ばくもなく國王の徳を頌する詩を作り其の賞として一年三百磅の年俸を得たりしがやがてまた大陸漫遊の旅費を賜はりぬ。其の嫺雅なる本性と圓美なる文才とは歐洲に於ける最も文華なる國伊太利佛蘭西の歴遊によりて更に圓美の致を加へき。按ふにアチソンが文章の優美嫺雅は主として其の本性の温雅なりしに由るなり。爲人寡黙恭謙にして何事につけても他人と争ふを好まざりきされは政治論者としては改進黨自由の主義に熱中したりしにも拘らず曾て其の反對黨をだに痛擧せしことなく隨うてあらゆる黨派に憎まれず改進黨派大敗の秋にすら衆議院議員に選舉せられし程なれば改進黨全盛の際には累進して國務尙書の高官にまで經上りにき。是れ必しも其の政を作らざるやうに力めたり

し結果にはあらずむしろ其の天成の愛嬌と高雅温順なる資質の致す所なりきと解するかた妥當なるべし。

一千七百九年其の友スチールが『クォーター』といふ一雜誌を發刊せしやアチソンは寄書家として之れを助け一千七百十一年『スペクテーター』の代りて出でしや引續きて其の紙上に執筆しさて一千七百十三年には悲劇『Cato』といふを作りて劇場に演ぜしめ三十五夜ひきつゞきて興行せしめし程に成功しき。かくて一千七百十六年に至りて結婚し其の翌年秘書官に擧げられ同十九年病に罹りケンシントンの家にて逝りぬ。時に齡四十八歳なりき。

アチソンは博學多才なりしのみならず廣く人情に通じ世故に老いたり。彼れは人を娛樂せしむると同時に人を啓發し獎戒するを目的とせり現に其の傑作『スペクテーター』の如きは大不列顛領外へ醜徳と無識とを驅逐するを主意として發せし雜誌なり。さるからにアチソンの論文は一として修身齊家の訓言ならざるはなく温和なる嘲世諷俗の文字ならざるはなし。彼れは野を憎みて雅を愛し利慾を斥けて義務を獎勵せり。然れども彼れの論ずる所は詮するに悉く現世的實

際的にして曾て幽遠深遠なる能はざりき其の宗教思想の如きもまた殆ど俗臭を脱する能はずして屢々未來世を語るも曾て現世間の幸不幸を忘れざるなり要するに未來を餌として現世の善行を奨励せんと力めたりしに外ならざるが如し。彼れは曰はく今世に於ける人の務は知るにあらざりて行ふに在りと其の實踐躬行を旨としたる如何に儒學の旨に似たるかを見るべし。又曰はく、

哲學を天上界より取りおろして人寰に扶植したるは我か力なりミソクラテースは云へりしが、我れは又その書齋、圖書館及び大學校より取りだして普通人士の茶席酒席に移したるは我か力なりさいふを俾らす。

と眞に然り。テーンは此の點よりアヂソンの思想の高からざるを誹りたれども俗を誨ふるを目的としたる通俗雜誌の記者としては蓋し已むを得ざりし所ならんか。テーンは曰ふ、アヂソンの修身論は道義といふことをして一種の流行とならしめたりき是れ瑣事にあらずとこは其の通俗の諷戒の當代に尠少ならざる効ありしを稱するなり。

アヂソンの文章は優美の極平淡となり平淡の極生氣の缺乏を致せりかるがゆゑ

に往々にして平板枯淡の弊なき能はず。テーンは評していふ、彼れは説話者なり目撃者にあらずと。げにアヂソンは説話體の達人なり彼れは喜怒哀樂せずして人間百般の出來事を語り得たり。テーンはまた謂ふ、アヂソン等古文學者はまことトットの眞理トットといみじき創意オウチヤウチとを重んぜずして偏に麗しき排置と善美なる秩序とを愛すと。此の評は動かすべからず。アヂソンは其の作(就中詩)に於ても其の論評に於ても専ら規律を重んじたり。テーンは最後に『サー・ローヂヤード、カヴリー』を評して一野史とも見なすべき傑作なりとし又た『マーザの夢』を評して克くアヂソンの特質を現じ盡くしたるものといへり。要するにアヂソンは専ら散文の名家として推重すべき作家なり彼れは韻語を能せざりしにあらざれども彼の燃ゆるが如しといふ抒情詩人的情熱無し。上は其が詩人としての聲譽を博せし處女作『The Campaign』(ブレンハイムの戰を歌へるものより下は其の得意の樂劇)『ロザモンドの悲劇』は勿論カト』及び其の寓意の華文の傑作『マーザの夢』に至るまで一として大學派的ならざるなく技巧的アウチヤウチならざるなし是れ彼れが賞鑑の標準の高上ならず且つ創新ならざりしにも因れど一は擬古を第一とせし時尚の影響な

り。彼れはドライデンをよなき詩人の如く激賞せり彼れの尤も歎美せしはドライデンが翻譯の技倆なりしが如し、さればシェイクスピアの眞技倆の如きはアチソンの批判眼の嘗て眞成に觀破し得ざりし所なりとほし。アチソンの長所は已に前にいへるが如く、而して其の鑑識はかくの如し故に尤も彼れに於てい服すべき所は其の觀察の穩健にして精細なると其の措辭行文の巧妙嫺雅なることとにあるべし。其の觀察は彼のベーコンの如く抽象ならず隨うて其の文章もベーコンの如く雅に失せず、すなはち觀察はすべて具象的にして鑿々據る所あり、語はすべて雅馴にして而も俗に通し易し。是れアチソンの特質にしてまた十八世紀文學の特質なり。

アチソンが著述のうち其の名作なるが爲に若しくは其の傑作なるが爲に越くとも一讀過すべき價值ある者はほゞ下の如し。韻語の詩人としてアチソンを看るべき料は

(第一)其の二十二歳の作『ドライデンに寄するの歌』はドライデンを激賞せる韻語の評論ともすべし。

(第二)伊のテールが作 Fourth Georgie の一分の翻譯。

(第三)伊國滞在中にハリファックス卿の許へ送りし書狀。

(第四)前に挙げたる『カムベイン』といふマールボロウ將軍の大戦勝を讚美せる歌。

(第五)『ロサモンド』といふ伊太利風の樂劇。

(第六)『カト』と題したる古代劇風の悲劇。

さてまた散文家批評家としての彼れが技倆を窺ふべき著述は一千七百〇九年にステールを幫けて執筆せし『タトラ』といへる雑誌及び同十一年に専ら主となりて發行せし『スペクテーター』は英國通俗雜誌の開祖の一に列すべきものにて毎朝の發兌六百三十五號まで續きたり。其の主意は前にもいへるが該誌に載せたるアチソンが文章は眞に種々雜多にて堂々たる長論文もあればをかき滑稽の諷刺文もあり考證に類する文章もあれば端物小説に似たる物語もあり輕妙なる寓意譚もあれば洒々落々たる論文もあり。假に種々の人物を作りて眞に實在せる人の如くに狀寫し殆ど寫實小説を讀むが如く思はしむる文もあれば嚴肅なる

倫理を談じて、そらるに讀者をして襟を正さしむる文もあり。さて此の千變万化の論文、諷刺文、比喩談、戯文等いづれもとり／＼に面白きなかに取りわけて玩味すべきはサー、ロイヤル、デカブリーに關する諸篇、マーズの夢と題したるが寓意談、ミルトンを評論して『失樂園』に及べる長篇、英文評釋に訓釋せる數篇、頓智滑稽を論じたる諸篇などなるべし。

アヂソンの詳傳は一千八百四十三年にルシ、エイキン (Aikin) が著したるを最とす。A Life of Addison と題したるものは是れなり。彼のマコーレーが有名なる『アヂソンの論』を物せしは該書を評してなり。又近きころの編集に係るもの趣からず、詳なるを知らんと欲する者は此等に就きて此の作家の長短を考究すべし。

アヂソンの散文家として盛名は最近年に至るまでも英米の文壇に轟るき隨うて『スペクテーター』の功績は殆んど悉くアヂソン一個人の功績の如く見做され、其の信友たり同輩たりしサー、リチャード、スチール、の文名は爲に蝕盡せられたる觀ありしが近年に至りて批評壇に種々の反動起りしと共にスチールの文名大に揚がり、今の批評家中間々アヂソンを抑へてスチールを揚げ、前者の筆は洗鍊なるも

彫琢に過ぎて巧に失したる跡あり。スチールの文の瑕疵あるも眞熟爛漫、天真を註はざるに如かずと評する者あり。げにやアヂソンは雅健なれども自然と洒脱は或はスチールに一步を譲るべく而して其の勁拔と創新とに至りては遠く下に語らんとするスウィフトの下にあるべし。

或人曰はくアヂソンが文章の大いに見るべきに至りしは彼れがスウィフトの『桶物語』を熟讀しての後にありきと。こは蓋し争ふべからず、彼の奔放自在の想像を馳せて滑稽諧謔のうち、諷刺辯難を擅にするの一跡はまさしくスウィフトの創才に屬す。而もアヂソンは一讀その骨法を神會して更らに婉轉滑脱の妙を以てせり。彼れの文を草するや一語苟くもヤザ毎句毎節の權衡十分に音樂の節調に愜ひ、毎辭毎章最も輕妙にして光澤ならんことを理想としき。ウエルシ曰はくアヂソンの文章は最も雅麗にして最も醇粹なる英文の標本なりと。

Jonathan Swift 當代の最も驚くべき人物として又最も創才ある文豪として雷名を後世に傳へたるデヨナサン、スウィフトは千六百六十七年(我が朝靈元天皇の寛文七年) 荻生徂徠二歳、新井白石九歳に生れて千七百四十五年にみまかりき。我が朝にて

はこれより三十四年を経て平賀鳩溪歿したりき。スホフトは或は大愛蘭士愛蘭家など稱せらるれど其血統の上よりいへば同國の首府ダブリンにて生れたりし一事の外は愛蘭土に何等の縁故もなく父母共に英國人なりき。スホフトは幸にして其出生以前に父を失ひ生まれて幾ばくもなく母に離れ叔父某の手に養はれや、長じてダブリンなるトリニチー大學トリニチーに入りたりしが數學の成績あしかりし爲に四年修學して「パチエロア」たると能はず更に三年の學を修めて幸く假得業生たるの許可を得たりき。一千六百八十八年其の叔父を失ひ母かたの縁者にして時の政上に勢力ありしソル、シリナム、テンブルが邸に寄食せりその頃希臘の詩風に倣ひて若干の韻文を試み「Pindaric Odes」四篇をもつてその親族なるドライアンに似けるにドライデン之れを一讀して其の頼みなきをいひぬ而してスホフトまた詩作に熱衷せず専らその功名心を教會の榮職に向けたりき心竊かに監督長大僧長大僧地位を得んとを望みたりしなり。已にして其の主人テムブルと善からず乃ち去りて愛蘭土に越きコンノルの牧師職に在りしが不如意漸く加はりて衣食の資に窮するに至りしかば止むことを得ず耻を忍びて英國に歸り來り罪を謝

して更にテムブルが邸に寄食せしが自尊傲慢の心と燃ゆるが如き功名心とは爲に益平なる能はざりき。かくてテムブルの病逝するに及ひてスホフトは其の遺産の分與を得て幾分か生計上に便益を得たりしのみならず判官ベルケレー卿の侍僧となりて愛蘭土に赴くに及ひて邸地及び莊園を給せられ其の名もまた漸く世人に知らるゝに至りたり。而して一千七百〇一年にはドクトルの學位を得たり。後政治界の論文家として公生涯に現れ種々の政治論及び諷刺の著作ありき。後者の著名なるものは「Tale of a Tub」及「Battle of the Books」なり。但し此二者共に匿名にて出版せしものなり。

スホフトが憎人義ミスマンは夙に其の幼時に端を發し其の寄食時代に發達し其の失望と不遇とによりて増長し遂に甚だしき狂暴と残忍とに流れたりしがはじめて政治論壇に現はれところは比較的にいへば彼れが一生の得意時代にして才思想像は沸くが如く譁見はた方に成熟せる時なりしかば彼れの本性を窺ふべき作は却りて此の頃の著述にあるべきなり。たとへ其の偉大なる特質は當時の諸著に於いては見るべからずとするも其のさすかに本來の悪魔にあらざして一面愛すべき

品性をも具へたりし證は此の第一期の作に於てこそ徴すべきなれ。『桶物語』はスキャットが傑作の隨一なり其の老後にみづから此の著を評じて曰はく "Good God, what a Genius I had when I wrote that book!" (嗚呼我れ何等の秀才なりしぞ彼の書を物せしころには)と。評し得て的當なりといふべし。まことに是れスキャットが才氣の旺盛せりし時の作なれば讀む者其の落想の斬新なると其の筆致の輕妙なると其の諷刺の深刻なるとに感歎し一たび之れを緝く時は卷を描くに忍びずして轉其の短簡なるを惜まんとす。此の書は種々に分段せられて説話間、岐路に入りたればこは其の實物語と名づけんよりもむしろ一種の論文とも名くべきものなれども本來諷刺を主腦として作りたる寓意譚なるがゆゑに桶物語とは名けたるなるべし。物語とは當時水夫の間に鯨魚を避くる爲に桶を投ずるのならばしありしに因めるなりとぞ。按ふに桶はずなはち此論文を指し鯨は暗に當代に彌漫したりし宗教上の懷疑主義を指したり而して本船其物は時の英國正教會に比したるなり。蓋しスキャット此の一小桶を正教會の爲に投じよりて以て其の歎心を買ひ鯨ならぬ大僧正の榮職を漁獲せんと期せりしなり。物語の本

文は第二段よりけじめられ其の發端の大意は左の如し。

一父あり其の死ぬるや其の三子ヒートル(羅馬教會に比す)マルチン(英國教會に比す)及びウィヤック(背國教徒に比す)に遺言して其の家産を遺したり然るに此の三子世の流行に動かされておのづかしくほしむるに遺言の義を解釋し遂には悉く家産を破り三種の服裝三様の生活相争うて止むことなし其の中尤も穩當なるはマルチン云々。

基督教會の法規を老父の遺したる衣服に比し三種の教派を三兄弟に作り做し其の特殊の性行を叙して暗に三教の長短を評する所奇想百出滑稽諷刺が如く筆鋒銳利或は羅馬舊教會を罵倒し或はカルビン宗派を嘲殺し兼ねて全社會を諷刺し來たる眞個有數の奇著といふべし。或はかゝる作を名けて諷刺的戲論文ともいふを得べし文章はあくまでも古物語の跡を模して嚴肅なれども旨意は悉く嘲諷なればなり。但し此の『桶物語』の妙は其の實本文たる寓意譚其の物にはあらずしてむしろ著者の所謂岐路談にありこは實にあらゆる當時の専門家學者輩を諷刺治嘲したるものにて明かに後ちの『カリブー巡島記』の先驅なり。而してこの書の出版せられしは一千七百四年のことなれどその脱稿せしはそれより七年前なりしといへば第十八世紀の散文學の門戸はまさしくスキャットの手に開かれたるか

の觀あり。

「Battle of the Books」もまた同じころの戯作にしてこれは其の公主キルヤム、テムプルの偽に著ししものなり即ち文學上に於ける古人と今人との優劣に關して當時の文壇に一大争論の起こりし時テムプルの説を辯護し古人を褒め今人を嘲りて此の作をなせり。前の『桶物語』に比ぶれば其の旨味幾段か下りたれど諷嘲の筆の妙はこれにも見るべし。

さて上にも已にいへる如くスヰフトが半生の大目的はひとへに監督長(大僧正)の榮職を得んとするにありしが件の『桶物語』の銳利激烈なる諷刺は八面に敵を讒し羅馬教徒背國教徒はいふも更なり彼れが力めて其の歡心を得んと欲せし英國教會の僧官すら多少の惡感を抱くに至りしかば其の宿望は遂に成らざるに愛蘭土なるセントパトリック院の副監督師たるに甘んぜざるを得ざるに至りぬ。按ふに是れスヰフトをして憎人怨世の念を増長せしめし一因なるべし。さてまた政治上にてははじめは時の在野黨即ち民黨に左祖しそが爲に筆を揮ひしことも屢なりしが中ごろ變心して専ら保守黨(左朝黨)を助けたりきこは其の功名心を満足す

るの階段を求めしに外ならず。而して其の第一の目的たりし監督長の職を得る政府の政策を非議せり。彼の愛蘭土の爲に「レヒヤ」といふ假名にて七篇の書翰體の論文を草し之れを「マフリン」の新聞紙に掲載せしめ一世の視聽を聳動せしが如きは其の一例なり。こは新銅貨の發行に反抗して愛蘭土の利益を擁護せし有名の論文にして其の諷刺の如きは特に冷酷を極めたりされば愛蘭土の民心は爲に甚しく激昂し一時はスヰフトを其の守護神の如く崇敬するに至りたり。其の頃スヰフトなにかしに謂つて曰はく我れ若し一指を舉げば英の内閣は粉塵となりんと而してこは假空の大言にはあらざりしなり。

スヰフトが眞の傑作は明に「ガリッヅ」巡島記」なり。こは一千七百二十四年より同三十七年に至る十三年間に成れるものにて彼れが五十七歳の時に着手せる作なり。此の著はシウウの評したる如く A vast and all-embracing satire upon humanity itself (本間全體を諷刺したる廣大の作)なり固よりの私の憤怨の爲に個人を攻撃せる影も見ゆれど今日の讀者より見れば此の著の面白味は主に其の全體の諷刺にあり。趣くとも人間の暗黒面は常にかくの如く見らるべしと信ぜらるゝ點にあり。換言

これは「ガリヴァー」巡島記」は恐らく長永に存在すべき我が人生の醜態なる方面を除き、蘊無く描破したる作なりとも評すべし。之れを一種の小説として見れば其の寫實的結構及び其の寫實的狀寫の筆の周細精緻にして殆ど一毫の微をも遺さざるが如きは下に小説家の章下に語らんとするデフォーが「ロビンソン・クルソー」を伯仲の間なり。文章の質樸平淡なるはた頗るデフォーに似たり。但しデフォーはあらしき事を多少實驗を材としてげにもあらしき、書きいだしたれどスウィフトは世にあるまじきことを例の深刻なる想像によりてげにもあらしき、寫しいだせり以て兩者の技の一ならざるを見るべし。

「ガリヴァー」巡島記」は前後四篇より成れり其のうち身長僅に六寸弱の人種の棲める小人島の巻と身長六十尺以上の怪物の棲める巨人島の巻とは人間界の事物例へば官爵名利等の如何に些屑陋劣にして取るに足らざるか及び人間以上の物の目よが見ばあらしめる人間の行爲(智力上及び体力上の諸行爲)の如何に憫笑すべきものなるかと例の奇想天來の筆を以て縦横に諷刺せるものにして二者共に同一諷刺なれども其の諷刺の鹽梅はさながら望遠鏡を順逆の二途に利用して山水の遠

近濃淡を察すると一般に或は人間を優者として見せ或は人間を劣者として見せ或は大にし或は小にし以て人間の眞面目を發露し盡せり。さて第三篇は「飛島の巻」なり、こは専ら哲學者、科學者輩を嘲倒したるものにて有名なる Lagado 大學の記事の如きはルシアン、ラベレー等の作意に負ふ所も尠からずといふ。但し此の巻は四篇中の劣作なるべし諷刺や、荒みて淺露なる戯態に流れたればなり。尙此の巻の中には他の種々の島巡りあれどくゞしければ爰には言はず。第四篇「フーインム國の巻」(Houghnims)即ち賢馬國の巻はスウィフトの特質と十八世紀の暗黒面とを知らんとする者の是非に一讀すべきものなり。此の島國に棲める人間めく動物を (Yahoo) といふ是れ明かに作者が滿腔の憎人主義を母として人間の醜惡を代表せんが爲めに生まれたる怪物なり恐らくは此の一篇は所謂宗教家者流の殆ど正讀し得ざるほどに慘刻を極めたるものなり。我が「和莊兵衛」『夢想兵衛』のたぐひはいふ迄もなく此の「巡島記」のあらずを長崎あたりの和蘭人などより耳聞して案を構へたるものならめども其の根柢の主意は此れと彼れと霄壤の相違みれば到底日を同うして睡るべからず。また我が國の評者のうち或はスウィフ

トを鳩溪に比しスホフトの覺かに大なるを認めながら尙三者の文品を兄弟せんとする者おれどこれまた失倫の月且なりスホフトと鳩溪とは異くも文致の上に於ては晝夜の差別をなす者なり。前者は嚴肅にして後者は戲謔なり彼れは濼面にして此れは冷笑なり彼れは大氷海の如く此れは溷浪の澎湃たるが如し。』
スホフトは壯より腦病になやめりしが一千七百四十一年以後持病漸く激しくなりゆきて竟に同四十五年に逝りぬ。死前三年間は絶えて物おびじとなくさながら憲議なきものゝ如くなりきといふ。絶望と怨憤との間に其の心狂ひたりなり。

『英國十八世紀文學史』の著者ゴッス曰はく「十八世紀前半の偉人たるスホフトは後半の偉人デモンソンよりも偉なり彼れは第一流の創新を有す。彼れの性質は炎たる猛火の如しこれに近づぐものをして同じく燄を擧げしむるかさなくば彼れが光力にて他者の光を消失せしむるかとの二途にあり。(中略)その怒るや殘忍暴戾なること遙かに人性の上に出でその無心なるときはさながら猫兒の嬉嬉なるが如くその戲謔するや虎兒の無邪氣なるに似たり。(又略)彼れは當代第一の溷俚

見絶望家にして又當代第一の偉人名士なり。彼れは悉く怪訝すべく殆ど端倪すべからず彼れは矛盾の塊なり世界の好奇心の目的物なり多數人の畏避する所少數人の熱崇する所也。評し得て餘蘊なし但し本文に叙する所は彼れの生涯を悉くさすれば讀者恐らくは其の和らぎて媚撫する由縁を解せざるべし此の怖るしき悪魔王か前後二佳人に戀愛せられ如何に珍らしき家庭の悲劇を経験せしかは宜しく彼れが一千七百十年より同十三年に至るまでの私事をも記せる「Journal to Stella」を始めとしてポイル、スコット、クレーク等の詳傳に就いてこれを知るべし。
アチモン、スホフトは十八世紀前半に於ける時文壇の驍將なり殊に所謂小冊子の論文家として下に語るべきダニエル、デフォートとならべ稱せられ或は羅馬の三議政官に對比せらる。すなはちアチモンはレヒダスに比すべくスホフトはアントニーに比すべくデフォートはオクタヴィアスに比すべし。

第三章 十八世紀前半期の散文家

スチール——「タトラー」——「スペクテーター」——「シナプツァリ」
マルク——其の他の論文家

四〇八
當代散文の名家はアチソン、スヰフトの外に上に挙げたるアンダーソンを始めとしてスチール、ベントレー、ミッドルトン、ブービー、スノット、アッダーベリー、ポリー、リンダ、ブローク、パトラー、シャフツベリ侯、マンドギル、バークレー等あまたあれど一々精説する能はざればこゝにはスチールより始めてその著作と文牒との概要を述べデフォーの事は章を改めてその寫實小説の端緒を開きし事を述ぶると同時に語るべし。リチャード、スチール Richard Steele はアチソンと同様の方面に於てアイン女皇朝の散文壇に一世の指導者たりし者なり。アチソンと同じ年に生まれて一千七百九十二年に歿しき。幼時はチャーターハウスにてアチソンと同様の友たりしがオックスフォードの大學に入るに及びて二人はその科を異にしアチソンはクライストチャーチに入りスチールはマクダレン大學に入學しき。二十四歳の時去りてメルボーンに赴き女皇マリーの葬儀を歌ひたる“The Procession”といふものをしてかッパハ公より年金を得たり。かくて船長となりて數年を送りたりしがやがて“The Lying Lover”“The Temper Husband”“The Conscious Lovers”等の喜劇を作せり。就中“The Tender Husband”最も見るべし。そはアチソンの助筆の力にてもあるべし。これよりア

チソンの紹介によりてスヰフトと相知るに至りしか三者の交情甚だ厚かりき。一千七百九年スチール隔日新聞「タトラー」The Tatlerを發行すアチソン、スヰフト等その寄書家たり。この新聞は在野黨の機關にして政治新聞なりしか家庭娛樂詩歌、學術、内外時事、雜錄等の諸欄を設け社會教導を以て主とせり。この新聞紙二百七十一號にして廢刊し「スペクタター」Spectator代りて出でき。是れより先きスヰフトはその政見を變更せしが爲めスチールとの友誼は全く破れスヰフトは「タトラー」を指して「世界中最悪の同伴」と爲るに至りたり。『スペクタター』はアチソンとスチールとの設案に成りミストル、スペクタター（傍觀子）と呼べる紳士を中心としてサー、ローツヤード、カブリなんどいへる人々が一俱樂部を組織して時事を論評すといふを根本の趣向として綴りはちめたる新聞にして一千七百十一年三月より翌年十二月まで日刊の號數五百五十五に及ぶまでよく一世の視聽を聚中せりき。この中アチソンは二百七十四冊をものしスチールは二百三十六冊に筆を執りジョン、ヒュースといふ人（一六七七—一七二〇）“The Siege of Damascus”といふ悲劇の傑作ありは十九冊、ポープは一冊を編みき。

勿論此の他にも寄書家はあまたありしことゝ知るべし。翌年ステールは更にまた「ガーディアン」『The Guardian』を發行せしがスミスどの政見上の争ひいよいよ熾んとなりしが爲め遂にこれをばアチソンに委ねて自らは進んで議院に入り直ちに輸贏を決せんと試みしが却つてスミスどの爲めに破られて議院を逐はれ再び筆を執りて二三の新聞紙を起し之れに盡瘁せざりしうちホイック黨は遂に凱歌を擧げ新王ジョージ一世の代に至りてアチソンは擧げられて秘書官となりステールもまたドリドリ座の管理者となり且つ士爵に叙せられて再び議院に入りぬ。後ち數年にしてアチソン歿すこれより以後ステールの著作に見るべきものなく政治上にも爲す所なく漸次窮迫に陥りて十年の後その友のおとを追ひき。

ステールの性質はその美なる諸點を見ればよくアチソンに似て更らに一段その度を強めたる程なるが物に激するときは屢理非を忘れて専心これに投ずるの癖ありしが故に隨うて失敗も多く竟にアチソン程に圓滿なる生を下ふる能はざりき。さもあればこの熱心專注の性は彼れをして物の缺點を見て忍ぶ能はざらしめ種々の企業をなさしめたり。アチソンは考へステールは行ふ。ステールはアチソンよりも毎に一步づつ先きに指を事に染めてアチソンを促して共にその業を成さしめたるの觀あり。彼れの時弊を觀るやあほむね的中しその救濟の方また概して宜しきを得たりき。當時社會の風紀壞亂し其の娛樂の如きは浮靡荒淫にあらざれば殘忍殺伐世を擧げて風雅人情の何たるを解せず貴公子貴女にして目に一丁字なきも恥とせず眞風流を談じ古詩を語る者あれば却りて迂腐の人として撥斥するの傾ありき。事態既に斯の如しステール乃ち謂へらくこの人士を教導するには普通一般の道話法語を以てすべからず彼れ等は説いて理に亘れば解する能はず戒めて嚴なれば堪ふる能はざる薄志無能の女性的社會なり彼等は今や宴樂のまいたい中にあり到底濫面を以て臨むべからずよろしくその遊戯せる時を利用し滑稽可笑の顔色と言語とを以て之れが心裡に潛入し以て内部より感化を行ふべしと。かの如くにして『タトラル』田で斯の如くにして『スベクトート』に出で以てよく一世を風化するを得たりしなり。

ステールは文思豊富才氣溢るゝが如く其の説く所よく俚耳に入りて快活喜ぶべ

しと雖も過ぐるときは即ち嘲諷度なく修飾を壊り体裁を失ふこと少からず。而も近世の評家多くはその天眞の流露せるところを稱す。

さて當代の論壇にはアフォー、スキャット、スチール、アチソンの四家を中心としてあまたの散文家ありしが彼等は皆期せずして平易通俗といふ點に傾きを同うじ而もあつく特色ありしが或はスキャットに或はアチソンに或はアフォーに多少師表を求めたる概あり此の四家以外に出づることを得たる旨は殆ど空し。

リチャード・ベントレー Richard Bentley (一六六二——一七四二)はケムブリッジ大學の出身にして古文學に精通し同校にて神學の教授となり又そのトリニチ、コレヂに學長たりき。著はす所 "Horace," "Terence," "Phaedrus," 及 "Milton," 等あり。文章は典雅明暢。"Phaedrus" は其の傑作にして『ミルトン』は其の悪作なり。

コンヤース・ミッドルトン Conyers Middleton (一六八三——一七五〇)はケムブリッジ大學の圖書館を掌りて古文學に通じ論壇に立ちてはベントレーの反對者中最も有力の人なりき。著書の中にては "Life of Cicero," 最も名あり。その他宗教の歴史に關する著述若干あり就中 "A Free Inquiry into the Miraculous Powers by the Christian Church,"

『基督教會の神秘權に對する自由討究』といふ一書の如きは近代の合理信仰派の所説の前驅とも見るべき所多かり。文體の平明なること當代第一に位す。

ジョン・アーボースノット John Arbuthnot (一六七——一七三五)は誠忠なるトーリ黨にしてロンドンにて女皇アーンの侍醫となりスキャット、ボープ等とも親しく交りき。中にもスキャットとの關係は此間より「スキャットの月球」(小スキャット)といはれたる程にてよくスキャットの光を受けて反映せりき。その傑作 "History of John Bull," 及び "The Memoirs of Sciblerus," 等の如きは諷刺の冷酷にして痛快なる殆どスキャットと甄別し難き程なり。

フランシス・アターベリー Francis Atterbury (一六七二——一七三二)はウェストミンスターグランドの副監牧師にして花やかなる説教文に長じ且つ書簡をよくし批評にも名ありき。然れども其の文章は要するにアチソンを學んで未だ至らざるものなり。

子爵ボリーリントン・ボリングブロー克 Bolingbroke (一六七八——一七五一)は少壯にして議會に入れり。辯に於ては有名なるピットをして「英國前代の雄辯中の最も奥ゆかしきもの」と稱嘆せしめし程の名家なりしが文學は其の政治上に於て逆境に陥りし後

の餘業なりき。"Letters to Sir William Wyndham" "Ideal of a Patriot King" 等は其の名著なり。文章は修辭上の用意の周細なるを特質としたれども送迎頻繁なる日常の出來事を評論するに濃厚なる修辭は却つて時人に悦ばれずさりとてかゝる修辭を要する程の題目は當時の出版物に禁物なりきと論者は言ひたり。彼れは實に不幸なる時代に生れ出でたりし也。

シャフツベリ侯(一六七一—一七一三)は名をAnthony Ashley Cooperとす。幼時は哲學者ロッチの手に教育せられ長じて後ちも大學に入ることなく廣く外國を漫遊しき。さて歸國の後ち下院に入り又上院にも入りしがど政治上に於ては別に頭角を表はすこととてなかりき。その著作は集めて三冊あり題して"Characteristics of Men, Nations, Opinions, Times"と云ふ。氏はアレストーの系統を引ける思想を有し頗る創見に富み殊に宇宙の大調和に關しては幽玄なる思想を有せりき。又文學の批評に於ては久しく一世の師表たりし趣あり。蓋し氏は「教育最も完全にして好尚最も粗野なる」當時の大學出身にあらずしてロッチの直示を受け更らに大陸の文藝美術に親炙したる感化を有したれば氏が哲學說美學說は後ちの學者文人に

影響する所少なからず現にボーンが「人間論」の如きも全くシャフツベリの説より出でしものなりといへり。さて氏が文章はよくその思想に似て森嚴莊重の致あり。ゴッス氏は諸點に於て彼れはオーガスタス時代のラスキンなりと評したり。シャフツベリのアレストー的樂天說に反抗して厭世說を唱へ天道人倫は畢竟人を不幸に陥るゝものなる由を論じ出でたる者を

バーナード・マンドギル Bernard Mandeville (一六七〇—一七三三)となす。もと和蘭人にして少よりロンドンに移り住みて幣を業とせしが夙に英文を以て著作を試み一千七百五年スワフトに倣ひたる一昧を以て"The Fable of the Glumbling Hive"といふ韻語を綴りて出版しき。この詩は或生活豊かなる蜜蜂の群が一朝道徳を聽いてこれを實行するに及び遂に一類悉く自滅するに至りし旨を叙せるものなり。後ち九年を経て此の書を再版するに及び彼れは長き散文を以てこの解釋を附し大いに自家の厭世說を主張しき。文章は蕪雜ながら所信を吐くに臆面なきと諷刺滑稽に富みたるはその長所なり。然れども平凡の常職を以て人世の一面を觀察しこれにスワフト的皮肉を交へたるまでのものなれば論旨淺薄にして

到底何れの點より見るもシヤンプベリの敵たるに足らざりし者なり。さて當代の論壇に於て名聲シヤンプベリの上にも出で、殆ど獨歩の所論をなしたるものは

ジョーエル・バークレー George Berkeley (一六八五——一七五三) なり。ダブリンのトリニチ大學より出で久しく其校に留まりしが一千七百十三年ロンドンに赴きスイフトと相知りさて大陸を漫遊し歸國の後ち副監牧師となりさて亞米利加に渡航し歸りて僧正となり職に在ると十八年にして歿しき。著作中名高きは一千七百三十一年に出版せし“Alciphron”を始めとして“The Theory of Vision.” “The Principles of Human Knowledge.” 等なり。“Alciphron.” は當地の諸學說シヤンプベリ、マンドビル及び自然信教説の弱所を破したる問答録にして“The Principles of Human Knowledge.” はロウの經驗説を推し進めて彼の生具の思想といふものなき由を極端に論じたるものなり。パークレーは文章の多様多技なること實に當代第一なりしなり。その諷刺に於けるヤアヂソン、スホフトと肩を比ぶべき程なれど彼れは敢て諷刺の一面に依ることなかりき。彼れは奥妙の理を平かに説き抽象の論をうるはしく

述ふるの技を有しき。彼れ狀寫すればその細密なることさながら畫圖の如く、彼れ對話を用ふればその自然なること恰も小説の如し。要するに彼れが身軀は殆んど端腕すべからず、况んや模することあや。こゝに於てその妙文もたゞ一代の異采たるに止まりて後ちに一派を遺す能はざりしは惜むべきことなり。

その他の散文家にはベンチャミン・ホーワリ Benjamin Hoadly (一六七六——一七六二) サミュエル・シラーク Samuel Clarke (一六七五——一七二九) 僧正チロセン、バトラー Joseph Butler (一六九二——一七五二) 等なり其中バトラーは“Analogy of Natural and Revealed Religion.” “Sermons.” 等の名高き著述もあれど今は詳説せず。

第四章 アレキサンダー・ポープ

詩歌の擬古時代——アレキサンダー・ポープ——生涯——著作——『批評論』——“The Rape of the Locks”——『英語イリアッド』——『英語オデュッセイ』——『人間論』——『愚人物語』——『ポープの長技』

十八世紀の前半は擬古詩全盛の時代なり。當代の詩人は主として重きを形式に置き豫め法格を設定し専ら古詩に擬して作せしかば其の作の相似たることさながら同模型より成れるが如きもの少なからず趣くとも詞花言葉の巧を競ひ只管

修辭法の正しかりんを欲し古格に背くまじと勵めたりし點は此れ彼れ殆ど一職たり故に擬古時代の詩歌の特質は其の一を精檢して以て他の百千を類推するに足るなり。而して千種万様の剪綵爛燦たりし間殊に色彩の陸離として先づ人目を眩するは實にポープが彫琢萬回の詩篇なり。されば彼れが詩の如何なるかを知悉するを得ば所謂擬古時代の詩學と其の諸作との特質形狀を知るに庶幾からんか。

Alexander Pope は一千六百八十八年五月二十一日(我が朝元祿元年柳里恭の生誕前十八年)英國首都龍動ロムバールド街に生まれき。父はリチン商にして家計頗るゆたかなりき。ポープ生まれて矮小加ふるに駝背なりしかば長じて後身身長四尺に過ぎず剩へ全身いたく瘠せ細り而して其の兩腕のみは不釣合に長かりければ學校朋輩は彼れに綽名を負はせて「蜘蛛」「風車」? 「疑問標」など呼べりしが其の聲いと美なりしかば或はたへて「小鵬」も呼べりき。齡やうく五歳なりしころより既に能く詩を解せり八歳の時家附の僧某(いふつ)に隨ひて羅典希臘の文法を學びて羅典の名家スタチウスの詩一節を譯しき蓋しスタチウスはブルツルと共に彼れが

終生愛好せりし詩人なりき。十二歳更に一の脚本めく作を物しぬ其の中の人物には『イリアツド』中の英雄アキリーズ、ヘクトル、ユリシーズなどいふ人物あまた見えたり。

ポープが初めて其の作を世に出ださんと思ひ立ちしは外交官非リアム、トラムボールと地主ナルシユとの德憑に因るといふ。トラムボール曾てポープの詩を見て激賞して曰へらく「余は他に君の如くミルトンにも匹敵すべく思はるゝ詩人あるを知らず」と。ナルシユもまた曾て曰へらく「ブルツルといふともポープほどの年としばえにてはかく巧に詩を作り得ざりしならんこれ思ふに諛言にあらじ」と。

ポープ性來讚賞を愛すること飲食の如く驢駘を惡むこと蛇蝎の如くなりき此等の褒辭を得たりし時の意氣想ひ見るべし。一千七百十年ポープ龍動に出で、當時の改進黨の諸名士と交を結びぬ蓋し商賈も農夫も學者も詩人も相會すれば必ず政治を談すること當時の一流行たりしなり。翌年有名なる『批評論』といふ詩篇をいだしぬヂョセファチソン先づ其の『觀察者』の紙上に於て之れを賞揚せり、かくて一千七百十二年の春其の友スチールの紹介によりて初めてアチソンと相知

る此の年其の傑作の随一『The Rape of the Lock』といふ諷諧の詩を公にせしが世評頗る高く其の名俄然として大都に喧傳せり。一千七百十三年『リッザの森』といふ詩篇を著して始めて諷刺家の王デヨナサン、スウィフトに知られしが爾來二十有五年兩個の間信書の往復絶間なかりき。同じ年スウィフトの紹介によりてオックスフォードの公爵ロバート、ハリー、男爵ボリングブローク、ロチェスターの僧正アツタルベリー等と交り又詩人にして巴里の公使を兼ねたりしマツシウ、プライオル、醫師にして著述家を兼ねたりし博士オーバヌット并ひに詩人兼脚本家デヨングイ等と交を結びき。一千七百十五年其の名篇『英譯イリアッド』を世に出だしぬ其の第五卷を譯出せしまでに無慮九千磅の報酬を得きといふ以て其の世に行はれしことを想見すべし。同じ頃オックスフォードの人にしてアヂソンの友なりしトマス、チツケルといふ者同じく『イリアッド』の第一卷を翻譯して世に出だしぬ而してアヂソンは其の『觀察者』の紙上にいたく之れを賞揚せしかばポープが猜疑に富みたる心は己が翻譯を貶せられたらん如くに感じていたく恐り大にアヂソンを誹謗せり。但しアヂソンがチツケルの翻譯に對して爲し、批評は妥當公

平なりといふべくポープがアヂソンに對して爲し、攻撃はひとへに私憤を洩らす人身攻撃に過ぎざりき。一千七百十七年ポープまた『エロイサよりアベラルドへの書翰』『不幸なる淑女を憶へる挽歌』の二篇を出版せり此の二篇はポープが人間に對する同情の深さと抒情詩の真技倆とを覗ふべきものにして短篇なれど頗る注意の價あり。ゴッスはこれより推論して『若し一世紀前に生るゝことあらば劇曲家としても相當の位置を得たりしならん』といへり。此年其の父チスウィックにて死去りければ翌年其の母を伴うてトキッケンハムといふ處に移りき。こゝにて『イリアッド』の翻譯を大成し更に『シエークスピア全集』の出版に従事せしがこの業はむしろ失敗の業なりき。當時の批評家リユキス、シオリポールド詳に此の書の缺點を發きてきびしく編者を非難せしかばポープは燃ゆるが如く怨み憤り後に彼の嘲罵の詩『愚物物語』といふを著し、折猛烈なる復讐を物しぬ。『愚物物語』の中に捕らへられたるはひとりシオポールドのみならず平素ポープと相反目せし輩は一人としてポープが嘲罵の犠牲となりて愚物の仲間入せざるはなかりき。此の書の出でしは一千七百二十九年の事なり。(シヨウは四十二年の出版と爲し

たれども是れ蓋しポープが末年に及び僧正ワルバルトンの獎によりて起稿したる第四卷をも含めて言へるなり。爾後數年の間は『人間論』『道義論』及び『ホーレスの模倣』等にして皆韻語なり。

一千七百三十三年ポープが母齡九十二にして世を去りぬ。そもくポープは終身妻を娶らざりしに十七年前既に其の父を失ひたりしかば爾後眞實の愛情をもて接せしものは天下唯一の老母ありしのみ。彼れが老母に對して有せし此温き感情は淫雨密雲の濛々たるが如き其生涯中に於て僅に認め得べき一道の光明なり。彼れは常に自己の生涯を名づけて「長病」なりといへりきさしも虚弱多病の身をもて外に攻守に遑なく内は心火の熄む時なかりしかは其の齡五十を過ぐるや未だ老いたりといふほどにあらぬに神心いたく衰へ形容枯槁して長く命脈を保つべくも見えずなり一千七百四十四年五月三十日に至りて遂に其の「長病」なりし生涯を脱して溘然不歸の客とはなりぬ。遺言して其の屍をムキツケンハムの寺院なる其の父母の墳墓の傍に葬らしめき。享年五十有七。ポープが主なる煩惱は名譽を得んとするにありき。トマス、アーノルド曰へらく

スキフトは其の文學上の成功をもて單に好位地を作らん踏臺とせしに過ぎざれどポープはそを手段とはせずしてたゞちに其の目的となしにき即ち前者の欲望は權力を得んとするにあらて後者の欲望は名譽を得んとするにありきと。げにポープは名譽を得んが爲には何物をも犠牲に供せんとしたりき若し己が名譽を傷けんとするものあれば武器を選ぶに遑なく奮然之れにもむき百方防戦の事に従ひき。ティーン曰はく彼れが筆を取る大理由は所詮文學上の名聞にあり彼れは稱賛せられんとを願ふの外他念なし彼れの生涯は猶一娼婦の生涯の如し。彼の娼婦や朝より鏡前に立ちて化粧を凝らし又他人より挨拶の手紙を受けては满面微笑を呈しながら他人に對しては我れは他より挨拶の手紙を受くるばかり五月蠅きはなし紅粉は徒らに我が面を汚すに過ぎずなどいふポープは恰も此の娼婦に似たりと。

才分の卓絶なる彼れの如く勵精修鍊はた彼れの如くば誰れか造詣するところなからん。ポープはいと幼き時にだに習はざる文字をかき寫して書法を獨習せしほどの稀有の熱心と忍耐とを有しき。其のやゝ長せしやあほよそ九年が間は林

中の一茅草に閉籠りてをさく、四圍の好景に詩想を養ひ其のかたはら徐に各國の佳什を誦しき。實に獨修苦學の力によりて古代の諸名作を解せしなり。彼れは夙に英國の詩宗の中最もドライデンを景慕せりき時尙の然らしめし所とはいへ創才に乏しく古文に拘泥する弊ありしドライデンを崇尊せりしは惜むべし。加ふるに其の友ナルシユ曾て彼れに語りていへらく「我が國古より大詩人乏しからずと雖も正確なる大詩人は尙欠けたり足下須からく此の正確なる大詩人たらんことを期すべし」と。所謂正確とは蓋し用語修辭法等の正しきをいふ即ち詩形上に間然するところなきをいふなり。ポープ深く此の言に感む専ら此の目的の爲に精進しもろくの形容詞熟語韻律等の苟も詩形を正うし調整和諧せしむべきものを集めそを誦記して腦裡の秘寶とせりき。彼れ一詩篇を草すれば少くとも二年間は机中に藏し置きみづからも考へ他人にも胥り形琢万回殆どいさゝかも原形の存せざるに至りてさて漸く世に出だしき。彼れは談話中にてもかりそめにも取る可きの事あれば直にそを紙に録し一思想又は恐らく一語にても面白しと思はるゝに遣へは必ずそを書き留むるを忘らさりきとなり。又彼れは平生其

の枕頭にも文机を備へたりき夜半一思想の浮かぶことあればやがて跪起してそを紙に録し置かんがためなり。彼れの腦中は常に詩學上の計畫を以て充ちしかゆゑに談笑の間にても決して眞に閑なるを得ざりき。刻苦精勵經營慘勝たりしことおほむね此の類なり。其の詩篇の言々金玉を聯ね句々錦繡を敷きたるが如きは蓋し偶然ならずといふべし。

ポープの著作は創作翻譯併せて三十餘篇あり其の中重なるもの六篇曰はく『批評論』曰はく『The Rape of the Lock』曰はく『英譯イリアッド』曰はく『英國オプッセイ』曰はく『人間論』曰はく『愚人物語』是れなり。其のうち

(一)『批評論』(一千七百十一年出版)ポープ年二十四はポープが其の聲譽を傳せし最初の著述といふも不可なし。こはもと首尾の貫徹せる一篇の詩にはあらで只詩學文辭批評等に関する自家の隨感を記したるものなり而して其の思想は概してホレオス、プロト等を祖述したるに外ならず。テロップは此の作を評して曰へらく是れ甚だ賢明なる教誨を集めたるものなり而して其の缺點は餘りに平凡なる眞理なることなり曰はく「決断に先ちて分別回想せざるべからず」曰はく「美術の法

則は自然より出づ曰はく、傲慢無學、偏見、黨派、心嫉妬等は判断を暗くすと總べて此の類なり。蓋しポープ、ドライデン、オロウなどの時代には順序よく思想を排列し且つ明瞭なる辭句によりてそれを明白に言ひ出す必要もありしならんされど今は其の必要去りぬ吾人は思想を要す思想の断片を要せず鳩小屋は造られたりぞを充たすべき實物を要す云々。テーンの評は酷に過ぎたり而してショウは贊嘆していふポープの此の作、巧緻精妙、而も氣力に乏しからず而して其の判断は圓熟其の詞は優美、其の韻律は能く和諧したり云々。

(二) 『The Rape of the Lock』 (一千七百十二年出版、一説には十四年) 時の貴紳ピートル卿アラベラ、フェルモル嬢と結婚の約成りしが一日嬢の熟睡せりしを伺ひ戯に剪刀をもて一握の毛髪を剪り取りぬ此の事原となりて結婚の約遂に破れき。ポープ此の事實を捉らへて材料とし、天神地祇のいと尊くいかしめき材として一種の好笑しき主題を嚴格高尚なる英雄詩の体式をもて物せしもの即ち此の一篇なり。其の事實の瑣末なると其の詩体の嚴格なると相照らして實に稀有の好談話たり

(三) 『英譯イリアッド』 (一千七百十五年より一千七百二十年迄に出版) ポープが最

も大名を博し又最も利得を得しは此の著述なれど善くホーマルを知れる者は皆モーレルの評に左顧すべし。モーレル曰はく

こは如何に見るもホーマルが詩の内想外形を現したるにはあらでそれさばかり離れたる獨立の著作として見ざるを得ずかの古文學者マントレーの批評は至當にして正確なり曰はく「かの作は真詩なりされどホーマルの作にはあらず」と、げにやホーマルの精神も感情も境遇も殆どいづれの點に於てもホープのさば直反對なりホーマルは其の生涯を戶外に費したりしかホーマルは交際場裏の一市人なりきホープの用語は無形の思想及び抽象の言辭をもて充ちたれどもホーマルは無形の事物と抽象の言辭とを受け納るゝこゝ能はざりきホーマルの用語は新約全書の用語のごとく單純直接にして童兒の如しホープ及び其の時代は如何なるものをも直接に名くるこゝを得ずして常に抽象の辭をもて解説し又は迂餘曲折して言ひ見すを常としき(中略)ホーマルの技術は精神より發生したる單純無意識の技術、シェイクスピアの所謂「自然其の物なる技術」なりホープの技術は單に詞句と巧妙なる語法とをもて既話に新しき美と一層高上なる價值を與へんさ力めたる自識的技術なり

云々。テーンは冷然として評すらくポープの『英譯イリアッド』は俗の好尙に應じたるものなり。英國人は單純なる希臘風の服装のまゝにては嘆美せざりしならん彼等は紅粉を施し飾紐を着けたるを見てのみ満足すべしこれ時様の服装なれ

はそを著せしむる事も必要なりと。所詮此の著は「オックス」の筋に於ては自由の詩才を發揮せるものなれば單に想像の方面より之れを觀ればホリでもの逐語澤の上乗なるものよりは寧ろ珍賞に價すといふべし。

(四)『英譯オデッセイ』(一千七百二十年より同二十五年までの間に出版)は『英譯イリアッド』よりもまた一層ホーマルに遠きものと思へば當を得たるに近し。プーアがみづから筆を執りしは全部二十四卷中僅に最初の二卷に過ぎず其の餘はすべてフェントンドルムとの代筆に成れり。

(五)『人間論』(一千七百三十四年出版)はポープが其の友ボリングブロークに宛てたる四通の書翰を一束にしたる者。第一の書翰は人と宇宙との關係第二は人と人との關係第三は人と社會との關係第四は人と其の理想との關係及び幸福の追求に於ける關係を説きたり。根本の思想は其の友ボリングブロークより得しところいと多しといふ。或はライプニッツの哲理に負ふ所も尠からずとなす。抽象の哲理の韻話をもて表白し而も乾燥無味に陥らざるところポープが技術なり。彼れは斯かる題目を韻語をもて言ひあらはしし理由を自白して韻語は散文より

も簡潔に思想を表し得る者なればと言へり。ボリングブローク此の詩につきてポープを評して曰へらく「彼れは甚だ無頓着なる哲學者なり彼れ果たして自己の取扱へる題目を眞個に了解せりや否や疑ふべし」と。博士チヨンソンの評に曰はく「此の著は天才の卓絶なると想像のまばゆきばかり華麗なると眩惑すべき能辯の才とを見るへき好例なり智識の缺乏と感情の卑劣とを斯くばかり巧に蔽ひたるはあらず」と人間の適當に研究すべきは人の上なりといふ有名なる格言は實に此の篇中の一句たり。

(六)『愚人物語』(『The Dunciad』) 一千七百二十九年出版ポープ四十一歳は已に前にもいへる如く數多の小詩人を一纏めにして罵倒嘲殺せるものにて其の趣向はドライデンの「Mao Flecknoe」より脱化したり。當時有名の批評家シオポールド及び桂冠詩宗シツベルのごときは此の詩篇中の兩主人公なり。篇中諷刺罵詈の最も猛烈なるは文學の女神魯鈍の命が催せる遊技會にて書肆が一詩人を捕へんとて競走する事作家が我れ劣らむと吠競し、さて後争ふて涵中におちいること批評家等が眠を催さで二名家(シオポールドとシツベルとを指す)の著を讀まんとして苦

しむこと等を叙したるあたりなり。ショウは此の篇を評して「私情の目的に應用せる高上なる天才の最も驚嘆すべき最も恐るべき一例、外醜文學退治といふ衣服を被り、内私情をほしいまゝにして其の憤怒の犠牲を焼盡し滅盡し貪噬する天才的電光の一例なり」といひトマス、アーノルドは此の篇中に嘲罵せられたる詩人には一人として後世に名を残すべきほどのものなし是れ此の篇の永久に旨味を持続する能はざる所以なりドライデンが「The Flecknoe」中に提へたる詩人は流石にポーブが提へしものよりは高名なりき云々といへり。さて又ティーンは曰へらく此等の怪文學に比較すべきはひとりスヰフトの著あるのみされどスヰフトの著は絶望怨世狂忿の餘に出できずれば尙分疏の途ありポーブに至りては何の不_足なき身をもて單に文學上の私忿によりて斯かる怪文學を製作す彼れはそも神經を有せざりしか吾人は之れを讀みて恰も麗しき花籠の中に泥を盛れるものを見たらんが如き感を生ずと。げにスヰフトは常に公衆若くは一團躰を對手として嘲罵せしにポーブに至りては一として復讐的の人身攻撃ならぬはなかりしなり。さてティーン又はアーノルドと同様の意味にて「蠅をふし殺すに何といふ巨大なる

舖石」と嘲りそれより再び英國人をそしりて曰はく彼は擬古的假裝を被りながら尙寫實をよるこぶ彼等は醜惡なるもの卑俗なるものを分別することなくそを剥ぎ出しに描出せり彼れ等は之れに被らすに普通なる想念の美衣を以てすることもなや「ソサニエチ」社會の好隱語をもて蔽ふことも「ソサニエチ」刺き出しにせずとも「ソサニエチ」意是れ其の諷刺の常に酷に過ぐる所以なりと。

要之ポーブの詩の最長所は其の思想感情にはあらで其の詩形と詞美との上にあり其の狀寫の巧妙なるにあり。此の點につきてはさしも峻酷なるティーンだに、ポーブは到底一詩人の資格を備へたり其の詩全躰につきてにはあらず其の斷片に於て然るを見るべし森羅万象何物といふとも彼れの筆を借らば寫し得べからざるものはあらじ一鱧魚一鰻魚を形容して宛然その者を見るが如くならしむるが如きは更にも言はずスヘードのクイーン、ハートのキングと雖も彼れの筆に上れば躍然として活動すと評せり。彼れ又ポーブが天人を寫したるを評して曰へらく「疑ひもなく此等はシェイクスピアの天人にはあらずさはれ吾人は天然の活潑薇を見て快樂を覺ゆると同時に玉工の辛苦經營に成れる金剛玉面の草花の光輝

燦爛たるを見ても均しく快樂を感じず。以てポープの技倆の秀でたるを見るべし。テーンは又ポープが長所たる状寫的修辭的技倆につきて「これ擬古時代に適當なる技にして普通の思想を順序よく言見すべき具なり」といひ英佛兩國民が各、至高なる哲學的の概念と淺近なる具象の細事との中間に位する普通にして且つ定限ある真理を捉へ來たりて今の所謂常識の素を造り巧に區畫を設けて之れを排列し且つ整然と發達せしめ集合對等して明白ならしめんとを力めき此の修辭的研鑽は漸く詩中に浸潤し當代の詩は遂に不自然なる韻語的散文となりぬ即ち高等なる談話の一種、選擇せる議論の一種とはなりぬポープは實に此の種の詩に熟練せりし者なり此の如き詩的散文に於ては全世界中ポープに匹敵すべき者あるを知らずアローと雖も遙に其の下にあるを免れざるべし蓋し當代の人の詩を讀みしや常に其の如何ばかり古法古格に遵據せるかを檢するをもて最大の務とせしなり云々。

第五章 ポープと同時代の詩人

ブラッキングモリアー — フライオール — ゲイ — ヤング — バークル —

ワインチエレン — 夫人

アレキサンダー、ポープの詩名一世を震撼してより忽ちにしてその模倣者と反抗者を出だし、がその後の章にゆづり、こゝにはポープと同時代の詩人の上を語るべし。そが中にはポープの先輩にしてポープの影響を受くるよりは寧ろポープの先達たりし名家もあり、ポープが渾成無瑕の詩躰はドライデン以來是れ等諸名家の開拓せる所を綜集成したるものと觀て可なり。

ドライデンよりポープに至る約三十年間の詩壇に於て最も有名なりしは醫博士リチャードブラックモリアー Richard Blackmore (一六五〇 — 一七二九) なり、オックスフォードの出身にして作詩に従事せしは開業して患者に接せし後にあり、『アーサー公』、『アーサー王』、『ヨブ』、『エリザ』及び『天地開闢』等はいづれも長篇にしてその他若干の讚美歌と論文とあり就中『天地開闢』はアチンソン及び博士デブリンの激賞せし所のものなるが近代の讀詩眼を以てすれば若干の巧妙なる修辭の外に思想の取るべきものなきこと他の詩篇に異ならず。但し氏は自らも誇れりし如くことさら世に媚びて剪裁の技を弄せしにあらざるは事實なりしが如し。

マシュー・プライオール Matthew Prior (一六六四——一七二二)はフランス・モーアにも勝
 たりて一種の功績を十八世紀の上頭に樹て英國に於ける「社會詩の王」と稱せられ
 たるはプライオールなり。ケムブリヂより出で、名譽校友となりそれより複雑な
 る生涯を經其の間詩篇をまたを出版しき。やゝ長篇にて見るべきは“Alma or the
 Progress of Mind”及び“Solomon or the Vanity of the World”なるが前者は公然ペトラル
 の詩風と韻法とによりたる『ヒーチアラス』體の冗長なるものにして、後者はポー
 プよりは寧ろドライデンに近似す、ヒロイック、カプル、兼アレキサンドリン法の諷刺
 詩なり。共にその主題の眞面目なるに似ず風姿滑稽に流れて作者の蘊蓄と識見
 とを認むべからず、後者の如き虚飾を諷刺したるものと雖も、スウィフトの如く冷嘲
 骨に沁するに至らず、ジョンソンの如く斷乎たる確信を以て嚴然詰責したるにも非
 ず、而も尙ほ文壇の一珍事たるを失はざるは妙なり。さて尙ほ長篇にて“Cornen
 Seculare”“Henry and Emma”“Nut-brown Maid”等あれどいづれも冗漫にして讀むに堪
 へず。さて氏が文壇に著く貢獻せしはむねとその短篇にありき。“Lines written
 in the beginning of Mezeray's History of France”に於いては單に頓才のみならずして眞

の有情滑稽をあらはし、若干の絶句に於ては更らに自在なる諷諧を示し、Child of
 Quality”に於ては幼年文學の妙才を揮ひ“Dawn Hill”に於ては平易輕快にして渾
 然たる三脚韻の詩法を試みたり。ことに氏がこの詩法を出したるとは圖らずも
 十八世紀の文壇に大功を樹てし所以となり、從來嚴守せられし「カプレット」の韻法は
 やゝ緩となり、かくて十八世紀の詩歌は漸次その騏足を伸ぶるを得るに至りぬ。
 因に云ふこの三脚韻の詩法は夙にドライデンも少しくこれを試みしかどたゞ音
 樂用の歌に止まりしが故に未だ一般に及ぶ勢はなかりき、プライオールが盛んに恰
 好の題目を捉へて平易なる短篇にこれを用ひたるの比にあらざりしなり。
 チヨン、ゲー John Gay (一六八八——一七三二) プライオールの如き創才は無けれ
 ど技巧に於ては同地位なりし詩人なり。家貧かりし爲め少時絹布商に雇はれし
 が後ち某家の書記となりぬ。これより始めて著作に従事し先づ“Rural Sport”『田
 園の逸樂』と題する詩篇をしてポーアに呈しき。この篇常套の虚飾を脱して直截
 明白の敘述多し。ゲーはこれより後ちやゝ上流の諸文人と交るを得ざりしかど
 本來精進の氣力なき人なりしが故に敢て作詩に苦心することなく、甲家より乙家

と流寓して間々若干の小篇を出せるのみなりき。その流寓の窮生涯は氏が劇詩“Beggars Opera”に於てこれを見るを得べし。“The Shepherd's Week” “Trivia, or the Art of Walking the Streets of London” “Spistles” “Eclagues”等はワルマル・メンスアー又はポープ、ヤングなどを模倣したる詩篇なり。されども短篇に於ては當代に珍しきばかり抒情詩の正鵠を得たるものなし。“Black-Eyed Susan” “Twas when the Seas were roiling” “Philida” 及他の數篇は或は自然の情にかなひ或は調諧の樂をなし雅趣頗る掬すべし。劇詩は前に挙げたる『乞食芝居』の外に“Acis and Galatea”あり韻文の小話集には“Fables”あり皆その詩才を見る。惜むらくは彼れを誘導し吹鼓するの師友なかりしが爲めその生涯は竟に懶惰無理想のものとなり了りぬ。エドワード・ヤング Edward Young (一六八一—一七六五) 全くポープ派と離れて寧ろポープの詩風に反抗して起りし創才なり。その“Universal Passion”に於いて用ひたる諷刺の如きはポープの『愚物譚』より遙かの以前に出で、而も同様の風格をなしポープの名句に匹敵する句も少からず。氏はもとオクスフォードの出身にして夙に名譽校友となりしがその企業に望みを失ひて暫くはその“Night-Thoughts”にあらはれたるが如き陰鬱の人となりき。處女作を“The Last Day”とし次ぎを“The Force of Religion”となす。共に一世にもてはやされし由なれど今人の眼を以て觀れば嚴峻なる宗教的恐怖心を陰鬱に且つ放大に表出し兼ねて彼の偉人の靈行を張説せるものに過ぎず。但し前者には流石に辭句の巧妙なるもの夥しく“ナイト・ソーン”と共にヤングの傑作たるを失はず。さてこれより十年間に“Lore of Fame, or the Universal Passion”と題せる七種の諷刺詩をもせしが、こは前にもいへる如くポープの『愚物譚』に先鞭を着けたるものにして主題がら文辭の技巧に趨りたるは止むを得ず。要するにヤングは十八世紀の詩人として寧ろ創才に富めるものといはざるべからず、ことにその詩法の如きは流石に「カプル」を全脱せざるものから猶ほ特得の長所あり、その没韻律語の如きも沙翁・ミルトンを模せずして優うに一家の體をなせり。兎に角十八世紀後半の詩人に影響する所多かりしは争ふべからず。

トーマス・パーネル Thomas Parnell (一六七八—一七一七) トリニチ、コリアを出で、教會の執事長となりスウィフトに勧められてトリニチ黨に政黨せし人なり。

詩作は概ね短篇なれどその評價一致せず。“*Home*”は大概の詩語碎金に編入せらるゝ傑作にしてゴールドスミス、デヴンソン等は盛んに稱揚したれども作者自らは“*Allegory on Man*”を以てその隨一の作となし、近世の評家はた前者を以てたゞ流暢にして巧慧なる韻語に過ぎずとなせり。此二篇に次ぐものは“*The Night-Piece on Death*”及び“*Hymn to Contentment*”にして前者は自然の景を寫せるの巧みなること一世に並びなく後者はミルトンが『*ユマス*』の韻法に復歸して成功したるものなり。要するに大詩人の素質には遠きものから其の作の巧緻にして瓊琇の少きは決して當代に恥ぢざるものといふべし。キンチエルシー夫人 *Countess of Winchelsea* (一六六〇—一七二〇) 名をアンと呼ぶ。ポーブよりトムソンに遷るべき一詩風の先覺者なり。初め希臘のヒンメルが體にて“*The Spleen*”をものし引きつづきて“*The Prodigy*”“*Miscellany Poems*”及び悲劇“*Aristomenes*”等をもものしき。この人久しく評家の間に遺却せられしが彼のナルゾナルスがその“*Lyrical Ballad*”に添へたる有名なる論文に十八世紀の詩歌を罵倒して『*矢樂園*』より『*四季の歌*』に至る約百年間に自然の景象を寫し出せる作は幾かにポーブが『*キンゾア*』の森』とこの夫人

の“*Nocturnal Reverie*”となるのみと論じたるより夫人の作を讀む者頗かに増加し來りぬ。而してその初めヒンダルの體によりて門に入りしは前にもいへる如くなるが同じ詩風の泰斗カウレーの如きは感慨高雅なる古詩の風は香として見るべからざる様なるに獨りキンチエルシー夫人はその想像力の原を常に自然の景致に求めたるが故に“*Nocturnal Reverie*”の如きは人工の極端にはせたる十八世紀前半の詩歌の間に立ちて實に一種の異彩たりしなるべし。キンチエルシー夫人の自然描寫はトムソンよりも一層實に近かりしかど其の詩才に至りては遙かに及ばざるが如し。

第六章 英國小説の濫觴

近世英文學の起原——十八世紀以前の小説類——英雄的傳奇——傳奇
小説——新小説の興起——その特徴——『*ロビンソン・クルソー*』と上
代の小説類——讀者の傾向

十八世紀は已に前章に言へる如く之れを特立せる一時期として評價すれば眞詩趣の萎靡したる時代、道義の衰頹せる時代、細慧巧利の時代、瑣々たる形式に拘泥し

區々たる小成に矜誇せし時代たるに似たれど若し之れを他面より觀て其の後の十九世紀文學に及ぼし、影響を呼び起こし、反動の價值及びその創置せし學問藝術の基礎の少小ならざるを思へば或は當代を稱して近世文學の起原期といはんもまた必ずしも不當ならざるなり。新聞紙雜誌の起こりしも、眞の史的文學の成りいでも眞の小説の生れいでも皆此の期中の事なり。左にまづ英國小説の起原を講ぜん。

今の所謂小説は諸種の英文學中最も後に發生せしものなり。其のはじめ中世紀に盛なりし英雄傳奇は概して其の源を佛國の文學に發せり、それらは主として荒唐なる空想と武士氣質とにのみ基ける者なりしかば時勢の變遷につれていつしか衰頹の運に向かへり。古來佛國は律語并びに散文にて綴れる古傳奇の尤も盛に行はれし國なり後年散文の物語所謂英雄傳奇の起こりしも亦此の國なり。所謂英雄傳奇の主人公は彼のマロリーが『物語集』に見えたるアーサーの類にはあらず、シドニーの『アーカヂヤ物語』に見えたる人物の如き牧者の戀人の一種なり、即ち武士氣質と近世氣質とより成れる者なり。此の種の傳奇の佛國に發生せ

しは十七世紀の事にてオノール・ダルフネ (Honoré d'Urfé) といふ作者をもて嚆矢とす。ゴムベル井ユ (Gomberville) カンレキード (Carpentier) ランティエット夫人 (Madame de La Fayette) 及びスティーヴリ夫人 (Madame Scudéry) 等いつれも其の末流なり。ダルフネがものせし史的傳奇は過去の事件を叙寫せるが如く見ゆれど其の實はいづれもヘンリー四世王の宮庭の豪華華麗を寫したるものにて往々注意を惹くに足るものあれど概しては無味平淡にして冗長なり。現に其の『グランドサイラス』の如きは徒らに十冊の長きに涉り讀者をして厭倦に堪へざらしむ而して其の話の筋は總じて荒唐無稽なりしゆゑ、人智の進歩に伴ふこと能はず、こゝにおのづから一反動を生ずるに至りき。ソレル (Sorel) の『Franciais』、フアンチエール (Furetière) の『Roman Bourgeois』の如き又はスカロン (Scaron) の『Comique Roman, or Coic Romance』『滑稽傳奇』の如き、いづれも此の反動の結果なり。就中後者は冒險の物語にして滑稽洒落の書きぶりは前代に其の類を見ざるところ、又其の文體の卑近なること恰も『グランドサイラス』の文章と正反對を爲せり、されば此の著は此の種の物語の祖先となり、やがて許多の門葉を生じき。さて前に述べし古傳奇といひ英雄的傳奇

といひ、いづれも夙に英國に渡來して多く模倣者を生ぜしがスカロンのも亦英國に渡りて若干の追隨者を生じき、即ちアプナ・ベーン夫人(Mrs Apina Behn)はチャールズ二世王の朝にスカロンに倣ひて個人の冒險談をもつし、アンリー夫人(Mrs Manley)はたペン夫人の跡を追ひき。此の外佛國に起こりて英國に勢力を有せし他の一軀はレ・サーヤ(Le Sage)がものせし“Gil Bias”及び“Devil on Two Sticks”なり。こは西班牙のセルバンテスが作『ドン・キホーテ』の脈を受けて冒險談のうち近代の風俗を叙したるものにて、其の特質は滑稽と諷刺とにあり。さて一時はかゝる作物のみ新陳代謝して行はれしが英國國民の性質は屢も説ける如く本來實際的なるが上に諸種の自由なる制度文物の發達が頗る個人性を涵養せしかば、夙に私人の生活を重ずるの風を成し、隨うていつまでも荒唐無稽なる舊傳奇を喜ぶべくもあらず、遂には件の國情に適應すべき寫實的文學を需め、所謂近世小説を創始せるに至りたり。

接ふに傳奇フアンタジーはもと羅馬語の謂、嘗て羅馬國の所領たりし歐南諸州の方言を指せり。其のはトマ(中世紀の頃佛國の南部に輩出せし詩人の一團體にトローバドーア(Trouba-

dour)といふものあり、又北部に輩出せしものにトローヴェーア(Trouvere)といふあり、いづれも禁庭に出入し若くは侯伯の居城に往來して詩歌吟咏を事せりし、前者は勇士の花々しき事蹟あるは戀愛に關する事柄を題目とせり而して後者は之れに比すれば抒情の分子少なく叙事の分子多かりき。さればローマンヌとは畢竟は此の兩團體の詩人が用ひたりし語を指せりしに外ならずりしを、其の後變遷しいつか散文にて綴りたる傳奇物語を指す名とはなれり。又小説ノヴェルといふ名目は本來羅馬語の“Novus”即ち「新」といふ語より來たり。或はノヴェラ(Novella)とも又ヌヴェル(Nouvelle)ともいふ、即ち伊太利西班牙及び十五世紀十六世紀頃の佛國文學中に許多の例を見出だし得べき面白き小説の名なりき。譯して好話又は佳話ともいふべし。ホカチオの『アカメロン』ナバルの『マゲリート(Marguerite of Navarre)』、『オハト』、『ウエニス』、『ウエニス』、『Cent Nouvelles Nouvelles』のたぐい是れなり。さて通俗に此の名目を區別すれば傳奇は人物事件の異常高大にして幾分か超人間的調子を帯び且つ概して過去の事蹟に關したる物語を指し小説は之れに反して平生眼に慣れ耳に熟したる通常有り得べきやうなる事件人物を寫せるものを指すまた概して現代の事に關せり。

英國にて舊傳奇すたれて新小説の起こりしは前にも言へる如く、一は前者の餘りに荒唐無稽なりし反動に基き一は社會の大勢に原因せるなりこの新小説の特徴は第一、武俠氣質王朝氣質といふが如き類型を脱して稍、個性の描寫に力を傾けた

ること、第二主人公が屢、死地に入出入する波瀾多き筋の興味を棄て、實際的觀察的若しくは教訓的の事柄によりて確實の印銘を遺し得んことを旨とせることこれなり。この傾向は特り小説に止まらず、『ケトラ』、『ガリヂヤン』又は『スペクテラ』ア等に見えたるフチソフステールが「温顔の苦言」にも屢見えたる所なり。

此の英國文學の革新期に當たり、一方にて舊派の殿となりしと同時に、他方にて新派の魁となりし者は實にダニエル、デフォー其の人なりとす。其の名著『ロビンソンクルーソー』(一七二〇)は實に新小説を呼び起すべき導火となりしものにて、その當時に歓迎せられて文學に影響を及ぼし、との著き殆ど測り知るべからず。之れより先きにいでしモンマスのマオフィレーが『フリットン物語』(一一四七)及びトマス、マローリーが『アーサル物語』十四世紀の中頃乃至はトマス、モリアが『ユートピア』(一五一六)、『ジョン、リ、』が『ユーヒウエズ物語』(一五七九)、『フィリップ、シドニー』が『アカーチア物語』(一五八〇)、『ジョン、バンヤン』が『天路歷程』(一六七〇?)、『スキャフト』の『桶物語』(一七〇四)の如きは其の趣向と文學との上にこそや、小説めきたるところわれ、又は頗る小説に類したるもあれ、其の精神に至りては所詮個人が空想の所生なり。

然らざれば只漠然と世間の状態を叙寫せるものなり。或はまた倫理説に魂を入れたる如きものにあらざれば、政治論に鼻目を附したるが如きものなり、嚴密にいへば一として實生活と個人生活とを描き得たるものはあらず。デフォーが『ロビンソンクルーソー』はた個性を寫したりとも見え、其の結構は單に談話的にして今の所謂小説の躰には似ざれど、少なくとも其の人物事件を現實に有り得べきやうにもものしたると間、期せずして多少性格をも描寫せる跡あるとに至りては、決して舊來の物語に見るを得さるところなり。

『ロビンソンクルーソー』の一たび出で、大に英國讀者の好奇心を惹き起こし、時は他方に於て劇詩と演劇とが著く衰退せし時なりき。彼の十七世紀の初期に成りし詩的脚本に耳を傾け、又同世紀の末に成りし喜劇に耳目を喜はせし觀客も、今や舞臺に於て一も智力上の満足を買ふことを得ざるに至り、曾てシエークスピアの天才を喜び、コンクリーヴの滑稽を賞せし紳士淑女も、今は劇を観るの人たらずして書を読むの人となりき。而して彼等の讀まんと思みしは實に非傳奇的小説なりき。蓋し彼等の欲したりし小説は彼の西班牙及び他の中世紀の物語類の

如くに只管空想を挑撥するに過ぎざるが如きものにあらずはた佛國及び十七世紀の物語類の如く、單に日常の談話を再現して彫琢せるが如きものにもあらずして、巧に現實の生活を描き妙に個人の性情を寫し、或は以て處世の指導ともなし得べきものなりき。十八世紀以來現今にいたるまでの英國小説は、一として此の條向に従ひ此の需要に應じて生まれいでものものならぬはなし。さりどて舊傳奇より一躍して新小説に移らんは行はれがたき事なれば、勢ひ一道の架橋を要し遂にデフォーをして此の過渡時代に架すべき一橋梁を物せしむるに至りき。一橋梁とは『ロビンソン・クルーソー』を指す。

第七章 ダニエル・デフォー

複雑多様の生涯——著作『評論』——『龍動大疫紀』——『ロビンソン・クルーソー』——その梗概——その價值——文体の得失

Caniel Defoe は屠者の子にて一千六百六十一年（我朝寛文元年、江島其磧の生誕後六年、『武藏あぶみ』の著者？淺井了意在世）龍動市なるクリップルゲートにて生まれき。行末は牧師たらん目的なりしかば、齡十四の時龍動なる僧正モルトンの學校

に入りしが、苦學五年にして退きぬ。此の五年の外には正しき教育を受けし事もなければ、堅忍不拔の志ありしかば、在學中雜籍を耽讀し、退校後間もなく宗教上の一論文を物して、やゝ世上に名を知られき。彼のモンマス公爵が宗教上の事より父王に反きて暴動を起こし、時、デフォーは熱心なるプロテスタント宗徒なれば、たいちに公爵に與し事破るゝに及び遁走し身を匿し、と數月なりしが、公爵赦せらるゝに及びてまぬかれき時に年二十三歳。其の後、ホルンホルに移りて莫大（めいだい）の卸賣を業とせしが、鬱勃たる企業の精神は平穩の生活に安ずると能はず、西班牙葡萄牙などに舟出してまば、商業上の冒險を試みしが、失敗し、負債に堪へずしてプリストル地方に逐電しぬ。政治上にては熱心に民權主義を執りしかば、一千六百八十八年、オレンジ公（井リアム三世）が兵を起こしてトルネイに上陸せしや、三四の友と共に遙にオックスフォード州なるヘンリーの地に出迎へき。プリストルにては帽子商となり、活版業となり、三轉して煉化の製造に従事せり。いづれも失敗して大負債を醸し、再び龍動に逃れ歸りぬ。プリストルに在留せしころ、『Essays on Projects』を著しぬ。こは道路改良の事、救貧

銀行設立の事、保險事務の事、佛蘭西のにひとしき大學設立の事、陸軍大學校の事、強
募隊廢止の事、女子大學校設立の事等に關する自家の意見と方案とを論じたる者
なり、其の中に金錢貸借法改良案の交りたるもをかし。又曾て軍用金徵集に關す
る方案を發表せり、其の事キリアム三世王の知るところとなり、一千六百九十五年
其の賞として玻璃税局の事務官に任ぜられしが、一千六百九十九年に至りて玻璃
税の廢止と共に其の職を罷められけり。當時國內キリアム三世を正統なる英國
皇統の君ならずとして非難する者多く、中には「異邦人」と題したる惡詩を作りて王
を誹謗するものありけり、デフォア乃ち王と和蘭國とを辯護するの主意にて一千
七百一年に有名なる諷刺詩(彼れが唯一の韻語「True-born Englishman」)「正統の英人」と
いふを世に出だしぬ。世人争うて此の詩を購讀せしかば、瞬くうちに無慮八万部
を賣り盡くしきといふ。此の詩の劈頭なる、上帝が祈禱堂を建設する處、惡魔はた
常に拜堂を設く而して検査すればすなはち後者の會員ははるかに前者の數にま
されりといふ主意の四句は、世の人口に膾炙せるものなり。此の詩篇に次ぎても
のせしは「The Shortest Way with the Dissenters」(折伏捷徑)一七〇二なり。此の著の中

に冷語を下して曰はく、異教者を信服せしむべき良策は、彼等の耳を切り、鼻をそぎ
頸手枷臺に曝し牢獄に幽閉するに如かずと。而も世人此の書と誤解せしかば、更
に其の解説を物せり、當時の國教黨之を見て驚き、騒ぎ、下院も此れを見て甚しき誹
謗の文字なりとし、デフォアを逮捕せんとしたりしかば、彼れ逸早くも其の跡をく
らましぬ。さて深く潜伏して人に知られざりしが、論文の發行人と印刷者とに累
を及ぼしたりと聞きてもだしがたく、そを救はんとして自首し、二百磅の罰金を科せ
られ、三日の間頸手枷臺に曝され、剩へ女王の心どくるまで(當時キリアム三世王既
に崩じて女王アーンの御宇となれり)禁獄せらるべき身とはなりぬ。彼れは頸手
枷臺の上にありながら、刑臺を象字形のゆゝしき器械と呼びて戯れに其の頌歌を
ものしき。「Hymn to the Pillory」是れなり。デフォアはニウインクトンの牢獄に
在りし間も決して光陰を徒消せざりき、此の際彼れは其の「評論」(英國に於ける文
學兼政治雜誌の嚆矢?)を創製しき。初は毎月二回の發刊なりしが、後には三回發
行するととし、徹頭徹尾己れ一人にて編輯しき。これ後に「タトラル」(ガーターアン)
「スペクター」等の諸雜誌を呼び起すべき導火線となりき。(彼れは獄を出て

し後も依然『評論』に筆を執り八年間其の業を繼續しきといふ。或は十年間といふ。さてデフォアは獄中に在りしこと殆ど二年、一千六百年に至りて赦され、後幾程もなく女王アーン勅を奉じて英蘇兩國合同事件の委員となり、専ら其の事に努めしが元より商事に長じければ兩國の貿易上の關係につきて技倆を顯し、事少からず。

一千七百十三年其の齡五十二歳なりし時、再び其の筆によりて思はぬ災は招きけり。即ち「ハノーヴァー」家の繼承を難するの理由「フリテンダル」(大英國の王位を要求するスチュアルト王族)來たらば如何』何人も思念せざる問題に對する答、即ち女王陛下かくれませば如何』の三論文を草せしに、世間は其の隱微を解する能はざりしかば、其の二友と共に捕へられ一時禁錮の身となりたり。

一千七百六年デフォア其の『ギール夫人の幽霊』を著しぬこは例のデフォア流の寫實的物語なり。又一千七百九年には『英蘇合同史』を出だし同十五年には『家庭の師』といふ教訓の書をものしき。彼れは今や既に六十に垂とし、常人なれば氣力大概は消耗し物の用には立つまじき年齢なれど、彼れの不屈不撓なる精神は老いて益々

壯にして一千七百十九年四月に其の名著『ロビンソン・クルソー』の第一巻を出だしき。それより同八月に至りて第二巻を、又翌年八月に至りて第三巻を出だしぬ。此の書の評判譬へんに物なかりしかば、彼れは更に世上の需要に應ぜんとて、一千七百二十年に三種の冒險物語を出版しぬ。「Duncan Campbell」(ダンカン・カムペン氏)「Memoirs of a Cavalier」(王黨の言行録)「Captain Singleton」(船長シングルトンの傳)是れなり。一千七百廿二年には彼れ三種の書をものしき。「Moll Flanders」(モール・フランデルス)「History of Plague」(龍動大疫病記)「Colonell Jack」(大佐ジャック)是れなり。『龍動大疫病記』殊に名高し。又一千七百二十四年には『ロキザナ』(幸福なる夫人)及び『大武烈顛漫遊記』を出だし、一千七百二十五年には『世界新航行記』(完全なる英國商人)を出だしぬ。前者は例の如き冒險物語、後者は商人必携とも稱すべきものなり。それより後ち一千七百二十六年には「The Political History of the Devil」(悪魔の政治史)を出だし、一千七百二十七年より二十八年にかけて「The Plan of English Commerce」(英國商業策)を出だしき。

當時デフォアはストローク・ニウ・イントンに在りて美麗なる邸宅に住し、暮らし向き

いどく、贅澤なりしが、収入に超えたる奢侈に耽りしため、負債山のやうになりて如何ともしがたく遂には逐電してクリニツマ近傍に身を潜めき。其の後ムーアフィールドなるロイプメーカー、チークに居をトしけるが、放逸なりし六人の見は思ひく、に離散して毫も父の上を顧ざりしかば、デフォーは此れがために少からず心をいためけるに、老衰漸く至り、加ふるに痛風と胃瘍とが併發せしかば、身心兩ながら淺ましようなりて一千七百三十一年四月二十四日といふ日、竟に溘然として七十一年の煩生涯をぞ終へける。

デフォーを論ずるもの何れも斷言して曰ふ、彼れは如何にしても吾人の同感を表すべき人物にあらず、彼れは口常に廉潔を唱へながら行ふところ常に卑劣、一方にてはチャコピン黨の爲に筆を執りながら、一方にては政府より秘密の金員を受けきと。或傳記家は彼れを評して、恐らくは未曾有最大の食言者ならんと言へり。デフォーが文學上の著書の中、最も有名にして又最も見るべきは言ふまでもなく『Robinson Crusoe』、『コンソントンタルロー』なり。此の書のその作者に於けるは猶『失樂園』のミルトンに於けるが如く、『ロビンソン、クルロー』といへば隨うてデフォー

を憶ひ起こし、デフォーといへば隨うて『ロビンソン、クルロー』を聯念す。デフォーをして英國文學史上の不朽の大名を博せしめたるものは、實に一部の『ロビンソン、クルロー』其の物なり。蓋し此の書の委曲を解すれば彼れが文學的著作の全斑を推するに足るべし。

デフォーの時を距つること遠からざる前にアレキサンドル、セルカルタ(或はセルクレイグ)といふ水夫ありき。太平洋を航海せし中船長ウーゾロイシャルスと争を生じ、やがて只一人デユアン、フェルナンデスの無人島に取り殘され、孤棲せしこと數年、其の後船長ロイシャルスに助けられて本國に歸りき。此の事の顛末は載せてロイシャルスが自著『世界周航記』の中にあり。デフォーが『ロビンソン、クルロー』は此の事實に基きて構案せしものなると明なり。さて『ロビンソン、クルロー』の大要をいはん。

英國ロオクに住める商人の子にロビンソン、クルローといふがありけり、父は法律家、さなきまゝ思へりしに、彼れ深く航海を好み遂には父母の許を經てほしいまゝに水夫となり、フル港より龍動へ出帆する或商船に乗り込みけり、さる程に途中にて二たび暴風にて暴風に逐ひ、破船せしかば、小舟に乗りて上陸し再び龍動に歸り來たりぬ。其の後尙

も航海に心を傾け亞非利加地方に航せしと前後二回第二回目には土耳其の海賊に捕へられて其の奴となりしが幾程もなく機會に、乗つて脱走し、葡萄牙の商船に救はれてワイドス、サントス灣のほとりに上陸し、こゝにて二年間煙草商人となり、一攫千金の利を得んと欲し、一般の奴隷買船を雇して亞非利加を心當てに出帆せしが、途中暴風に逢ひて船を損じ、メルベード、メズ島に寄りて損所を修繕せんせしに其のひまもなく再び暴風に逢ひて破船し、乗組員残らず小船に乗りて遙なる陸地を目當てに漕ぎ出だし、大霧の爲に悉く海に溺れ、クルーソーのみは不思議にも陸地に打ち上げられ、さて翌日より退潮を待ちて淺瀬に横はれる船中よりあらゆる必需品を運び、それより岩窟の上に天幕を張りて住居を定め、船より連れ歸りし大羊のたぐひを唯一の友とし、餓うれば菓を食ひ、寒ければ獸皮を割ぎて衣となし、或時は既往の過を悔い、或時は現在の不幸を悲しみ、或時は上帝に祈りて未來に望を屬し、眩しき生活を送くると數年、一日遙かに陸地あるを認めて脱島の念勃興し、大なる槍樹を伐り取り、四年の歲月を費やして一艘の獨木舟を造りぬ。然るに舟は重くして到底船卸するに堪へざりしかば、已むを得ず渠を掘りて海水を引かんせ企てけり。されどそれには十餘年の歲月を要すべきを見て再び工夫を變へ、此の度は前のよりも輕小なる獨木舟を造らんせ企て二年にして其の功を竣へ、之れに乗りて先づ島の周圍を巡航せんせ試みけるが舟は潮に引かれて遠く沖中に出でけり。されど幸にして元の島に吹きつけられ其の日は事もなかくて歸り着きしが、ある日小舟の方へ赴かんせしに濱邊に人の足跡あるを見ていた

く驚き、遂にはその惡魔の所爲に踏して心安からぬ日を送りしこゝ更に三年ある日又島の南端に出でけるに、人の頭骨の散らばひあるを見いだしけり。是れ即ち大陸に住める人を食ふ野蠻が、其の犠牲を伴ひて此の島に渡り血祭を爲し、名残なりき。其の後クルーソーは孤島に在ること二十三年ぶりにて五隻の獨木舟の我が住家近くに上陸するを見たり是れぞ食人野蠻が其の犠牲をわて渡來せるなりけり。クルーソーは其の犠牲の一人が命を助からんとて逃げ出だし、野蠻二人して追ひ來るを見て一人を銃殺し、一人を打ち倒して件の犠牲を救ひぬ。其の日は恰も火曜日なりしかば彼れの名をフライデイと命じて已が僕と日々英語と基督教とを教へけり。クルーソーはフライデイと其の後大陸に出でんため更に他の獨木舟を造らんせ力めつゝ餘念なし。其のうち野蠻等又々渡來しけるを二人して撃ち退け犠牲二人を救ひけるが、一人は葡萄牙人、一人はフライデイの父なりけり。其の後一大英船の此の島の近傍を通航するが有りて、其の船より小舟を乗り出だし、船長と副船長と一人の乗客とを縛し、水夫等大勢附き添うて此の島に上陸しぬ。蓋し船中に暴動起り、背反者等一味じて船長以下三人を此の島に捨てんせこそしつるなりけり。クルーソーすなはち船長を助けて再び船に返らしめしかば、船長は背反者を悉く島中に殘し置きクルーソーとフライデイとを乗せて英國に歸りけり。クルーソーは三十五年ぶりにて本國に歸りしに父母は元より一門知己悉く死に果て、誰れ一人彼れを知る者なし。彼れば其の後龍動にて妻を娶りしも宿癖尙ほ未だやまずして屢、航海を試み、年七十二に及びて未

シヨウは此の書を評して曰はく、クルーソーはあくまでも普通の人間なり故に老若男女を問はず彼れに同感し、彼れの喜愛を見ること猶自己の喜愛を見るが如くす。クルーソーが智もクルーソーが先見の明も一として人間の普通性以上には出でず。例へば非常に辛苦して獨木舟を造りたるも、初より其の舟の重くして船仰に堪へざらんを悟らざりしが如き是れなり。されば讀者の中百中の九十九は、我れも斯かる場合には斯かる先見に暗き事を爲すならんと思ひて容易くクルーソーに同感す。思ふに年若きものに此の書を讀ましむるは恐らくは、多少の害あるべし。此の書が如何に多くの兒童をして水夫ならしめしか、測り知るべからずと。實にこの書の價値は主人公クルーソーが奇傑の士にあらざる所にあり。彼れは通常人の力量と通常人の常識とを有せし人に過ぎず、而も如何なる災厄、失敗、困苦にも堪へ常に件の力量と常識とを用ひて自ら工夫して其の難を免れんとする所、實に萬人の同感に價す。この書が内外教育界の珍寶となりて幼年者が心力開發の好材とせらるゝは故ありといふべし。博士マヨソンは曰はく、一人の手

に成れる著書にして、讀者の巻を終ふるを惜しむは『ロビンソン、クルーソー』と『ドン、キホオテ』と『天路歷程』とを除けば他になしと。以て此の書のもてはやさるゝを知るべし。

さてデフォーは一世に珍しきばかり健筆多作の人なりしかど、元來詩人、美術家の資にあらざりしが故にその想像の如きは毫も實務家の觀察と異るところなく、たゞ事務局の要領を逸せざらんことを旨とせしに似たり。而してその文を草するや別に結構修飾を設けず、日常の座談と同様意に随つて述べ去るを常とせり。されば語句の重複、句調の良否、感興の如何等は初めより問ふことなく、たゞ思ふだけの事項をば紙上に瀉ぎ盡せば足れりとせり。彼れは事を叙すれば紀年月日及び時刻をもちらすことなく、僅か風ありと記するにも必ず方角を精示せり。かゝる不用意の文章かゝる煩鎖なる記叙法を以てして尙ほ且つ讀者をして巻を措く能はざらしむる筆力は驚くべし。たゞし彼れの作を讀みて起す感興は大方世變人事の實感にして毫も詩的想像の漂渺たるものにあらずしは是非もなし。傳へいふオックスホオドの市長トウニーといふ人深く此の書を愛讀し、暇ある毎に繰り返す

を無上の樂とし、これを徹頭徹尾事實の記録なりと思ひ居りしに、或日其の友某より此の書の全く作物語なるよしを聞きて大に嘆息し、我が老後の最大快樂を奪はれきとて其の友を怨みきとなん。此の書の如何に實らしく書き做されたるかは此の一事にても著けし。但しシヨウの言へる如く、クルーソーの如き境界に臨まば何人も云爲するどころクルーソーに異ならざるべし。即ちクルーソーは人間に普通なる性情のみを具へてクルーソーに特所なる性格を有せず。又此の書の結構といひ書きぶりといひ起伏照應の妙なく張説省筆の奇なきは勿論篇中一として人事の纏綿せる所、人情の味ふべき所なし。是れ即ち此の書を眞小説と名くべからざる所以にして、隨うて又デフォー眞小説家と稱すべからざる所以なり。

第八章 サミエール、リチャードソン

リチャードソンの生涯——著作——『バメラ』——その批評——『アラリッサ』、
 『ハーロー』——その批評——『士爵チャールズ、グランヤソン』——その批評——
 一總評

デフォーの『ロビンソン、クルーソー』は、當時に在りては眞に斬新の作なりしが、事の實

を寫すに審にして性の實を寫すに粗なりしかば未だ眞の小説とはいふべからざりしに、サミエール、リチャードソンいつるに及びく心理小説の緒はじめてひらけたり。リチャードソンが經歷は單純なれば格別にとり出で、叙すべきほどの事なし。彼れはデルビー州なる指物師の子にして謹慎勉勵なる買人なりき。一千六百八十九年(我が朝元録二年、井原西鶴四十八歳)に生まれたりしが父の資産豊ならざりしかば、僅かに其の地方の小學に送られて尋常の教育を受けしのみ。幼きよりをかしき物語をなすことに巧なりしかば其の小學校に入りしや、やがて衆童に愛せられしと、彼のナルタル、スコットの幼時にひとしく常に群童に圍繞せられて種種の物語をなしにきといふ。且つ其の柔和温良なる性は自然に女性の同感を呼ぶに適し此の未來の小説家をして夙に婦女社會に接せしめき。而して女性の中には夙にリチャードソンの才能を認めて奇異なる役目をなさしめしもあり、すなはち其の情人に艶書を送るや或はリチャードソンをして代筆せしめ若しくは拙きを添削せしめき。案ずるにリチャードソンが特に婦人の性情に通曉せしは、一つは其の性質にやゝ女らしき所ありしにも因るならめど、又一つは斯かるめづらしき便

宜を有したりしにも因るならん。十五歳の時父の吩咐にて龍動におもむき、*ジョン・ワイルド*といふ活版師に奉公し七年の年期を終へて後、尙植字方検査方となりて五六年を過ごし、後遂にソールズベリ、コールドにてみづから業を営み、番主人の女を娶りて妻となしき。彼れは爲人柔和にして廉潔なりしのみならず、頗る事務の才能に富み、加ふるに市人としては稀有の文才を備へたりしかば、書肆皆彼れを重じ、或は書籍の索引を作らしめ、或は序文贈呈の辭等を作らしめき。就中書肆リフングトンとオスホルンとは彼れが書信文に巧なるを知りて通俗用文を綴らんことを乞ひしにリチャードソン曰はくむしろ教訓兼帯のものどせば如何と書肆更に妙なりといふ。リチャードソンすなはち其の著にどりかゝりしが、ふと思ひつきて、若し此等書信文を互に關係あるものとして連続せしめ、且つ成るべくまことらしく物して一篇の物語となさば或は文學上に一新躰を開くにも至るべく、兼ねては荒唐奇怪なる傳奇小説をよるこぶ讀者を宗教道德の方面に向かはしむる一助ともなりぬべしと思念し、存て一友人より聞きし話の尙記憶に残れるを幸に、そを一篇の骨子として、遂に書信躰の小説をものしけり。"Pamela"一名「美德のむく」是

れなり。『Pamela』は蓋しシドニの『アーカデヤ物語』に見えたる女性パメラの名を借りたるなるべし。一千七百三十九年十一月十日起稿翌一月十日脱稿全部二冊一時の出版なり、即ちリチャードソンが五十歳の處女作なりき。此の書の評判たいちに全國に傳はりければ人々争うて購讀し、就中年少婦人等の景仰殆ど崇拜の度に達しき。此の著はひとり俗間にもてはやされしのみならずアレキサンダー、ポープの如きも此の書を評して人を感化するの力説教文二十卷にも勝るといひ、博士シメルツクもまた其の説教壇上にて此の書を世人に推薦せしかば、發賣後一年にして五版を賣り盡し、和蘭、佛蘭西等の外國もまた相ついで之を翻譯するに至りき。そもく英國從來の小説類は大抵其の材料を荒唐奇怪なる、あるまじき事柄に取り、加ふるに作中にあらはるゝ人物も概して貴公子貴婦人と限られ剩へ人物の大概は現實の人間といはんよりはむしろ一種の怪物ともいふべきが多かりき。されば彼のダニエル、デフォーが『ロビンソン、クルソー』を著して一時讀書社會を驚動せしも偶然にあらず、それ主としてそが作中の人物事件の現實にありげなるに由れりしなり。二つには躰に寫實を主とし、全然舊傳奇の常套を脱し別に斬新なる

一世界を開きしが故なり。さもあれアフォーの作は、結構も、叙寫の法も、總じて通常の談話に似て未だ眞の小説たる體を具へず、且つ前にもいへる如く其の人物も單に通性を具へたるのみにて殊別の個性をば現せざりき。然るにリチャードソン出づる及びて眞成の寫實小説の端を開き、ひとり人物と事件とを實際に取れるのみならず、因縁の關係を複雑にし、心性の秘密藏を聞き、個々の人物をしてさながら活けるが如く殊別の性情を現せしめき、リチャードソンを以て英國小説の鼻祖なりといふは此の故なり。但し其の餘りに煩瑣冗長なるが爲に尋常讀者の嗜欲は、スコット、サカレ、デッケンス等の鹽梅せる一層甘美なる珍羞の方へ率かるゝや疑なしと雖も、さりとて彼の舊傳奇の陳腐爛熟なる調進に比し來たれば、其の料理の精妙なる眞に驚くべきものあり、ひとり當代に愛玩せられしのみならず、近くは佛獨の文壇にもてはやされて幾分か佛國及び獨逸新文學の導火となりしこと、異しむに足らざるなり。

リチャードソンは人のすゝめによりて後更に(一千七百四十一年)『バメラ』の續篇二卷を綴りき、但しこは前二卷に比していたく劣れり。

『バメラ』の成功の未曾有なりしによりて、著者は更に第二の作に着手し、一千七百四十八年其の傑作と稱せらるゝ“*Clarissa Harlowe*”を出だしき、全部七卷、こもまた書信體の小説にして第一巻と第四巻とに訓誡の旨を述べたる文を添へたり。此の書の世に出でしや、好評『バメラ』にもまさり、年少婦人等は其の女主人公がありとある炎厄に遭遇せるを見て結局如何に成ゆくらんと心を痛め、わざ／＼著者に書を送りて主人公を炎厄の中より救ひ出だしてよと乞ふもの引きも切らざりきといふ。

一千七百五十四年更に第三の小説“*Sir Charles Grandison*”(全部六卷)を著しき。こは競争者フールディングの死に先ちしこと一年なり。されど此の書は明かに失敗の作なり、さるは上流の言語風俗に嫻はざるリチャードソンが、ひとへに訓誡を眼目として、力めて上流の而も理想の人物を描かんとしたれば、無理なる處のみいと多かり。さるほどにリチャードソンの名聲やう／＼高く、其の信用將た他に超えしかば、遂に衆議院の印刷物を一手に引受くるの特許を得、剩へ一千七百五十四年には選ばれて文房具組合の會長となり、一千七百六十年には國王の御用印刷株の一半を

さへ購ひけり。ソールズベリコートなる其の印刷所と倉庫とが大なる家八棟までを取毀し、跡に建てられきといふをもても、其の業務の盛大なりしを察すべし。一千七百五十五年までは、市中の北端なるハンマースミスに住居せりしが、同年パーソンズ、グリーンなる住家に移りき。彼れは晩年に至るまでも、主として女性と往來せりしが、彼等はいづれも相力めて出來得る限の愛敬を呈して、此の老善人を慰めきといふ。一千七百六十一年、彼れは遂に七十二歳を一期として眠るやうにみまかりぬ。先妻は之れより先き一千七百三十一年にみまかりたり、後妻は一書買の妹なりき。先妻の腹に五男一女ありて、後妻の腹に五女一男ありけり、其中男子は悉く夭折し、女子も二人だけは早世しき、残りし四人の女等は皆よく父に事へきとぞ。

リチャードソンの著作は『パメラ』『クラリッサ』『グランヂョン』の三篇あるのみ。此等皆心たゆまるゝ書信牀の小説にして通讀せざる人世に多げなれば管々しけれど、作の大筋と聰明なる評論の一斑とを擧げて其の品質を窺ふの便に供せん。まづ『パメラ』一名『美德のむくい』の概略を言はん。

或老刀自の召使にパメラといふ清淨其邪念なる婦三五ばかりの一少女あり、刀自の子なる若主人 *Edmund* といふものパメラの容色に迷ひさまぐに挑めども、心正しきパメラはなびかん色なし、果は怒りて罵りはづかしめ、或はすかし、或は物をさらせ、或は背負し、或は幽閉し、待遇非道を極めたり、さりながら此の内牀の背負より、パメラに取りて一層つらかりしは、我が其心の苛責なり、蓋し人は知らざれど、我が心はたひそかに若主人を憐ひ慕へり、されども處女の清淨を犠牲にして人のもておそびさならんとは、道心堅固なるパメラが心の許さざる所なり、さりさて正妻さなり得ん怒も無し、こゝに於てやあくまでも身心の苦痛を忍び堪へかりも誘惑に應ずるの色なし。パメラは實に今の英佛の理想的女子に似たらんよりは、ほるかに我が女大學的淑女に似たる内氣にして小心なる乙女なり。さて此の間に意地悪き女性などもからまりてパメラの災厄殆ど極點に近く及びて、非道なる若主人も遂に動かすべからざるパメラの清徳に感し、翻然其の邪なる心を改むるに至り、やがてパメラを擧げて正妻と爲す。

以上『パメラ』の骨組なり。篇中の書は概してパメラより其の父母に送りたるものなり。

當代の人々が思ひがけなく此の書に接せしや、さながら虛偽不自然の境を脱して、眞理自然の境に歸りたらんが如くに感じ、擧りて喜悅の情を表せし有様はスコットの曾ていへる如く彼等が催眠欠伸を禁ずる能はざりし荒唐無稽浩瀚なる舊傳奇

の一二種を繕きても知るに足らん。

もとより道義の理想一變したる今日より見れば、女主人公が行爲情操の完全ならざるは論を俟たざれど、又其の餘りに柔和脆弱にして凛然たる氣概に乏しきが如きは専ら訓誨の爲に作られたる主人公として見れば、殊にうなづきがたき所なれど、若し之れを當代の寫實的小説の主人公として見れば、なかくに近世の寫實小説中にだに認めがたき妙趣あり、バメラは趣くとも此の書を耽讀するの間人をしてひとへに其の無邪氣と質樸なるに同感せしめて、他を思ふに遠なからしむるの魔力あり。ゴッスは曰ふ、

此の生硬なる書中に見出ださるべき缺點は種々あり、無漸放逸なる若主人が常に歸せしは、彼れに然るべき價值あるが爲にはあらで、其の伶俐なる妻が、彼れの爲に其の美を餌にして、氣息も絶えくくなるサマン(種類)を釣るが如く、彼れを陸上に釣り上げしよるなり。又バメラも無邪氣一方にして、只管善道におのゝける間こそいみじくもゆかしけれ、やがてみづから其の身の美徳を自識するに至りては、吾人の之れに對して同感の念を失ふのみならず、當時の弛みたる道念までも此の意外なる變化を見ては、壓縮せざるを得ざりしならん。此等はいづれも缺點の一なり。されば當時全世界は此の書喜びて狂せんばかりなりき、吾人が今日恒重冗長とするものも當時にありては、その

『クラリッサ、ハーロー』の大筋は左の如し

長々しく連絡せるかば却りてめでたしまたへしならん。(中略)佛蘭西にては之れより十年ばかり以前に、クリイピヨン、マリヂリ、プレヂーなどいふ作家ありて、微細に人情を解剖せんを試みたりき、就中マリヂリの作の女主人公が其の經歷ていしかたを語るこゝろ幾分ハメラと相似たり、又其の管々しくして變化に乏しきこゝろ不思議にもリチャードソンの作に似たり、さりながらリチャードソンは毫も佛蘭西語を解するを能はざりきといへば、其の著は一切の材料を實際の生活より得たりしならん、彼の書に負ふこゝろはあらざるべし。(但しその頃既にマリイが作の英譯ありしこゝ今は確に知られたり)そは兎も角もあれマリヂリの如き拙劣の作家と近世小説の光臨たるリチャードソンとは、固より同日にして語るべきものにあらず云々。

豪家の女クラリッサは才色兼備實に當代の理想的淑女なり、而して其の父、其の兄、其の姉、其の叔父皆當代に實在せし種々の悪徳をもてる不仁の人物なり、頑固暴斷なる父はクラリッサを強迫して卑劣なる人に嫁せしめんをす、クラリッサが之れを諾はざるより全族一致して之れを虐待す、クラリッサ遂に堪へかねて其の意中の人ラウレースの許に身を寄せしに、此のラウレース元來輕薄無慙の徒、好才子の雛形なり、其のクラリッサを愛すさいふは只一時のもてあそびにせん、心の心に外ならず、彼れの非道の振舞クラリッサを苦しむること限なし、さればクラリッサ情に於ては彼れを戀ひながらも、理性は其の爲人の卑劣なるを賤し、結婚を拒み、竟に悲のあまり斷腸して死す、好人ラウレ

リスは一旦英國を去りしが、後クラリツサの親戚、大佐モルデンと決闘して殺されけり云々。

篇中の書信はクラリツサと其の友なる嬢との間の贈答、及びラヴレースと其の友ヂン、ベルホオドとの間の贈答より成れり。

此の書はリチャードソンが最傑作なりと稱せらる、當時佛蘭西にて此の小説の名聲頗る高く、デローの如きはホーマー、ユリビヂーズの著と并稱し又ルッソは明かにこれを模倣して其の小説を作り、アルフレッド、デムーセの如きもこれ實に世界最良の小説なりと稱しき。ショウ曰はく

リチャードソンは其の天性境遇ふたつながら男性を描くよりも女性を描くに適したれども、此の篇のラヴレースの如きは、描寫間然すべきなく、微妙精緻一切の文學中稀に見る所なり。ラヴレースといふ名の、何れの國語にても女殺の手管に長けたる遊治郎の變名となれるが如きは、其の人物の活けるが如くに描かれたる明證とすべし。ゴッスは曰はく

男性に於けるも既に然り、まして女性たるクラリツサに至りては、文學中に於ける最も活動せる、又最も同感を表すべき婦人の一人なり、彼の女の缺點は却りて彼の女をたふさきものとし、彼の女の弱點の却りて其の節操に勝利の冠を與へしめたる、即ちリチャ

ードソンがクラリツサを寫すの巧妙熟練なる所以なり(中略)著者がラヴレースの性格を寫すや、苦心大方ならざりきといふ、何となれば彼れをして純粹の惡漢と作りなせば、全篇の主意これが爲に破壊せられん、故に機慧敏捷なる人物に作りて、當時の風流紳士の雛形を現したり、且ハローウ家の親戚にして、現にクラリツサの死を目撃せし大佐モルデンをして、彼れと決闘せしめ、竟に之れを燈すこととなして、應報の理を示しき云々さて『サー、チャールズ、グランヂソンの大筋をいはん』に主人公グランヂソンは才德兼備の紳士なり、女主人公二人あり、一人をクレメンチナといひ、一人をハリエットといふ、いづれも令徳の淑女にして共にグランヂソンを慕へり。グランヂソン後ハリエットと婚するに至り、クレメンチナは失望悲痛のあまり狂亂す。クレメンチナが狂亂のくだりは本篇中尤も出色の文字なり、又著者は本篇中にて決闘の非を論じたり、されば主人公グランヂソンをして他と決闘せしむるにも其の拳法の精妙なる能く武器を用ひずして敵の劍を奪ふが如くに作れり。ショウの批評は能く此の篇の長短を盡せるものなり、曰はく

蓋しリチャードソンは三小説をもて三種の階級を盡かんと試みたり、即ち『パメラ』にては下等社會を、『クラリツサ』にては中等社會を、『グランヂソン』にては上等社會を寫さまくせり、されど彼れは其の教育の上よりいふも、位階の上よりいふも、上流社會に於ける思

想感情に通ぜざりしかば、其の叙寫は多く推測より出で、不具なり、所詮彼の大世界の風習に慣れず教育に不完全なる人の得て陥りやすき誤謬を免るゝこと能はざりき。彼れは絶えず上流の用語を描さんとして苦心せしかば其のギクシヤクとして殊更めける言辭は、之れを實際と對照し來たれば甚だ笑ふべきものなり。蓋し上流に立てるやからば、上に模倣すべきものなければ、舉動おのづから虚飾を脱し、用語なども平易自然なるを例さす、然るにリチャードソンが嘆息すべきことなせる人物を見るに、俗に謂ふ半可通とも稱すべきものにて、小説中に在りても實際に在りても、厭はしきものなり。されば此の篇の中にて吾人の同感し得べきは、若干の弱點過失ありて不自然なる圖畫の弊を脱し人間らしく見えたる人物のみ、例へばクレメンチナが狂亂の如きは、フレッツチヤルの筆さしても耻づかしからず、其のあはれ深く物せられたる、グランヤソンよりもハリエツトよりも一層旨味深し。リチャードソンは其の性女性に似たり、彼れが叙寫の長やかにして、綿密なるは其の自然の結果なり。ハズリットは曾て此の篇を讀みて、著者がグランヤソン夫婦が新婚の暖衣を叙狀するに十二頁を費したりとて咎めたるが、後に或乙女が、此のくだりこそ篇中の最も感動すべき挿話の一つなれとて、現に其の全文を寫せるを見出だして驚きぬ、以て其の如何に女性に愛讀せらるゝの特色を具へたるかを知るべし。はトめリチャードソンが此の作を編まんさせしや、其の中なる上流社會の用語に誤謬あらんことを恐れ、或貴女につきて是正を乞ひしに、誤謬矛盾餘りに甚しかりければ、遂に正誤の望を絶ちけりぞ。思ふに人間、就中女性の性情を根柢

よく解剖したる點に於て、又微細なる出來事及び綿密なる叙寫を、いやが上に積聚するの傾ある點に於て非に其の感情のやゝ不健全なる點に於て(勿論國民及び時代の異なるありさいへども)バルザックミリチャードソンとの間に著く相似たる所あり云々。

さて此等三小説に通ぜるリチャードソンが作家としての長短を検せんじ、まづ彼れが著の感化力を論じて、其の宗教上及び道德上に於ける効績の偉大なるを讃せるはウエルシなり、其の説に曰はく

思想に富める人善良にして其の力を高尚なる目的に用ふる時は、彼れは神明の偉なる考案を實行す、即ち人生を極美極佳のものとし、又人情、正義、慈悲、敬虔の度を増加し、秀拔なる男女たらんの願望を増加す。而して彼れが放ちたる至善の光の翕然として人を化する、宇宙の抗すべからざる重力にひこし、大無限其の背にあればなり。倫理的小説家は實にかゝる恩恵を垂るゝ者なり、彼れは事物の精靈を吾人が眼前に示現し、道德の大義を理論上の言語より實行上の言語に翻譯し、高き行卑しき行を對照して其の是非を明にし、以て善を愛するの念を強くし、惡を憎むの念を鋭くす(中略)吾人若し如何に讀者が舊派の無稽なる物語を讀みて、催眠欠伸を禁する能はざりしか、如何に喜びて彼等は此の最初の寫實小説に向ひしか、如何に當時の風流社會が熱中してそをもてばやししかを考ふれば、吾人はリチャードソンが一たび湧き出づれば永久潤るゝとなき道念の泉を發見せしことを疑ふ能はざるべし云々。

テーンは彼れが教訓小説の弱處を衝いて曰はく、

我が親愛なるリチャードソン、足下はいさされたる作家なれども十分の才を有せず。足下は道義の補助たらんとして却りてそれを害したり。足下は其の著の首尾に挿める教訓的廣告の結果を知れるか。吾人は之れを見て要縮し、今までも俗衣を着たる平人に見たりし男の俄に本相を現し、黒衣を纏へる脱教者となりて出で來たるを見て、其の欺かれたりしを憤る。道念はおのづから没潤せしむべし、強ひて被らすべからず。記憶せよ、人は其の心の底に背反の性を具へたるを、餘りに規律をもて取り圍まば、却りてその中を逸出して自由なる空氣を呼吸せんとすべし。足下は『バメラ』の巻尾に、模範となるべき彼の女が美德を列擧したり、讀者は欠伸して其の樂を忘れ、今まで天女の如くに思ひしバメラも、其の實は教訓の爲に出で來たれる教會の傀儡ならずやと訝かるなり。(中略)吾人は術を愛す、而して足下の有したる技術はいさゞく僅少なり、吾人は樂しまさいんを要す、而して足下は吾人を樂いませんせざるなり。足下はあらゆる手紙を全寫し、談話を細記し、何事も記述し、一物をも削り去らず、足下の小説は數卷を充塞す、おはれ吾人を憫みて剪刀を用ひよ、巧妙なる文學上の工人たれ、記録局の書記たるなかれ。足下が一切の證書類を大道に於て傾瀉するなかれ。美術は自然と異なり、後者は延長し、前者は緊縮す。二十頁の手紙二十通も或は一性格をも表す能はざれど、一妙句よく之れをあらはす。足下は其心の爲に壓せられたり、故に一歩づゝ徐歩せざるを得ざるなり、足下は自己の天性を恐れてそれを抑制す、足下は情慾が最も其の毒を逞

うせる瞬間にだに、聲高く叫ばしめず、又自由に語ることをもえさせず。足下は強ひて辭をうつくしくし、語を飾る、自然の人性が熱誠の如き情欲に貫かれて絶叫し、躍起し、足下が隔壁を跳出せんとするや、足下はシェークスピアの如く、それを有りのまゝには示さざるなり。足下は畢竟人の自然の性情を愛すること能はず、足下が恣に懲罰を裁するは即ち其の人情を知る能はざる所以なり云々

以てその長短を知るべし。要するに彼れは神経質にして誠實温厚の人、やゝ悒鬱病の質ありて滑稽の能と敏捷なる才氣とは缺如たりしかど女性に對する異常の洞察力と一種の文才少くともその所思を十分に表現するの伎倆を有せしなり。十指の指すが如く冗長は彼れの失なりしかどその綿々として際限なき冗筆の中に部分の描寫全体的結構に照してその割合を誤らざりしは多とすべし。この點に於ける彼れの伎倆はフィールディング及びスモーレットの上にある。

第九章 ヘンリ、フィールディング

リチャードソンとフィールディング——フィールディングの本領——生涯及び著作——『ゴセフ、アンドロニス』——『ゴナサン、ワイルド』——『トム、サロンス』——『アメリカ』——總評

粗豪磊落個人としても作家としてもリチャードソンと直反對なりし作家をヘンリー・フィールディングとす。コールリッチ嘗て二家を評して曰くリチャードソンの作を讀みて後にフィールディングの作を讀めば暖爐もて暖められたる病室をぬけ出で、風蕩る夏の初めに廣やかなる緑野を逍遙するが如しと。リチャードソンは哀傷しフィールディングは戲謔す、彼れは沈鬱これに快活、彼れは常に愁へ常に怖れ常に懸念し常に苦慮し嘗て安心する能はざる神經質の如く、これは放言し笑諷し嘲罵し冷刺し念頭些の苦勞を感ぜざる者の如し。リチャードソンは女々しき悲劇の旦末に比すべくフィールディングは荒々しき喜劇の淨丑にくらぶべし。リチャードソンは個人として謹慎敬虔の良市人、フィールディングは放逸粗豪の遊蕩子、前者は常に神明を畏敬し後者は屢、酒色に荒みき。小説の作家としてはリチャードソンは狭けれども深く、フィールディングは廣けれども淺く、前者は専ら女性的人格を畫くに長じ、後者は廣く諸性癖を寫せり。要するにリチャードソンは個人としても作家としても終始規矩準繩によりて進退しフィールディングは之れに反し一舉一動ひとへに自然の性に從へり、かるが故に一は窮屈に狹く一は自由にしてのびらかななり。フィールディング

の作中にあらはるゝ人物は男女老弱を問はず皆活潑なり皆快活なり善く談じ善く歩し善く食ひ善く飲む就中女性に在りては嘖嘖口論争鬪又傷は不斷の事たり隨うて作中の人物一人として多少の缺點を具せざるはなし。痴愚ならざれば頭陋頭陋ならざれば浮薄輕佻浮薄輕佻ならざれば偽矯偽矯ならざれば貪婪貪婪ならざれば多情いづれも道徳上より謂ふときは不具の徒なり約言すれば式亭三馬が戯作中の人物に一層判然たる性格を附與せるが如きものは是れ彼れが最も得意とせし第二流の人物なり。また彼れが小説は概して郊外の事に關すリチャードソンの小説の主主に深窓及び室内の事に關せるとは反對なり。フィールディングの作は一面よりいへば旅行記に類す譬へば我が武者修行の物語を一層世話セワに崩したるが如し回毎に局面あらたまり新事件起り新人物出づ殆ど應接に遑あらず而も一篇の主人公は猶光る君の源氏物語に常住常現マシレシなるがごとく彌次郎兵衛喜多八の膝栗毛に通在せるが如く毎に其の間に出没し對手變テけれども主變メはらざる脚色なるが故に首尾相つながり脈絡相貫くを得たり。

イルヂンクは只管當時の實相を模寫し來たりておのづから野に失したり。リチャードソンは十八世紀の理想的な人格を描かんと力め、イルヂンクは當時の亂倫に寒心して殆ど笑を寫すことを悦べり。小心謹直なるリチャードソンは當時の亂倫に寒心して殆ど笑の能力を遺却し、蕩迷磊砢なるイルヂンクは此の大自由の生活に流連して殆ど其の涙を失はんとせり。彼れもど多情多感の人時に自他の爲に泣かざりしにはあらず、彼れは所謂ユーモリストたるの資格を具せり、哀傷を寫すの筆はた頗る見るべきものありされども、彼れが同悲は膚淺ならざれば、暫且なり暫且ならざれば、浮泛なり。彼れの落落たる氣質は長く一事に執着して深く沈愁する能はざりしなり。蓋し武人的にして詩人的ならず、男性的にして女性的ならず、活動的にして瞑想的ならず、是れイルヂンクの小説作家としての特質なり。されば彼れは十八世紀の大腐敗を觀るも他の情に脆き詩文人の如く徒らに悲愁憂悶し沮喪絶望するの女々しさには墮らざりしが、さりとて此の墮落に感慨してまづみづから己れを淨うし進んで同胞を淨うせんといふ大なる志を抱きしとも無し。こは其の作の滑稽的なるが故にいふにあらざ、單に作意の上よりいへば彼れも一種の

勸懲家なり、人種と時勢と境遇との然らしむる所、彼れ將た教誨者たらざるを得ざりしなり。彼れの作せしや毎に道義的目的を有せり、彼れは其の作チヨセフ、アン・ドリュースの序中に記して曰はく、「悲哀嚴格の調子は却りて世をそこなふの虞あり、談諧滑稽こそはむしろ人をして善良なる氣質を養成せしむるものなれど。こはリチャードソンの作を嘲らんが爲に或は殊更に言を立てたるならめど、其の所謂諷刺の裏に諷刺教誨の旨毎に籠りて會釋なく不徳弱點を剔抉し、暗に當代を矯治せん、の意のはの見ゆる以上は、彼れはた勸懲家たるの名を辭する能はざるべし。彼れは自然を愛するも、シエイクスピア、ゲーテの如く無私公平に愛せしにはあらず。彼れは純粹の美術家にあらずして、アングロサクソンの美術家なり、何となれば、彼れは常に是非善惡を批判しつゝあればなり。彼れは自然の勢力として性情を描くといはんよりは、褒貶すべき世間的勢力として之れを寫せるものゝ如し。すなはちイルヂンクは心理家にして兼ねて裁判官なり、諷刺家なり、勸懲家なり。但し嚴密にいふ時は、イルヂンクをして勸懲家たらしめしは、時勢時潮の然らしめし所なるべし、而して彼れが作の野に失して高雅の側面を脱したるも、ひとしく時

尙の所爲とやいはん。彼れ若し十九世紀の文壇に生まれれば豈必ずしもかくの如くならんや技倆の上よりいへば彼ればチャッケンス、サッカレに比して或は優ることも劣ること無かるべし。

ヘンリ、フィールディングの父は Denhigh の伯爵が孫にして陸軍の將官なりき其の母はた一裁判官の女なりきといふ。一千七百〇七年四月(我が朝寶永四年湯淺常山生誕の前年)サマーセットシャーヤなるシャーフハム、パークにて生まれたり。其の父家眷あびたしく而して經濟に拙かりしかば家計夙に不如意となりき。ヘンリは其のはじめイトンの學校に入學し後和蘭に往きレーデンの學校に入り法律を修むること二年、二十歳學を廢して本國に歸り作劇家となりぬ。其の初作 "Love in Several Masks" は一千七百二十八年に成れり。爾後五年間に彼れが作せし脚本都合十七篇、其中 "Tom Thum" と題せる滑稽劇尤も世にもてはやされたり。されど文學上の價值よりいへば、此等は皆失敗の作と稱すべし、フィールディングは小説家の鼻祖としてこそ頗る稱すべきの價あれど作劇家としては重きを置くに足らず。彼れは其のころ某資産家の女を娶りて家計やゆたかなるを得たりしも性來の

放蕩と奢侈との爲に幾ばくもなく此の新家産をも蕩盡し進退谷まるに及び千七百三十七年(處世の方針を一變し法學中院に入りて學び同四十年六月狀師たることを公認せられき。されども其の微薄なる所得は家政を維持するに足らざりしかば彼れは尙書シクリの如く屢新脚本に筆を染め若しくは政治上の小論文を草し之れを賣りても糊口の資とせり。彼れが政治上に執れりし主義は民權自由の説なり。一千七百四十二年リチャードソンに對抗して始めて小説に筆をつけき。"History of Joseph Andrews" 『ヂセフ、アンドロリス物語』是れなり。蓋しフィールディングの性質として彼の徹頭徹尾訓誨的にして沈鬱無氣力なるリチャードソンの作を喜ぶ能はざりしは自然なれば、先づ好評噴々たる『バメラ』を取りて翻弄せんと欲しこゝにバメラの兄ヂセフ、アンドロリスといへるものを作り設けバメラが處女の潔白を守りて若主人の戀に應ぜざりし如くアンドロリス將た青年男子の貞潔を守りて一向に一寡婦の愛着を排斥するくだりを以て筆を起し、それより筋を轉じ脚色を設けてバメラの作意を諷刺するうちそゝろに詩興を催し來り遂に純然たる一部の滑稽小説を綴り終るに至りたりき。『ヂセフ、アンドロリス物語』はかゝる手續

にて成りしなり。

四八〇

アンドリュース既にその女主人の家を去る。やがて人の爲にせられ大道に打ち仆され衣を剥がれて溝渠の中に投ぜらる。一輛の馬車通りかゝりてアンドリュースを助け入れんさす。車中の一婦人裸体の男と同車するを拒む。車中の客いづれも外装を有し車掌はた餘分に二枚も有せしかゞアンドリュースに被せて血に汚されんことを成れて竟に貸さす云々。アンドリュースの親友にパリスン、アダムスといふ學者あり二人相携へて街衢を行吟す。市人の亂打にあふと數十回。或は頭より豚の血を滴がれ或は犬に衣を噛み取られ或は馬を踏まれ或は獄舎に投ぜられんさす。あらゆる輕侮を蒙るに至りたれど二人は毫も意に介せず云々。

著者はこの書の表紙に「サーヴンテスに模すと記し又緒言中に「散文の滑稽叙事詩なり」と言へり。もとより偶然に成りたるにひとしき作なればその体裁の不整頓なるを推して知るべく著者自らもまた「バメテ」の諷刺にとて作れるなれば已むを得ざる由を屢ことわれり。されど篇中の人物パリスン、アダムス及びアーヂー女の如きいづれも其の得意の人物なれば談話百出して言動活けるが如く優かに滑稽小説の一傑作たるに恥ぢず。

翌年『雜集』三冊を出せり。「A Journey from This World to the Next」(『この世よりあの世

への旅』及び「Mr. Jonathan Wild The Great」(『大盜ヂナサン、ワイルドの傳』)の二著はこの中に含まれたり。後者は當時の記傳家が人物の傳をもものするに當り偉大といふ點にのみ眼を注ぎてその善徳といふ一面をは遺却しひたすらに浮華溢美の辭を弄するを諷刺し偉大なる悪人ヂナサン、ワイルドの逸事をわざと放大浮靡なる時様文を以て綴りたるものなり。篇中また叙事の妙文に乏しからず作者の聞見知識の廣濶なることを窺ふを得べし。この書實は「ヂセファ、アンドリュース」の前に脱稿せしものなりといふ。ワイルディングが後年近世社會小説の開山となりし素質は既にこの時に於て見るを得べし。

それより數年の間ワイルディングの消息は杳として知られざりしが恐らくは債鬼に攻圍せられたる窮生活中にありしならん。その間に或政治雜誌に關係しその縁にて初めて貴族リッタートンと相知りその周旋にてウエストミンスターの警視總長となるを得き。リッタートンは更にまたワイルディングを眷顧扶助して遂に其の一代の傑作「The History of Tom Jones's Foundling」(『孤兒トムヂョーンズの傳』)をものせしめき。この書小説として少くとも空前の名作なりしと衆批評家のいへるが如し。

ことにその文章はフィイルヂングがあらゆる困苦を凌ぎて推敵し出だしたるもの山にてとりわけ各篇の序詞の如きはサッカレー及びヂョールヂェリョットさへもこれを模倣せし程の名文を成せり。オールドフォシーといふ獨身の紳士ロンドンより家に歸りて不思議にも己れが臥床の上に可憐の孩兒を發見すといふに筋を起しこの孩兒トム、ヂョーンズを主人公としてもせる長篇なり。篇中の人物中長老紳士オールドフォシー、紳士ウエスターン、可憐嬢ソフィヤ、卑むべきアライフルをかしきバートリッチ及び作者の分身とも見るべき主人公トム、ヂョーンズの如きはこの書を一讀したる者の忘るゝ能はざる性格なり。但し全篇に通じて無用の挿話の頗る多きと結末の忙匆にして不自然の總收をなせしと等はその大缺點なるべし。さて二年を経て“Amelia”といふ最後の小説出でたり女主人公アメリヤは作者が最愛の亡妻を標本として成れること疑ふべからず。この著前作に比して大いに活氣を減じたれど人世の觀察頗る沈着となりたる處あるよりサッカレーの如きは『トム、ヂョーンズ』及び『ヂェセフ、アントロリョー』の主意をば服ひながら全く『アメリヤ』に同意を表しき。晩年善く職に努めロンドン府内の鼠賊を撻擻して名ありき。然

れども壯時の盛逸は其老時に報い身心漸く衰弱せしかば一時英國を離れて葡萄牙のリスボンに遊び治療に手を盡し、かどつひに其の効なく一千七百五十四年バイロンが激賞して“The prose Homer of human nature”（人性を描ける大叙事詩家）といへるヘンリ、フィイルヂングは齡未だ知命ならずしてみまかりき。其の翌年絶筆『航海日誌』出版せらる。

フィイルヂングの作は決して清麗とは稱すべからざるも常に強健にして辭々風發の概あり人間の全豹に通ずることリチャードソンに數倍し滑稽洒落の言辭も推敲鋭鍊を重ねることには『バメラ』の作者又はスモーレットの比にあらず訓誡小説と銘打たずして訓誨の趣の高く廣き當代に冠たりき英國社會小説の開山としてその名近世に高きこと所以ありといふべし。

第十章 スモーレット及びスターン

スモーレット——生涯及び著作——特質——スモーレットの社會觀——スターン——生涯——為人——著作の特質——文牒

リチャードソンの如き嚴格なる道念なく、フィイルヂングの如き縱横なる詩才なきも

暢達の筆に世相を眞寫し以て一代に名を博し面白き物語の作者として今尚ほ普通の讀書社會に歓迎せらるゝはトピアス、Tobias、ヂョーレン、George、スモートランド Smollet. なり。彼れは一千七百二十一年(我朝享保六年)建部涼岱三歳(スコットランド)の一名家に生まれ祖父の手に育せられて人と成り十二分の教育を享けたり。然るに二十歳の時祖父を失ひ忽ち生計に困窮せしかば則ちちまづ詩文を以て身を立てんと欲し、かねて起稿せりし處女作「The Regicide」(弑逆)と題せる一悲劇を懐にしてロンドン市に上りぬ。かくて此の作を名優ガリックに示し直ちに之によりて梨園文壇に位置を得んの心なりしが採用せられざりしかば失望しはじめ醫學を修めたりしを傳手に一軍艦附きの外科醫の助手となり爾來志ばく海外に航遊し一時は西印度に寄留せしともあり。ヂヤマイカの島にありしや多少資産ある一女子を娶り更に幾多の變轉を経て一千七百四十四年再びロンドンの都に歸り醫術と文學とによりて譽を立てんと力めき。一千七百四十八年初めて小説の作あり上下二卷、是れ其の傑作にして「The Adventures of Roderik Random」(ロンドンクランドム一代記)と題せる者なり。スモートランドが特殊なる筆致及び其の長

短所は尤もよく此の作にあらわれたり。此の作は當時流行の自叙傳小説にして主人公は蘇國人なり、其の一代の閱歷、境遇、行爲性質までも著く作家自身のに似たり蓋し全軀の結構は佛の名家ルサーヤ(Gil Blas)の著者を學び事件及び人物は重に自家の閱歷を基とせしなり。されば主人公ランドムが三度海外に漂遊せし狀を寫し殊に粗朴なる水夫の生活を叙せるあたりは宛然活畫に臨むの感あり。この作いたく時尚にかなひて文名立どころに揚りしがスモートランドはもと創才にあらず又結構の妙才をも有せず、いはゞ豊饒なる見聞を達者に報告する底の文才たるに止まれり。彼れは韻語をも能くし脚本を作り又屢政論乃至諷刺文を物したり。彼れが多々益辯ずる力量は異とすべきも、その千言萬言は一として讀者を驅りて詩的別境に入らしむるあたはず。たゞ俗眼俗耳を悦ばしむるに過ぎず。彼れは人性を觀察するの力より觀るも脚色を布設するの伎倆より見るもまた美術的品位より見るも到底リチャードソン若しくはフィールディングに及ばず。その作意筆跡を概見するに狡獪は之れ有るも巧妙はいまだし、諛諂は之れ有るも諷刺はいまだしと評せざるを得ず。其の作中に見いださるゝ奇事異聞は卑猥ならざれば

慘刻、慘刻ならざれば奇異なり、讀者にして高からば屢、眉を蹙めざるを得ざるべし。さはれ彼れもまた一個のユーモリストなり時に人情の琴線に觸れて眞に他を悲喜せしむるの伎倆なきにしもあらず。たゞその多數の作中にさる妙處の寥々たるを憾むべしとす。思ふにこれまた時風の然らしめし所なるべければひとり作家のみを咎むるは酷なるべし。

一千七百五十一年『The Adventures of Peregrine Pickle』四卷を作す嘲諷餘りに露骨にして淺俗の失溢れたれど流石に簡捷にして諷諧の妙なきにしもあらず。翌々年『The Adventures of Ferdinand, Count Fathom』を著す、作者は傳奇小説たるべき心算にて物せし由なれど、その主人公が斗屑の小人たりし爲め傳奇風の跌宕飄逸の氣品なく頗る不評の作なりき。是に於いてスモレットは早くもその方面を轉じて『ドン・キホーテ』を翻譯し又『Critical Review』、『評論』といふ定期刊行物を發しき。該誌而大半は彼れ一人の筆に成りきざりし。既にして彼れは舊怨ある某將軍を捉へ匿名にて譏誣の筆を揮ひたりしが遂に發覺して罪を得まばらく獄に繋がれき。獄中にてサーヴァンテスを模したる小説『The Adventures of Sir Lancelot Greaves』を物せしが、

とり出でし評するに足る作にあらず。

出獄の後ち國史の編修に従事し一千七百五十八年『Complete History of England』、『英國全史』を脱稿して出版すこの書シーザーの攻略に筆を起し一千七百四十八年を以て畢れり。彼れは生來史家の資にあらざるが故にこの編の如きも雜然不確定なる事跡を臚列したるに過ぎざりしかど近世の事を敘するに至りては頓かに筆意を改めて活寫法を用ひしかば頗る清新の妙あり、爲めに彼れをして當時第一流の史家たりといふ世評を博せしめき。然るにその頃より健康漸く衰へければ醫師と友人とを携へて大陸に歴遊すると二年旅中『Travels in France and Italy』をものしき。この紀行文彼れが晩年の名聲を添ふるに力ある作なり。かくて以太利のレグホーンに滞在中彼れは最後の餘勢を集めて『Expedition of Humphrey Clinker』、『卷をものしき』。この書實に一世の傑作なりしなり。版成りて數週の後ち瀆焉としてみまかりき。時に一千七百七十一年。

『ハムレー、クリンカー』は全篇書簡往復牒を以て成る。主人公マッシュ、ブンプルその健康を恢復せんが爲めにバスに行きロンドンに行き蘇格土の高地に行き又ク

ロースターに行きし結構などよく作者の現境に似たり。この一行の出来事は本篇の骨子となりしものなるがハムフレイはフランソワに陪従せる一人に過ぎざるが故にこの作正しくは『マッシュュー、フランソワの漫遊』と名づくべし。概して例の滑稽の調を帯び軽快もまた他に比較なけれどその諸人物いづれも歴たる性格を備へその筆勢また人類全軀に同感せる跡あるは注意すべし。この傾向を以てスモーレットにいま數年の修練を試みしめばその進歩或は見るべきものありしならん。

ゴッス曰はく「最も高き見地に立ちてスモーレットの小説を見ればその不具拙劣の點隠として先づ目に入ると共にその明かに一家の軀を具へて近世の大家に少からぬ影響を與へたる跡あるは蔽ふべからず。フィールディングなくしてサッカレよくサッカレたるを得ずとすればスモーレットなくしてはチックネスもよくチックネスたるを得ざるべきなり」と。それ或は然らん。

スモーレットの小説は總評すれば武人的ともいふべし彼れが描ける社會は之れを十八世紀の社會として見るも尙あまりに亂暴猥褻に過ぎたり。彼れが描く所の

社會を實際の社會なりとすればいとも／＼怖るべき社會なり。小女若し誤りて一たび此の社會にさまよひ出づる時は或は忽ちに成女となるべき虞れあり男子一たびこゝに出づれば或は復た歸ることを得ざるべき恐れあり鼻をそがれ指を失ふが如き事は室内街頭に於ける尋常普通の爭論の結果なりしが如し。要するに殴打殺傷は當社會に於ける不斷の出来事にして鮮血淋漓の慘狀は常に目に觸るゝ現象なりしが如し。女性も怒れば男子の面上に鋭き爪の痕を印しベレクリンピクルの如き上流の紳士も時々嚇怒して會釋もなく他の紳士を痛打す。買色などは殆ど公然に行はれ更に厭ふべき非倫の姦淫すらも行はれたりしものゝ如し。總じてスモーレットの畫ける人物は主人公の位置に立てる者すら私慾甚しくして残忍なり其の酒に耽り情に溺るゝ點はフィールドングのに大差なしと雖も後者のゝ如く洒落ならず快活ならず將た善良ならず。スモーレットの主人公は粗野にして狂暴なり其の情甚しく熱したる場合には甚しき破廉耻をも取て行ふ到底今日の讀者の深く同感する能はざる所なり。况んや主人公以下の男女に至りては宛然たる娼婦マドロスに似たるもの多し。

若し實にかゝる亂倫狼藉なる世間事相を英國十八世紀の世相なりとし之れを活寫せるを當代の社會小説なりとし之れを喜び讀めりし者を當時の公衆なりと思惟せば吾人は其の何故に一大革命の機運の急ぎ迫らざりしかを異しまざるを得ざるべし然れども由來寫實的小説は、就中諷刺の旨を含める者は世間相の美なる側面には簡疎にしてをさく醜惡なる側面を誇張する者なり彼のメモレット等の作に現れたる卑陋と狼藉と殘忍とは明かに英國十八世紀の醜惡なる一面を誇張せるものにしてテーンの所謂其の高雅なる部分は之れが爲に寫し洩らされたる趣あり隨うてスヰフト、メモレット、フィールディング等の作を若しさながらに實相なりきと信せば甚しく觀察を誤ることあるべし。よし假に一步を譲りて英國十八世紀の世態は眞にかくの如くなりきとするも尙あるづから一種の防腐劑ありて一方には能く社會の壞亂を防ぎ他方には能く作家の大墮落を防ぎたり。防腐劑とは他無し英國人の天性と當時漸く弘通せんとせりし人性研究の氣脈なり。彼等のやゝ聰明なる者は單に社會の外面を觀察し實寫するのみをもて満足するものにあらず更に進みて其の由りて來たる原因即ち人心内の機微をも探らんと

するなり是れ彼等をして墮落の中道にして自省自誠せしむる緣たり。例へばメモレットの放縱と粗野とを以てして尙彼の『ハムフレークリントンカー』の著ありこは小説に似て小説にあらず種々の人物の通信に擬して英蘇各地方に於ける人情風俗の精緻なる觀察を録せるものなりすなはち種々の人物をして交、其の特殊なる觀察の結果を語らしめ、よりて以て其の特殊なる性格を表現し來たる名けて一種の氣質物とも稱しつべし。此の人性研究の氣脈は早く已にチーサーの作にも見えてエリザベス時代の諸劇にも見えてベンチョスソンの作にも見ゆ、之れを名けて内人の研究といふ而して個人の場合に在りては自省と名づく。個人にして自省の念あらば其の徳性の墮落を救ふに足るべく社會に心性研究の風盛えて所謂主觀的觀察流行せばまた以て其の大墮落を防ぐに足るべし。而して英の十八世紀に最も著く此の氣脈を代表せりしものをローレンス、スターンとす。

ローレンス、スターン Laurence Sterne は一千七百十三年に生まれ同六十八年にみまかりき我朝平賀鳩溪と約同時代。その性質はその作物の奇なるが如くに奇なり、眞個崎人傳中の人物と評すべし。愛蘭土の産家甚だ貧しく父は下士たりし爲め

部屬の變動によりて諸處に流寓し以て幼時を送りき。父歿して後ち母かたの親戚に扶持せられてクムブリヂの大學校に入り三年にして業を了り出で、僧となりて教會に就職しき。蓋し彼れにとりて最も不得意不適任の職なりしに奇なる哉彼れは一千七百三十六年より同五十九年まで二十三年間、無言の田舎牧師を以て満足し毫も他事を顧みざりき。一千七百四十一年資産ある妻を娶り一時に窮困を免れければそれより後ち繪畫と提琴と銃獵とを以て一日の事となして復た業を修めず、或は同僚の僧と争ひ或はその妻を虐遇する等放埒不羈に至る所なかりき。かくて千七百五十九年歳五十六にして始めて文筆に従事し翌年一月“*The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gent.*”二巻を出版しき。これ後年彼れをして一世の名を成さしめたる長篇小説の發端にして兼ねて彼れが眞生涯の端緒なり。その第一巻は脚色文章ともに一奇なけれど第二巻よりは漸く蔗境に入り文章また瑰麗、時人悉く吐量しき。於是ストルンは機を外さず先づ“*Sermons of Mr. Yorick.*”といふ説教集を出しおき翌年更らに“*Tristram Shandy*”の第三巻及び第四巻を出版しき。文致奇異斬新にして觀察の精刻なる處いよ／＼讀書社會の注目を

牽けり。然るにこの頃よりストルン漸く健康を損じければ暫く執筆を廢してひたすら酒食を慎みしかど、快活なること猿の如き質としていかでかこれを持久し得ん、忽ちにして又放縱の振舞をなし且つ前作の五巻及び六巻をものして大いに病勢を進めしにより竟に伊太利に轉地するの已むを得ざるに至りぬ。かくて三年を経てその第七巻及び第八巻を齎らして本國に歸りき。これ本篇中の壓巻なり。さて翌年は『説教集』の續篇を出し翌々年は『トリストラム・シャンデー』の第九巻即ち終巻と“*A Sentimental Journey through France and Italy by Mr. Yorick.*”を出版しき。後者の体裁前者の全部に比して甚だ整備せるは異むべし。是れより先、彼れ再び伊太利及び佛蘭西に赴き、歸る程なく倫敦の寓居に於て知己縁者もなき中に病遽かにあらたまりて竟にみまかりき。

彼れが作は全體に通じ亂雜不秩序にして矛盾の個處甚だ多く粗厲若しくは刻薄にして温藉の致なし。然れども彼れが得意なる諷諧の譬句を用ふるに至りては髣髴シェイクスピアの面影を回起するもの少なからず。一言すれば彼れが作は常に彼れその人の如くに常經を脱して容易に端睨すべからざるの概あり。

テーン彼れを評して曰はく

「スターンは眞に奇才といふべし。彼れは ブライチス・インサイト 明き混合なり。恰も網膜病の患者の如し、神經の刺激甚だ激烈にして而も劇變測るべからず、忽ちにして運鈍驟驚、忽ちにして穿鏡透徹、時としては通常人の見る所を見得ざるこゝろあり、時としては精銳なる眼力の尙ほ及ばざる所を觀破することあり。彼れは實に病的偏心偏長の質なり。併にして兼ねて蕩兒、提琴、彈きにして兼ねて哲學者、母の餓死するを忍びながら死にたる トリス 驢を見ては酸鼻せし奇癖家。(中略)彼れは幽嚴莊重なるものをいやくしかて、僞善矯飾なりとし、痴呆の情態をもて可憐なりませり。彼れの作中の僧にして奇人たる Monk は明かに作家の半身なり。

と。以てスターンの爲人を知るべし。ヨリックは『トリストラム、シャンデー』の假設の話説者、又彼の『センチメンタル、ヂャーチー』の話説者なり。すなはち作者スターンが假に此の名を被りて例の自叙傳の筆法にてシャンデー一家を中心として生活の内秘を叙寫せるもの之れを『トリストラム、シャンデー』とす。篇中の主なる人物は終始影の如くに隱匿たる主人公のトリストラムにはあらで、其の父タルター、シャンデーといふ商人の隱居、其の妻エリザベス及び其の叔父トビー、シャンデー并びに其の僕コオプラルトリムなり。通篇ことさらに次第を錯亂しげに畸人の物語るはか

くもあらんと思はるゝやうに奇談百出、縦横滅裂、警句沸くが如し。要するに彼れが作の第一の特質は人物の性癖を描畫する筆の平叙的にあらずして暗示的なる所、即ち讀者をして言外の隱微を冥悟せしむるやうに物する點にあり、之れを劇詩的筆法といふ。而して第二の特質は觀察の穿細なること、第三のは通篇何等の脚色も無きこと也。

「スターン又評して曰はく、健全なる思想の前進するや、個々の想念打ち揃ひて次第を紊さず整々として進行す。病的思想の進行に至りては個々の想念相排擠し顛動亂争してめいゝに競進す。(中略)スターンが調子は二分間とも同様なる能はず、忽ちにして笑ひ、忽ちにして激し、忽ちにして怒罵し、忽ちにして驚愕す、慘として惻むと見れば、哄として大笑す。亂脈又亂脈、事物を顛倒し、條理を滅裂して顧みず、而もその自在に讀者を玩弄する趣は、猶操り師の偶人を弄するがごとし。彼れが尤も好みて率く操り、絲二條あり一條は女性的愛憐といふ線にして、今一條は譏刺諷嘲の線なり。彼れは小き蠅蟲の爲に流涕し、死にたる鱻の爲に嗚咽し、若しくは籠鳥に同感して泣く、而も能く讀者をも泣かしむる力ありと。ストルンが譏刺滑稽

に巧なると同時に讀者を泣かしむる悲哀の筆力あるとテインの言の如し而も其の實は甚しき主我者にして忘我の清徳ありし者にあらず眞慈仁の人にあらず。所詮ストルンは有數の奇才なり。

終りに彼れが文章につきて見ん。彼れは古人の何人の體にも據る所なかりしかど自己の一風を開くに至りし經營は大方ならずことにその晩年の作を見るに辭銑鍊を重ね、句々推敲を經、遊伎と節調とを兼ね具へて而も斧鑿の痕を止めざるに至つて止みき。當時の作家は大概特殊なる文體を用ひしかどスターンの如くに全然創發せるものは稀れなり。彼れは常に佛蘭西の諸家の文をば綿密に復讀しきといへば、その工夫或はこゝより來りしにもならんか、兎も角も後のチックンズ等に資する所ありし功績は認めざるべからず。

第十一章 其の他の小説家

小説發達の第一期——賭家の特質——其他の作家——フィールディング
カ嬢——博士ダモンソン——ゴールドスマス——パリーチー嬢——其
他

英國小説發達史の第一期は一千七百四十年の「パメラ」に始まりて同七十一年の「ムフレ、クリンカー」に終りき。その間三十一年名家の數僅かに四人に止まりしも尙寫實の一面を開いて近代小説の導火となりしは多とせざるべからず。件の四家は精査すればその特質おのゝ異なりと雖もその間また相通同せる性質なきにあらず。彼等の主題のいづれも人の性情なりしは其の一にして其の作するに至りし動機の訓誨教導にありしは其の二なり。リチャードソンが勸懲、フィールディングが諷刺、モートレッドの憤怒、ストルンが諷諧皆其の實證たり。當時この四家を中心として世に出でたる諸作家はいづれもまた期せずして同様の目的と方法とを取りき。其の中伎倆と作意とに於てやゝ見るべき者は左の如し。

Sarah Fielding (一七一〇——一七六八) サラ、フィールディングはヘンリ、フィールディングの妹なり。一千七百四十四年「David Simple」(小説)二卷を作しき。この書は結構はリチャードソンとフィールディングとの中間にあり、即ち前者の如く柔弱ならず後者の如く粗暴ならず友誼の情の切なるを寫して要を得たれど筆力の兩家に及ばざるは勿論なり。かくて阿兄の文名の高くなりしまゝ再びとは筆を染めざりき。

リチャードソンの筆法を進めて一段哲學的たらしめしものを博士サミュエル、ジョンソンの『ラセラス物語』(“Rasselas, Prince of Abyssinia”)となす。是れ作家が窮困のうち母を喪ひ其の葬式の費用に充てんとて筆を執ること僅かに八夜にして成りきと傳ふる作なり人生の希望空想に關する精刻なる評論は一篇の大旨なり。純然たる寓意小説なり。

ジョンソンと同傾向ながらも流石にジョンソンの如く理窟に趨らずして先進諸家の裏を併せたる作は詩人オリヴァー、ゴールドスミスの小説なり。ゴールドスミスの生涯と事業とは別に韻語の詩人として下にトムソン、グレイ等と共に語るべければ今、只其の小説の上のみにつきていはんに彼れが小説家としての名譽はひとへに其の唯一の傑作“*The Vicar of Wakefield*”のみによりて繋がれたり。此の作は其の脚色の上よりいへば取りわけて其の下半の結構に頗る不自然なる箇處ありて批難をまぬかるゝ能はざれども其の感想の清高、其の田家生活の目に見る如き叙寫の筆主人公ドクトル、ブルムローズといふ牧師の性質及び其の他數多き人物をして髣髴活現せしめたる靈妙なる想像は蓋し及び易からざるものあり。ゴール

ドスミスが此の作を公にせしは一千七百六十六年(三十八歳の時)なり即ち詩人としての名譽の已に世に高かりし時なりしが出版の當時には世間はいまだ此の作の妙を認めざりしものゝ如し。近時の考査によれば此の小説をして大名を博するに至らしめしには獨の大詩人ギョオテの評與りて大に力ありといふ。ギョオテはいたく此の作を稱美し、面白く巧みに物せられたるのみにあらずこは實に不滅の物語なりといへり、其の不易の價值あるを稱へたるなり。げにこの作の長所はその思想の僻せざる所にあり。ゴールドスミスはジョンソンと同様の悲風慘雨を経來りしかどその結果彼れに於ては剛愎の人を作り此れに於ては溫柔の人を作りジョンソンの如く失敗を経るごとに我慢を養ふには至らずして寧ろ柔順の性を練らしめしが如し。元より是れもゴールドスミスのまゝにては何程の内容もなきことなれど十九世紀に降りてその旨の擴充せらるゝに至りては大いに意義あるものとなりぬ。ゲーテ率先して曰く「これ人生のあらゆる迷路より吾人を救ひ出すものなり」と。

ゴールドスミスはもと詩人なるがゆゑにその作中詩旨の飄渺たる叙事少なから

ザ『ウエークフィールド』は散文詩としても一讀の價值あること人の知る所なり。ゴールドスミスの外に敗風の反動作家として注意すべきはMiss Frances Burneyなり。ペーチー女史は一千七百五十二年に生まれて一千八百四十年に逝りし^{オウ}半は十九世紀にまたがれる女作家なり。後にMadame D'Arblayと呼ばれて文名一世に震ひたり。當時女作家いと多かりきと雖もサラ、フィールディングとチェーン、オウスチンとの間に立ちて男性作家と相伍して作家中に錚々たりし者は此の“Evelina”の作者なり。女史は有名なる音樂史家ドントル、ペーチーの女なりき其の著す所の小説は“Evelina”の外に“Cecilia, or the Memoirs of an Heiress” “A Picture of Youth”等あれど今尙讀まるゝけ前にいへる“Evelina, or a Young Lady's Entrance into the World”と題したる小説のみ。此の『エヴライナ』は女史が廿六歳の時世にいでしが作せしは十何歳(或はいふ十五歳と)の時なりき。はじめて世の中に立ち出でゝ種々の甘酸を閱歴せる年少女子の自叙説に取り做せる此の作をはじめは名をかくして出版し父母にだに知らせざりしかばLittle Fannyの作たることは暫らくは何人にも知られざりしが後に其の名喧傳せんとするに先だち博士サミュエルジョンソン之れ

さてオウスチン女史の作を十九世紀の文壇に屬せしむれば十八世紀の小説作家中他に取りいせゝべきは“Chrysal, or the Adventures of a Guinea”と題せるスモレット風の卑陋なる戯作に一時の虚名を博したりしチャールズ、ジョンストン(?)——一八〇〇) “Castle of Otranto”といへる傳奇風ロマンティックの小説を作りて傳奇派の中興とも見做さるゝHorace Walpole ストルンを學びて種々の沈鬱なる小説を作し“The Man of Feeling”に今尙文名を傳へたるHenry Mackenzieなど數名に過ぎず要するに皆第三流以下の作家、十八世紀に於ける小説文學はスモレット、ストルンに至りて一頓挫し其の後數十年間は著き進歩無かりきと評すべし。彼のチェーン、オウスチンとナルタル、スコットとが如何に此の沈滞を蹶轉して一の新しき清流を開きしかは近世文學史のはじめに説かん。

第十一章 サミュエル、ジョンソン

散文壇の名家——ジョンソンの生涯——著作——『英國大辭典』——『ラセラス物語』——『詩人傳』——ジョンソンの特質

詩歌の最悪時代と貶稱せられたる十八世紀は已に小説壇に夥多の名家をいだし

たる如く他の散文學壇に於ても頗る夥しき名家をいませり。まづ神學及び哲學壇においては僧正デセフ、パトラ、蘇格土の哲學者フランシス、ハッチソン、ケムブリッヂ大學の博學なる圖書係コンヤース、ミツドルトン、蘇國の貴族クームズ、美辭學者ヒュー、ブレヤ、純形而上論者デナサン、エドワーツ及びジョー、ルヂ、パークリ、若しくはシヤフツベリーの第三伯アントニー、アツシユレイ、クーバーなど、又歴史文學の壇上には有名なるダボツツド、ヒューム、ロバートソン、ギツボン等又政治論壇の文士としてはピット、フオックス、パーク、シエリダン、フラレンス等其の他經濟學者アダム、スミス法律學者ブラックストーンなど殆ど枚擧するに遑あらず。而して此等諸方面に終始幾分かの關係を有して教師となり雜誌氏となり詩人となり小説家となり劇詩家となり傳紀家となり或はシエイクスピヤの全集に評註し或は英國大辭彙を編集し修辭家としても知られ哲學者とも見做され隱然當時の文壇に君臨し其の博覽と傲岸と謹嚴と多能との故によりて普く雅俗の尊敬を博し英國十八世紀文學の一大代表者と見做さるゝものは有名なる博士サミュエル、デモンソンなりとす。さもあれ彼れがかくの如く推重せられ今日に至るまでも英文學史上に其の盛名を留

め得たる由縁は必ずしも其の文學上に於ける功績の力にはあらず否彼れが著述其の物のみに就きて彼れを評すれば彼れはスイフト、ボープ、パークリ、パルク、フィールヂング等の下に位す。然るに彼のスフストと併べ稱せられて英國十八世紀文壇の最大文豪の如く重んぜらるゝは其の理由二あり、一は其の個人としての行實及び其の儕輩に於ける勢力、二は古今有數の好傳奇家ボスエルを其の景仰家中に得て其が一生の閱歷及び行爲性癖の末までも之れを後世に傳ふることを得たるが故なり。

一千七百〇九年七月十八日(我朝寛永六年、新井白石五十三歳)リッチフィールドの書肆マイケール、デモンソンと其の妻との間に一男兒生まれき之れをサミュエルと名づけたり。生まれ落つると間もなく俗に「王病」と稱せし瘰癧やらの病にかゝりしかば三歳の頃母に伴はれてロンドンに赴き女皇アーンに謁し其の「親治」を受けしことありといふ。はじめリッチフィールドの高等小學やらの校舎に學び一千七百二十八年オックスフォード大學に入るされどペンプローク校に在りしこと僅に十四月ばかりにして一旦退校し同三十一年また入學せしものゝ如し。同年父みまかり家計

艱難を極めたり。爾後五年間の事蹟詳かならねど、ヘイウッドにて暫時學校教師たりしは此の間なり。又『アヒシニヤへの航海』と題せる抄譯物を某書肆の爲に物せしむる此の間なり。それより二十年間はジョンソンが生活的鬭争の時代にして衣食の爲に俗書肆に役使せられ鬱憤を忍び不平を呑み病を力めて筆を執り而も屢、衣食に缺乏したりし時代なり。彼れは倨傲にして怒り易く加ふるに怖ろしき顔色して學童等を叱咤する癖ありしかば教師としては悉く失敗し著述家としても兎角に讀者受け妙ならざりき。其のころ自家よりも廿一歳ほど年長なりし寡婦と婚して其の財産もて一時其の私塾を維持せしかどこれすら水泡に歸するに及びて一千七百三十七年僅に二ペンス半を懐にして其の弟子ガリック(後に英の拍籬とも稱すべき名優となりしがリック)と共にロンドンに立ちいで種々困苦の後『紳士雜誌』(The Gentleman's Magazine)の發行者エドワード・ケーザといふ者の雇となり(一七三八)やがて『ロンドン』と題したる一篇の諷刺詩を公にせり、こは羅馬の名家チエナルの作を摸倣せるものにて之れに對する報酬は十ギニーなりきといふ。是れジョンソンの文名の世に知られしはじめにて未だ所謂 *Grub Street* 的生涯を脱却せ

ざりし頃の事なり。かくて同三十九年より同四十四年までは同じく主と嘲世諷俗の筆を揮ひし時代にて彼の "Debates in Magna Lilliputia" と題して國會の傍聽筆記を四年間『紳士雜誌』に物せしも此の折なり。其のころ詩人サエーと交はり其の死を悼みて(一七四三) "The Account of the Life of Mr. Richard Savage" を世にいだせり時に一千七百四十四年なりき。この著ジョンソンのものせる傳記中最も長篇にして且つ最も成功せるものなり。篇中逸事小話を挿むこと甚だ多く辭々生動の妙あり。由來好傳記書に乏しかりし當時の讀者大いに歡迎せしは論を俟たず今に至るまでも廣く讀書社會の珍重する所となれり。さて同四十五年にシェイクスピアが『マクベス』を評論せる一小冊子をいだし同四十七年には未曾有の英國大辭典編纂の案を起しチェスターフィールド卿にたよりて此の大業を成さんと欲して其の志を得ず空しく八年を経過しき。之れより先き一千七百四十八年ハムプテッドに暫時の閑日月を楽しみ其の間に其の傑作の韻語 "The Vanity of Human Vices" を作し翌年に至りて出版しき。是れはたチエナルの諷刺詩第十を模したるものなれど其の前作『ロンドン』に比すれば優ること幾等過ぐとも著者が博學と卓

諷とを證し得て餘ある作たり。然れども單純なる諷刺と淺露なる詩句にのみ耳慣れたる當時の俗衆はこの詩に對して「恰も希臘語を讀むが如き困難を感じき」といへば爲めに作者の名を成す能はざりしは論なし。此の時に當たり其の舊弟子ダギッド・ガリッシュ名聲已に隆々、今や有名なる Drury Lane Theatre (ドリナー、レーン座)の座主となれり彼れ其の舊師の未だ其の志を成さず不遇の境にあるを痛み懇にヂンソンを勸諭して其の舊作脚本に若干の筆を加へしめ竟に之れを劇壇に上せたり(一七四九二月『マホメットとアイレンス』と題したるもの是れなり。ヂンソン此の作によりて殆ど三百ポンド潤筆料を得たりきといふ。後に此の劇を修正して世にいだし改めて『アイレン』と名けたるが、こは脚色も單純、人物の性格もあぼろげなる劣作なり。

今やヂンソンの名聲漸く世に知らるゝに至り彼れはアヂソン、スチール以後暫く中絶の姿となれりし定期刊行の社會的論文を發行せんの企圖あり、すなはち一千七百五十年三月はじめて『Rambler』、『逍遙者』といふ雜誌やうの定期物を發兌せり此は同五十二年の三月まで續きたり其の間號數五を除くの外は悉くヂンソンの

單獨の筆に成れりき。はじめは主筆の名を匿したりしが其の文致の殊別なるが爲に幾ばくもなく世に知られき按ふはヂンソンが文は總じて華に失し巧に流れ誇張に過ぎ莊重に過ぎたり而して其の雜誌氏としての筆は此の『逍遙者』に於ては尤も拙く重くろしく後にホークスチオスが『冒險者』(雜誌)に寄せたるものに於ては軽く巧に更に『Tidier』(雜誌)の主筆たるに及びて漸く洗鍊の域に達せり。ヂンソンの評論家として最も得意なるは人物の評論にあり。常に簡淨の筆を以て事實を狀寫しその間に精刻なる分拆を挿むが如きは氏が特得の長技にして又『アイドラー』の光彩なりき。

さる程に彼の『英國大辭典』の編纂も此の間に於て徐々其の歩武を進めつゝありしが一千七百五十五年二大卷となりて現はれたり此の辭典の卷頭に添へたる二文章は散文家としてのヂンソンの長所美所の最もよく現はれたるものなり、就中彼のチヌスターフィールドに與へし書の如きは辭簡に意切に諷刺婉曲にして深刻、後年文學俱樂部の評論に於て一世を驚かしたるヂンソンが談話の妙技は夙にこの時に現はれしものといふべし、この篇今も尙ほ刺譏文の上乗と稱せらる一千七百五

十八年四月 "Idler" と題せる『スペクター』に似たる定期刊行の文集を發見し幾ばくも無くして廢刊せしが尙ほ同種の小品をば "Universal Chronicle" としふ新聞紙に寄せ同六十年の四月まで繼續せり。ジョンソンが小品は到底アチソン、ステールの輕妙に似たるべくもあらねど其の人物評就中 Dick Minn の性格を剖析せる一文の如きは其の觀察の銳利にして人性の知識に深遠なりしを證するに足る。但し同じころの作の最なるものは彼の寓意小説『ラセラス』物語なるべし。此の作一千七百五十九年に公にせられ後僅に三週程を経て結構頗る相似たる『カンチード』物語(佛蘭士の文豪シャルテールの作)世に出でしかばジョンソン深く其の暗合を奇としかく相接近して世に出でずば二者のいづれかが他を學びたりと見做さるべきにといへりき。されど其の相似たるは皮相のみにて着想も文脈も全く相異なれる者なり。此の作の性質と眞價とは前章にいへる如くなるが兎に角に頗る世人にもてはやされ忽ちにして七八版を重ねきと。さて『英國大辭典』の成りしや英國皇室は此れを賞して年金三百ポンドを其の著者に賜與せり此れよりジョンソンが家計やゆたかになりぬ。彼れが安樂椅子に倚りて文壇の先輩をもて目せられ

其の博覽と其の傲岸と其の謹嚴なる行實とによりて昂然衆詩文人に君臨せしは此の際なり。一千七百六十三年にははじめてジェームス・ボスエルと相知り同六十四年には有名なる文學會を組織せり其の會員の主なりし者はジョンソンを首座としてレーノルズ、パーク、ゴールドスミス、ホーキンス及びカリック、フォックス、ボスエル等なり。之れをジョンソンが最得意の時代とす。かくてこの文學會に於けるジョンソンの談論は細大漏らさず新聞雜誌に傳へらるゝに至りければジョンソンは暫く評論の筆を執らず、それより一千七百六十五年まで九年間シェークスピアの註釋にのみ従事しき。かくて五年の後政事論文 "The False Alarm" を著し翌年 "Thoughts on the late Transactions respecting the Falkland Islands" を同七十四年 "The Patriot" をその翌年 "Taxation no Tyranny" を著しき。さる程にジョンソン齡六十に近く身心漸く衰老に傾きければボスエルの勧めによりて漫遊の途に上りエデンバラより蘇國の東海岸に沿うて北上し蘇國を一巡して歸り、かくて更にエールズの北部旅行の途につきつ。"Journey to the Western Islands" はその紀行也。一千七百七十五年オックスフォード大學ジョンソンに H. D. (法學博士)の學位を贈りき。

一千七百七十七年よりヂ・ンソンは古今の詩人傳とその評論とに着手し同七十九年より八十一年までに全部の出版成りき。題して「Prefaces, biographical and critical, to the most eminent of the English Poets」とし、現今「Lives of the English poets」と稱して坊間にあるものこれなりこの書の價值はその部分により甚しき差等あり。概してミルトン、グレイなどいふ大方の評論は至つて拙く、ヂ・ンソン以下の小詩人の品騭は甚だ自在なるが如し。兎も角も文章のよく成熟せることはいづこを開きても明かなり。

かくてヂ・ンソンの健康は衰へ遂に一千七百八十四年十二月あまたの知人に回繞せられてポルト、コールトなるその家にみまかりき行年七十五。

氏の文章はポーブが詩歌に於て古學的クラシックなりしが如く古學的なりき、又ポーブが一向技巧の極に入りしが如く技巧の極に入りき。氏はその沈重なる思想を表はさんとて更らに沈重なる文辭を構成しき。於是悲劇も評論も傳記も字書も皆等しく同一様の文調をなしき。ゴールドスミス嘗てヂ・ンソンに謂て曰はく「閣下は小魚の耳語を叙するも長鯨の吼ゆるが如くすと。

彼れは政事上に於ては熱誠なる王黨にして宗教上に於ては峻嚴なる新教徒なりき。於是彼れはルーソーを罵りて厄靈の王と稱し、優人がリックの華車なる衣服を見てはその背後を歩まざらんことを欲しき。謂へらく「著者の目的は教訓にあり詩作の目的は娛樂のうち教訓を遂ぐるにありと。かるが故に彼れは沙翁を論じて曰はく

『シエークスピアは詩興の爲めに道徳を犠牲にせり。彼れは教訓に注意すること娛樂に注意するが如く深からず彼れは何等の道徳上の目的もなくして筆を馳せしが如し(中略)彼れは善惡の領域を明確にすることなく、惡の覺に善に抗して成効する能はざる山を示さんとも欲せざりしものゝ如し云々。』

以て彼れが文學評論の立脚地を察すべし。

彼れは爲人剛岸、而も誠實謹嚴、思慮と注意とに深きこと却て女子の如くなりき。談話は最も得意とする所にして機智輕妙その文の沈重なるに似ず、以て内は文學會に臨み外は當時の名流と交はりき。彼れが名聲は現今日々衰へゆくかの觀あれども彼れ以後の散文家にして多少ヂ・ンソンに負ふ所のものなしといふを以て見れば其の勢力實に大なりといふべし。

第十三章 史傳の著者

史傳の著者——ヒューム——其の略傳——ロバートソン——其の略傳
——ギッボン——其の略傳——ホスエル

哲學者としてはバークリー以後に世に出でし英國否歐洲思索家の最大なる者の隨一に位し就中功利論ユティリティヤニスムの一導師として名高くなつた歴史家としては兎も角も英國史學に一紀元を劃すべき第一筆と稱せらるゝは一千七百十一年に生まれて同七十六年に世を去りしタギッド・ヒュームなり。蘇都エジンバラ府に生まれて幼きより讀書をこのみ二十三四歳のころ已に一大著に志し一千七百三十九年に『人性論』(Treatise on Human Nature)前二卷を翌年に至りて其の第三卷を世にいだせり。又同四十一年と二年との交に『論文集』二卷を公にせり。『Essays, Moral and Political』と題せる者是れなり。ヒュームは其の思索の方法に於てはあくまでも近世風なりと雖も其の政治を論ずる立脚地は悉く保守的貴族的にして常に民政主義に反對せり。其の文章は明晰透徹優かに論文家の師表たるに堪へたり。一千七百五十年には『Dialogues on Natural Religion』(自然宗教問答)を脱稿し同五十一年に『Principles of Morals』(道德原理)を同五十二年には『Political Discourses』(政治論集)を著しき。此の

ころより家計やうやく裕かに其の無神論者たるが爲の故に許多の敵ありしにも拘らず名聲はた頗る揚がりぬ。翌年其の名著『大ブリテイン史』の稿を起し一千七百五十四年其の第一卷(ヒューム一世紀及びチャールス一世紀)を世にいだしき。この書のはじめに出でしや讀書社會は甚しき詬罵と非難とを以て之れを迎へたり是れ職として著者が保守主義と無神主義とが讀書社會をして不快を感ぜしめしに因るならん。みづから當時の事を叙して曰はく予は異口同音に難せられ毀られ甚しきに至りては嫌惡せられき(中略)英蘇愛三國中苟も位階若しくは文字あるの徒にして予が著を忍容せし者殆ど一人だにあるを聞かざりきと。かくて失意消望のあまり一たびは姓名を變じ長く祖國を辭して佛國に歸化せばやとまで思ひたちしことありしが更に勇を鼓して引きつゞき殘卷を公にし竟に一千七百六十三年に及びて完結せり而して世間また漸く其の價値を認め來り史家としての彼れの名聲一時社會を震動するに至りき。

ヒュームの著は之れを今日の史學的標準より評すれば史材の選擇も精ならず考證も

粗漏膚淺なる所多く事を叙述する法もまた宜しきを失したれど史學尙甚だ幼稚にして歴史研究法の未だ具はらざりし頃の著書としては確かに特筆する價値あるものなり。按ふに此の著の第一の長所は其の玲瓏透徹なる文致なるべし彼の幽玄の哲理をなほ通俗明晰に談論するを得し彼れは此の著に於て其の得意の筆を最も圓滿に利用しはじめて歴史をして一種の玩讀すべきものたらしめき。其の文脈こそ同じからざれヒュームが史を綴る時の目的は彼のマコーレーと共に事實を傳ふるのかたはら讀者を娛樂せしめんとするにありしなり而して此の二目的のうち後者間々前者を壓倒して興味を多からしめんが爲に幾分か事實を曲寫し或は疑はしき野史巷説をも濫引して正史の尊嚴をそこなひし跡多きは憾むべし。就中ヒュームが史の大疵とすべきは其の政治上の偏見なり彼れは王權を偏重して民權自山の説を蛇蝎視し此の見解によりて史的事實を取捨推定せるが故に殆ど正史の半面を埋没するに至りしこと是れなり二つには生中に哲理性的口吻をもて是非曲直を辨折せるが爲に定見無き讀者を誤らしむる虞あり。さもあれ其の雅馴にして明瞭なる史筆は甚くとも當代以前には見ざる所英國史壇に一紀元を

開きし導火といふの稱は何人も彼れに否拒せざる所ならん。

此の大著の印刷せられつゝありし間にヒュームは更に他の緊要なる一著に筆を染めたりそは彼れが懷疑哲學の全豹を示せりともいふべき『宗教の自然史』(Natural History of Religion)なり。さて一千七百六十三年以後は佛蘭西に移り住みて三年餘はパリに駐在の英國公使が秘書官たりき彼れは本國に於てよりも該國人間に聲譽高く且頗る優待せられしなり。後また英國に歸りて一千七百六十九年までは内務副秘書官たりしが退職の後にはエヂンバラに住みて身を終ふるまで妻無く相應に裕かなる生活を送りきといふ。懷疑哲學者としては今尙大思想家の一人として推重せらるれど文學の方面よりいへば哲學的文章家としても彼れはベックリーの熱火なく歴史的作家としてもギッポンの莊嚴と瑰麗とを缺く所詮彼れの純文學上に於ける特長は其の雅馴と平明となり。

ヒュームにつぎて當代の史學壇に名高きはウィルヤム・ロバートソン(一七二一生、一七九三死)なり。彼れはヒュームを模倣せしにはあられど不思議にも其の氣脈を同らし其の短長をも同うせり。蘇のミッドロシヤンに生まれて一千七百四十三年蘇國

教會に入りはじめはエチンバラの政事界に民間の名士として知られたりしが同五十八年『蘇國史』を世にいだすに及び史家としての名突然として轟きたり。此の著の褒賞として彼れはたゞちにエチンバラ大學の總長とせられ兼ねて蘇國ヒストリカ修史官に任ぜられき。一千七百六十九年『チャールス五世朝の史』を著しついで種々の史的著述あり其のうち『エヤールス五世朝の史』は古來筆力の供し得べき尤もゆたかなる報償を得たりきと稱せらる。

ロバートソンの史も考證穿鑿の精ならざるとヒュームのにひとし故に嚴密に謂ふ正史的敘事は到底彼れが著に望むべからずと雖も其の文致の雅馴にして或は景物を狀寫し或は事件を叙説し過去の事蹟をして髮髯讀者の眸頭に現前せしむる筆力はヒュームに優るとも劣らざる妙あり『チャールス五世朝の史』が幼時のカーライルをして史を愛好する念を喚起せしめきといふも偶然ならんや。只揣摩臆測して妄に過去を論斷し去る弊はロバートソン、ヒュームと其の失を一にす。

ヒューム、ロバートソンに次ぎて其の名と其の功と共に二者に超ゆる者をエドワード、ギッボンとす(一七三七生、一七九四死)。苟も文學史を講ずる者は多少の感動無う

して此の名を口にする能はざるべし。そはひとり彼れの名の第十八世紀中に歐洲文壇の産出せし最大著の隨一に相伴へる爲のみにあらず其の著者の性行が幾多過失の之れに附隨せるにも拘らず眞に大文士たるの勇氣と熱誠とを代表して餘りあればなり。學に篤きと彼れの如く誇衒の失なきと彼れの如く修辭に忠なること彼れの如く而して終生一日の如く専ら學文の爲に身を獻じたる彼れの如きは今古東西に見ると稀なり。彼れは智識の爲に生活し且つ其の智識を百銀千練し以て不磨の鐵壁とし之れを萬古に遺さんとして生活せしなり。彼れの學を修むるや名の爲にせずして學の爲にせり故に人知らざるも意とせず名著れざるも憾まざりしなり。後進の頻々として彼れを凌駕して讀書社會に虛名を知らるゝ時彼れは致々として獨り古記録堆裡に埋頭して未來の大著述に専念し時勢の遷移にも驚かず人生の頼むべからざるをも恐れず其の業の過大至難にして成功の期し易からざるをも怕れず泰然として徐ろに大成の機を俟てりき。其の大著に心を潜めしこと前後十五年、彼れ壽ならざりきと雖も幸ひにも其の業を卒ふるを得てギッボンが『羅馬衰亡史』は永く史壇の貴寶となりぬ。若しヒューム、ロバート

ソンを以て英國史壇に新紀元を劃すべき第一筆を着けしものとせばギッボンが此の著は更に一揮筆して全歐洲の史壇に新しき紀元を劃し得たるものとも稱ふべき也。

後に語るべき詩人グレイにひとしくギッボンは許多の同胞中たゞひとりのみ幸ひにして生存せし孱弱の見なりき。ロンドンのほどりなるパトチーに生まれき。其の家は舊家にして祖父の代までは豪商として知られたりしが父の代に至りて家産蕩盡し一家俄然として零落せりされど古川に水涸れずして流石に幾分の餘裕ありしかば多病孱弱のエドワードも醫藥の効によりて辛くも生ひたち齡十五歳の時知力も學識も尙いとく淺劣なりしが幸ひにオックスフォードなるマクダレン大學に入學するを得たり。大學に於ける經歷は些も彼れを益せざりしものゝ如し。みづから曰へらく予はマクダレン大學に十有四月を費やししが是れ實に我が生涯中の最も徒爾にして何の裨益するともなかりし時期なりと。按ふに當時の大學は一種の精神的懶眠に耽るの處徒らに死學を講修して靜坐默考のうちには生氣を銷磨するの場たりしなり。十六歳の時感ずるところありて從來奉じ

たりし新教を抛ち俄に舊教の信者となりき。而して此の件に關しては其の自傳(Memories)中に詳密なる記叙を遺せり。按ふに宗教に熱心ならざるギッボンにして此の事ありしは彼れ自からも言へる如く全く佛の名家ボッスエー(及びバスカル)が精嚴なる論理に動かされて智の方面より改宗せしなるべし情と信念とは曾て其の宗旨論に伴はざりし者の如し。さる程に新教信者たりし父はかくと聞きて大に駭きギッボンに嚴命して之れを瑞西なる大ローサーンに逐ひそこの一牧師に託して更に新教に復宗せしめんと欲しき。一千七百五十四年に至りギッボン再び新教に復宗し尙ローサーンの地に止まると五年其のはじめて文學を研鑽せんの志を起こしは此の瑞西寄留の間なり。まづ希臘羅甸の名著を博涉し更に佛國近世の諸名著に及び默讀晝夜を舍てず鑑裁は尤宜しきを得たりき。さて一千七百五十八年には英國に歸りやがて募られて國民兵となりぬ。學業は之れが爲に阻礙せられしかど此の兵事的經驗によりて彼れは書籍の供する能はざる若干の新智識を得たり彼れは兵職の身に適せざるを認めながらも尙兵學に心を潜めて深く講究する所ありし結果は其の兵戰を叙狀する筆の雄勁明透なるに現れたり。

彼れ其の自傳中に叙べて曰はく「ハムブシヤ民兵の隊長も讀者或は打笑むならめど」羅馬帝國史の著者にとりて必ずしも無用ならざりきと。未だ民兵の士官たりし間に其の處女作「Essai sur l'Etude de la Littérature (佛文)を著せり、文學研究論の義なり。一千七百六十三年に至りて兵役を免ぜらるすなはち直ちに大陸に渡り佛瑞兩國を漫遊して伊太利に入るや彼れが一生の大事業の考案は忽然として其の念頭に閃きいでたり。みづから曰はく「正に是れ羅馬にての事なりき時に一千七百六十四年十月十五日予は彼の大殿堂カピトリオの廢跡の間に沈思しつゝ坐せりし時彼の跣足の貧僧フレイアス等がヂュピトル神の堂内にて夕勤の頌歌を歌ひつゝありし時なり羅馬衰亡の事蹟に關する一大著をなさんの念の初めて我が心頭に躍出せしは」と。さて其の自傳中の語によりて案ずるに彼れは英國に歸ると間もなく史材の蒐集に着手せしものゝ如し然るに此の時に至りては家計いよゝゝ不如意となり父子共に貧困に沈淪せり。かくて一千七百七十年までの事蹟は詳かならず此の際彼れは或二三の断片的史的著述を試みしが功を成さずして中絶しき。父の病死せしや地方を去りてロンドンの場末に移り獨身にて家を構へ時の文學社會を交遊

せん企圖なりしが其の性交際に適せざりしにや居ること年餘尙何等の注目をも世間より牽かざりき。一千七百七十年より同七十三年までギッポンは我々として『羅馬衰亡史』前三卷の著述に従へり而して其の信友ジョン・ベーカー、ホルロイドすら此の著の大事業たるを夢にだに想ひ得ざりきといふ。みづから曰はく「稿を起すのはじめに當たりてや百事悉く茫々たりき此の著書の標題すら帝國衰亡の眞時期すら其の緒言の限界すら、篇章の區劃すら、叙事の順序すら」と。かくて七年の後草稿の成りたる分を悉皆焼き棄てんとせしことも屢ありき。蓋し其の修辭に苦心せしこと驚くべきものあり後々の章はさもなかりきといへども其の第一章の如きは三度悉く稿をかへ第二第三の如きもおのゝ二回づゝ稿をかへきといふ而も件の劈頭の數章は全篇中の尤も妙ならざる部分なり。文の體制を一定する困難と冒頭落筆の至難なるの證はギッポンの實例に於て之れを見るべし。一千七百七十四年より同八十三年までは衆議院議員となりて英國々會に在りしが政治家としては特に記すべき程の功過無し。一千七百七十六年『羅馬衰亡史』の第一卷ロンドンにて出版せられき。世人は大喝采をもて歓迎し男女争うて購ひ

讀めりき。同八十一年第二第三卷出づ第一卷に比すれば辭意双つながら優りたれど讀書社會の歡迎は第一卷に劣りたりき曲や、高うして俚耳の悦ばざるためし也。加之第一卷なる最後の二章は頗る僧侶として不快を感ぜしめ論難詭罵漸く甚しきに至りしかは暫く續篇の筆を止めて之れに答へざるを得ざりしかど彼れもと論辯の術に長せず隨うて敵者と鬪ふの不利なるを感じき。さればにや敢て前説を取消さざりしも其の基督教に對する調子は次第に穩和となり中正となり復た彼の有名なる第十五第十六章の過激なる叙説を見ざるに至りき。此の苦心經營の間に家計ますく、不如意となりしかばやがてロンドンなる其の家をすて家財を提げて遠く瑞西なるロウサーンに移り舊友ディヴルダンと共に住みて専ら其の業に潜心せり。さて第四卷はロンドン發足の前に成り第五と第六とはロウサーンにて物せられき。彼の人口に膾炙したる卷尾の數行を綴り果てしは實に一千七百八十七年六月二十七日の月夜其の夜將に半ならんとせし程なりきとぞ。同八十八年の夏最終の三卷も悉くロンドンにて發售せられき。それより後のギッボンが身の上はまた特に記すべき程の事なし。其の身體の漸衰して宿痼

の再發せしと同時に引き續きて其の知友を失ひ剩へ佛國革命の擾亂の爲に倉皇瑞西を去りて本國に走らざるを得ざるに至り一千七百九十四年一月十五日竟にロンドンにて逝りき時に行年五十七。終生妻を娶らざりしかど其の最初の意中の人スーサン、チッセルに對しては永くブレトリーの戀愛を持續せりきといふ。又交友に篤く親戚に忠なりき。宗教に關しては自由思索家を以て目せられ或は懷疑家と稱せらる。又歴史家としては前にもいへる如くヒューム、ロバートメンに優ること幾段なり蓋し他の二家の今尙史家として文學史上に推重せらるゝはむしろ文章上の功績に由れるなれどギッボンは然らず彼れが大著は今も尙信憑すべき史として讀まるゝなり。フリーマン曰はく。

近世の考鑿の爲に(史壇以外に)排除せられざる若しくは排除せられんさせざる十八世紀の史家はひゞり彼れあるのみ(中略)彼れが結構(考案)は百科全書的(周到普遍)にして之れを實施するの鹽梅はた精確周到、成心僻見の弊無く考證悉く據る所あり、彼れが著は永く史家に重んぜらるべし。(以上義譯)

と。『羅馬衰亡史』はあのづから三大部に分かる、卷初よりコンスタンチンまでを第一部としコンスタンチンより羅馬滅亡までを第二部としさてそれより東羅馬の

首都コンスタンチノープルの陥落までを第三部となさば更に穩當なりしならん。實に是れ古今有數の大歴史なるを十年一日の如く些も倦める色無く竟に之れを完成せし勇氣と手腕とは眞に推服すべきものなり。さて彼れが文致につきては其の妍媸は殆ど何人にも瞭然たるべき筈なるに不思議にも批判は今尙一定せずされど嚴密に評すれば其の雅健と流麗とは人皆の認めざるを得ざる所也又其の些事を叙狀する筆の動もすれば莊嚴華麗に過ぎて兎もすれば波瀾變化に乏しく洒脱快活の趣致に貪なる是れはた敵味方の認むる所なるべし。さもあれ此等文病は重に第一卷に於て認めらるゝ所卷の進むに隨うて筆もまた頗る進めるが故に全躰より評すればギッボンが史筆は此の莊嚴なる大歴史に相應したるものといふべく氣力あり威嚴あり精嚴また瑰麗永く史筆の表極たるに稱へり。さて史家としては十八世紀の文壇また以上の三名家に匹すべき者なしされどここに個人の詳細を著してマコーレーには傳紀家の王と稱せられ隱然英國の文壇に傳紀の一紀元を劃したる者ありヂェームス・ボスエル(一七四〇生、一七九九年死是れなり)。彼れは其の爲人よりいへば屑々たる小人のみ才器必ずしも俊秀なるにあ

らず、學識はた尋常なりしが如し而も其の名の人口に膾炙し其の筆に成れる一部の書の今尙愛讀すべき十八世紀文學の遺物中に數へらるゝ、そもく、また何故ぞといふに其の理二つあり一は彼れが才の時に社交的現象を觀察し銘感し且叙狀するに秀絶なりしこと、一は當代第一の名家ドクトル、ヂェンソンに心服し全力を傾けて其の行動を録せしが故に、其の叙説せる事自から讀むに足れり隨うて其の穿細なる苦心も現未の讀書社會に認められ名聲を永く後世に傳へたるなり。按ふに傳記は英國にては最も晚く花を着けし文學の一枝なり。之れより先きナルトンは『ドーン』及び『ヘルバルト』スプラットが『カウリー』、オルヂースが『ローリー』傳など事柄の上よりも文章の上よりもほゞ讀むに足るべき傳紀已に乏しからず出でたりしがそれらは皆舊躰の傳紀にして近世に謂ふ詳傳に近きものは一千七百七十五年に上梓せしヰリアム・マンソンが著『Life and Letters of Gray』を嚆矢とす。此の『グレー傳』とても尙甚だ不完全の著述なりしをボスエルが特得の技倆は之を摸範として能く出藍の名著を成せり。ボスエルがはじめてヂェンソンに見えしは其の二十三歳の時(一千七百六十三年五月)なりしが彼れが彼の博士を景仰せしは

勿論此の時にはじまりしにあらず。一千七百六十八年には其の著 An Account of Corsica を世にいだし同七十三年にはジョンソンの推薦にて「文學會」に入り同年の暮には夫子ジョンソンと共にスコットランド地方を歴遊し日々の聞睹および夫子に關する日常の些事を録すること詳細綿密を極はめたり。同八十五年に至りて「Journal of a Tour to the Hebrides」と題して出版せしは此の旅行日記なり。その後六年(一七九一)其の傑作「Life of Samuel Johnson, L. D.」(法學博士サムエル・ジョンソンの傳)成りぬ。サー・ジョン・レイノルズに獻呈すと記したり。世界の讀書社會は此の著を激賞して今尙古今東西の史書中に於ける尤も面白きものゝ五六部中に算ふ。ジョンソン一身に關する事實の、其の坐臥寢食、一舉一動、一擧一咳の末までも目に睹るが如く叙説狀寫せられたるのみにあらず英國十八世紀文壇の情況否當社會の模様さへも此の書を鏡として髣髴するに足る。空前はいふを俟たず絶後の褒稱すらも恐らくは否拒し易からざる好著なり。

此の新傳紀の特質は著者即ち傳する者の見解、褒貶、若しくは推測的論斷等を主とせずして本傳即ち傳せらるゝ主人公其の人をして及ぶべき限りはみづから其の

履歷を語らしめ以ておのづから其の性質を表現せしむるを旨とせる所にあり。こはボスエルの當時に在りてはマソンの不完全なる一著の外に相似たる先例もなかりしことゆゑ甚だ大膽なる試験なりしを彼れが特長は彼れを助けて古今稀有の功を成さしめたり。若しボスエルにして更に廣く眼を放ち當時の全社會を觀察して叙寫すること此の『ジョンソン傳』にひとしかりしならば其の効名は更に幾等の重きを加へ十八世紀の文學もまた更に一大著を加へしならん。其の固有の特長のひとり一夫子の周邊にのみ彷徨せしことあたらしといふべし。彼れの談話を再現するや殆ど今の速記者もしかず言々活躍し當話者の性さながらに飛動す。彼れは眞に企及し易からざる劇詩的筆力に富める者なり。措辭總じて平淡、其の偶像ジョンソンが文の誇大過重なるに似ず。

第十四章 ポープ以後の詩人 (トムソンよりグレーまで)

詩風の變移——ヤング——ヤングと同期の第二流詩人——トムソン——
「四季の歌——グレー——其の諸作——『蘇聯吟』」

ポープが詩風の一世に冠たりしや庸才の徒はひとへに其の蹤を追うてポープが

模倣のみ力めたりしがやゝ抱負ある後進は其の到底企及すべからざるを悟りたりしと時尙のやゝあらたまり來りたりしとに由りて漸く其の着眼を一變せり是れ英國の詩歌に近世に所謂自然主義ナチュラルリズムの入り來ぬる發端なり。一千七百二十六年にトムソンの“Winter”『冬の卷』世にいで同五十一年にグレイの“Elegy”『墓畔吟』でしまで其の間二十有五年此間にあらはれし主なる詩篇九又は十それらは皆新詩眼に基きて成れりしものなり既しては沈鬱而も句々莊嚴其の調子何となくゴシック風即ち中古風の氣脈を帯び且いまだおぼろけながらも自然の現象を研究せんと欲するの傾向其の詞句の間に隱然たり。且や從來の諸作は其の眞面目の詩歌なる限りはすべて「ヒロイック、カプレット」と稱する昂起格アイタカの一種をもて物する例なりしが此の格いつしかに廢れて當時の名作中『四季の歌』の如き『夜思』の如き『墳墓』の如きは沒韻律語をもて綴られ “The Castle of Indolence” 『懶惰城』の如き “The Schoolmistress” 『女教師』のごときはスペンセリアン解スペンセリアン “The Spleen” 及び “Grongar Hill” の如き八音格もて綴られたり。その他グレイ、コリンズ等が壯年の作將九種々の新律格をもて物せられき。但し一千七百五十四年に發兌せしグレ

ーが晩年の經營に成れる諸作の如きは此の範圍に屬せざるものとす。

當期の詩人中最も卓越せりし者は『墓畔吟』の作家グレイにして此れに次げりしものはトムソンとコリンズとなり而して當期即ち十八世紀の第二期詩壇と其の第一期即ちポーラ全盛時代との關鎖となりておのづから其の過渡を代表せる者を有名なる『夜思』の作者 Edward Young (一六八一—一七六五死)とす。

ヤングはオックスフォード大學の出身にして僧也其の作あまたあり “The Last Day” “The Force of Religion” などの作の外に劇詩に “Busiris” (悲劇にして舞臺に上せ一時の成功を博せしものあり) “The Revenge” (Zanga とスエムニア人を主人公として作れるもの、シェークスピアの『オセロ』と相離れざる所ヤングの技術にして “Busiris” よりは優ると一等なれど舞臺にては前作ほど好評ならざりきといふあり尙其の他にも諷刺詩、抒情歌など若干あれど最も傑れたるは “Complaint, or Night Thoughts” (『夜思』一七四二—四四)なるべし。こは九卷に分かたれ沒韻律語無慮一萬行より成れり形式の上よりいへば莊嚴にして瑰麗なる所頗るミルトンの面影あり其の環は語繁きに過ぎて形容虛に流れ動もすれば花多くして實乏しく且あまり長篇

なるが爲に處々巧拙の差甚しく珠玉瓦礫相聯なるの感あり加ふるに其人生及び自然に對する觀念一向に悵鬱に偏したるが故に所説間々中正を失し此の教訓詩をして其の價値の幾分を減せしむ。されど此の瑕失を補ふべきものは彼れが當意即妙の機才と其の落想の巧と其の筆致の威嚴と力と其の律調の流麗となり。ヤングについで一時名を知られしは“Pastoral”と云ふる作を『スペクテートル』にいだし、John Byron (一六九二生一七九三死) “The Spleen”と云ふるは、八百行の長篇を遺し、Matthew Green (一六九六生一七三七死) チンソンに傳せられて後世に名を傳へし “Vanderer” の作者 Richard Savage (六一九八生一七四三死) トムソンの『冬』の巻と同年に “Gronger Hill” を著し、John Dyer (一六九五生一七五八死) “The Grave” と題したる凡そ八百餘句の没韵詩(教訓詩)をヤングの『夜思』と同年に(一七四三)世にいだし年壯にして世を辭し或はヤングよりも優さりたりと稱せらる、Robert Blair (一六九九生一七四六) 以上數名に過ぎず。此の中ダイアルはエールスの人ブレアは蘇國の人也。皆第二流の詩人をもて目すべきもの。一代の詞宗たるに叶へるはポープの後クレイの前只一人のジェームストムソンあるのみ。

トムソン(一七〇〇生一七四八死)は蘇國名族の子、神學の學生としてエジンバラの大學に學び二十歳のころ已に筆を詩歌に着けたり。一千七百二十五年青雲を欲してはじめてロンドンに上り衣食窮乏の間(同年の秋) “Winter” 『冬』の巻(一篇)をして翌年三月に至り知音の扶助を得て世にいだせり、詩人マレット劇詩家ヒル等之れを激賞し喧傳せしかばトムソンが詩名たちまちにして揚がりき。一千七百二十七年には『夏の巻』いで其の翌年には『春の巻』同三十年には『四季の歌』完璧となりて發兌せられき。今傳はれるは五千五百行より成れど初め世に出でし時は行數はるかにすくなかりきといふ。蓋し版を改むる毎に修正を施し且新たに話諺感慨等を挿加せし爲め竟に現存せるもの、如くなりしなり。此の有數の作は四季の人事景物を叙寫するに於て趣くとも空前の光譽を荷ひ得べきものなり其の自然を描ける筆は未だ後のナオズオスほどに深遠なりといふべからざれど人事と景物とを錯綜して叙狀し來たるや讀者をして目に其の物を睹、耳に其の聲を聞かしむるの力あり、實にして真なる所第一期詩壇の諸作と全然面目を殊にしたり。『冬』の巻尤も短く又尤も清新の想像に富む。さて『春の巻』は以て作家の學

識見を窺ふべく『夏の巻』は以て其の叙事の本事を見るべく『秋の巻』及び其の巻末に添へたる自然の徳を頌するの歌 (Hymn to Nature) は寫景詩としての趣味の外に作家の人生觀を髣髴するの料たるべし。

『四季の歌』を著して詩名ポープを凌がんとせし時トムソン正に三十歳なりしが大牧師某の息が管學 (Governor) となりて大陸 (佛伊) に漫遊せり此の羈旅中の閱歷は其の作 “Liberty” の資材となれり。但しトムソンの詩才は其のころより次第に萎靡し悲劇の作なども數篇ありしが一千七百四十八年に物せし其の第二の傑作 “The Castle of Indolence” 『懶惰城』の外は取りいで言ふべき價ひ無し。此の作は下二篇に分かたれ上篇にては専らインドレンスと稱する一妖賊が棲める城郭を狀説し且そこに捕はれたる醉生夢死の徒 (懶惰者) の生活に及びさて下篇にては Arts (技藝) と Industry (勤勞) とを代表せる某武士が其の勇力によりて竟に此の妖賊を退治する事を愈せり。沈鬱と戲謔とを奇怪にも混合せる作にして純然たる夢幻的物語也譬へば屋氣樓の虛靈にして美妙なるが如し。按ふにトムソンの當時の詩壇に於ける勢力及び其の十九世紀の詩人に於ける感化は頗る小少ならざり

しに似たり現にシェリーの如きも『懶惰城』に自ふ所趣からずといふ。而もトムソンの感化と勢力とは其の及ぶ範圍廣からざりしゆゑに其の中心詩宗としての名聲は竟にポープほどに高からず。

トムソンとクレイとの間に名をあらはしし第二流以下の詩人は曰はく Lyttelton 曰はく Glover 曰はく Browne 曰はく Garrick (優人) 曰はく Williams 曰はく Webster 曰はく Wesley 曰はく Shenstone 曰はく Whitehead (桂冠詩宗) 曰はく William Collins 是れなり。其のうちコリンス (一七二一生、一七五九死) はチェストル市の製帽師の子なりはじめ井ンチェストルにて、次にオクスホオドなるマクダレン大學にて業を修めき。壯年のころロンドンにいであつてトムソン等と交遊し屢其の作を世にいだしき。生來多病なりしかば二十八歳のころ故郷に退き尙若干の作をなししが三十歳以後宿痼漸く重り、つひには狂癲の症となり詞友にだに忘られて逝りにき。コリンスの作は今日に遺存せるものいと尠し。専ら抒情時に秀でたれど其の作の尤も見るべきは短篇なり。 “The Ode to Evening” (黄昏に寄するの歌) 及び “The Passion” などは尤ももてはやされたりし作なり。其の他 “The Ode on the Poetical

Character" "Popular Superstitions" 及び "Dirge in Gymbeline" など皆其の詩才の年と共に進みつゝありしを證するに足るといふ故に近世の批評家中コリンズの夭折を惜む者多し。ゴッズはコリンズを評して曰はく彼れが作には彫像師が刀の趣致あり其の句々劃然として截然たり大理石の如く清純なれども亦た大理石の如く冷かなりと

トマス、グレー

詩歌の最悪時代と貶稱せられたる英國十八世紀文壇の汚名幾分を銷却する者は當第二期の殿となれる大抒情詩家、有名なる『墓畔吟』の作者トマス、グレー(一七一六生、一七七一年死)なり。グレーとコリンズとは精査すれば其の質痛く相異なれりと雖も一見相似たる所も尠からず。二者共に作に乏しく又共に抒情詩家たり、二者共に甚しく活喩法、諷喩法をよろこび用ひ又共に希臘風なる精緻微妙なる筆致を鍊磨し且當時は殆ど等閑視せられ近年に至りて次第に重視せらるゝ外國文學例へば中古文學スカンヂナヴィヤ文學、ケルト文學などに精通したりき。もとより著者として個人として將た學者たるの點より見るもグレーのコリンズに優れ

るや論無しと雖も醇乎たる天然の抒情詩家としてはコリンズやグレーに超えたり。コリンズの歌ふや鳥の歌ふが如く歌はざるを得ずして歌ふ而してグレーは韻語に於ける絶好技術家、天然ももとより乏しからざりきと雖も博く學び精しく修めてますく之れを圓滿にせるの概あり。二家各其の長を殊にす。

ポープロトオゾオオとの間に立ちて英文學史の一大詩人と見做さるゝトマス、グレーは一千七百十六年十二月ロンドンに生まれイトンの學校にて教育せられ同三十四イトンよりカムブリッジに移りヘムブローク校に入り後またピーターハウス校の准校友となりき。彼れは其過半生をカムブリッジにて過ごしなり。

其の未だ得業せざりしや已に若干の羅旬韻語を物して之を世に公にし又一千七百三十八年には古代文學中の妙句をぬきて屢々絶好なる英國韻語に醸しき。同三十九年には其の友ホレーズ、ナルポールに伴うて佛伊兩國を漫遊し其のはじめてアルプスを超えしや古來の漫遊者が風流の眼ある詩人すらも只怖ろしとのみ詠めすてたりし此の歐南の山色のいと氣高く美しきを感銘し其の友 ^{At the} West に書してアルプスの山景を報じ且曰はく「断岸や飛泉や巖岩や一として宗教詩歌の旨

のあふれたらぬは無し」(Not a precipice, not a torrent, not a cliff, but is pregnant with religion and poetry.) 等。癩旅三年一千七百四十一年に至り從來交誼厚かりしクレイとチャルボールと端なくも争論して誼破れしかば相分かれて歸途に就きしが同四十四年に及びて幸ひにも又舊盟を尋ぐを得たりき。歸國後二月にして其の父を失ふ家事紛然たり同年冬カムブリッジに歸寓す。此の年著す所(一)トムソン風の悲劇詩の斷章『アッシュン』(11) 『On Spring』 (11) On a Distant Prospect of Eton College (四) On Adversity (五) Sonnet on the Death of West (以上皆抒情詩)なり又『墓畔吟』(Flegy in a Country Churchyard)の稿もはじめて此の年に起こしたりき。而して爾後五年間はクレイが志氣沮喪せし時期なり彼れは寂黙として只管ピートルハウス校なる一室のうちに閉籠り古文學の研鑽に世を忘れたる者の如くなりき。一千七百四十七年一小冊子を公にす所謂『Eton College Ode』(イトン學校を憶ふの歌)是れなり而してこは何等の感覺をも讀詩社會に與へざりきなり。又彼の可憐なる小品『The Ode on the Death of a Favorite Cat』(愛猫の死を悼むの歌)を物せしも此のころなり。かくて一千七百五十年までに更に若干の作あれど其のうち特

筆すべきは『墓畔吟』なりこは前後十有二年の彫琢刻鏤を経て完成し同五十一年の冬はじめて匿名にて世にいでたり。さて同五十三年に至り其の既往の諸作に『A Long Story』と題したる新作を加へたるクレイが詩集『Six Poems by Mr. T. Gray』世にいでたり。以上をクレイ文學的生涯の第一期とす。第二期に於て特筆すべき作は希のビングルの凱歌エビタに摸してむしろ彼れを凌がんの抱負をもて作られし『The Progress of Poesy』同じくビングルに摸して物せし『The Liberty of Genius (今は只斷章のみ遺れり)及び『The Bard』なり。『詩人』は一千七百五十四年の冬に起稿し同五十七年の夏に脱稿しきといふ。同五十六年故ありてピーターハウス校を去りヘムブローク校に移り世を辭せしまでこゝに寓しき。翌年其のビングル風の抒情詩の印刷せられて世にいでしやクレイが詩名忽然として揚がり當代の詩宗をもて目せられき後數月桂冠詩宗 Colley Cibber 逝りしかば當局者は其の後を襲がんことをクレイに勧めしが辭して諾せざりき。同六十年六十一年は専らケルト文學(即ち英國古代の詩歌)を研究せし時代なり蓋し古詩史を綴らんの心ありしなり。此等ケルト文學の研究は同七年の末に至り

彼れをして二種の『ヘツダ』的詩篇を作らしめき。『The Fatal Sisters』及び『The Descent of Odin』是れなり。

『エツダ』はスカンディナヴィアの神代誌といふべき古詩篇なり。

ムブリヂ大學の近世史及び近世の國語の教授に任ぜらる。されど一たびも講説せしことはなかりきといふ。かくて同七十一年六月ムフロック校なる其の居室内にて逝りしまで彼れが身上の事件は後進の詞客等と交りて屢々夏期の漫遊を世に知られざる勝地に試みしと及び『大學就職の歌』を物せし年(一七六九)の秋、彼の湖水地方に旅行せしこと、其の記行を散文にて綴りし事、殆ど其の他には語るべき事もなし。クレーの如きは眞個平靜なる學者的生涯を過ごし、人なり。

論者或はクレーが作の乏しきを咎めて英國詩客中の第一位に置くを肯せざるものありされども詩文人の大小は量によりて定むべからずして質によりて決すべきものたり又其の時尙の如何に詩歌に不利にして作家の神興を促すに適せざりしかをも察せざるべからず。クレーの作はげに其の量をいへば少なりと雖も其詩想の創新と變化と其の意氣の新鮮と剛健ととも甚だ多とすべきものあり。クレーは明かに十八世紀詩壇を結了せる作家たり彼れは莊嚴なる『墓畔吟』に於て

トムソン派の頂點を代表し同時に彼の派の系統を一斷し轉じて精巧なるピンダルの詩風を興し、夙然として第一期(オウガスタン)韻語の舊窠を脱して後のシエリの爲に新しき詩道を開けり。若し夫れ晩年の作、『エツダ』又はオシアンに鼓吹せられし小品の如きは時尙に先だつこと更に幾段、明かに十九世紀の詩潮を先示せるもの、純然たるロマンチズム(中古派、又の名傳奇派)の作に類す。クレーが精進の蹤以て歴々として徴すべし。

詩人にして博覽洽讀學識古今に涉り古くは希臘の古文學より近くはアイストラッド文學に至る迄、苟も文學に關する限りは之れを修めざるはなかりし。クレーの如きは古今異に稀に見る所なり。同代の名士某は彼れを評して歐洲に於ける方今第一の博識ならんといへりき。デモン、ミルトンの博學なりしも或はクレーには一歩を譲りぬべし。クレーの學を好みしや常人の色食に於けるよりも甚し。彼れは沈鬱不活潑なりしにも拘らず其の智的勞力に精勵なりしと其の發達の著大なりしこと眞に驚くべきものありされば彼れ嘗ていへりき、事に従ふは大率なり。『To be employer is to be happy』と勉學はすなはち彼れが爲に慰鬱排悶の要具たりしな

り。クレイが作のうち論ずるまでもなく第一位を占むるものは『墓畔吟』なり。もどより一部分の上よりいへば此の作に優る句もあまた見ゆれど全躰の精妙と圓滿とは到底此の作に及ぶものなし。其の着想は平明特に奇抜なる箇所もなければ其の語や其の調や精を極め美を盡くし句々貫珠の如く一字一昧をも増減すべからず恰も是れ古名匠の刀に成れる靈妙秀絶なる彫像と一般愛すべくして玩ぶべからず崇むべくして親しむべからざるの致あり此故にスフィンバーンは評して曰はく「此の作のみの譽にてもクレイは將來の諸代に對して奪ふべからざる無上の地位を占む」と。『墓畔吟』は夙に我が讀者社會の熟知せる所故に今多く論ぜず。

第十五章 第三期の作家

第三流の小詩人——ゴールドスミス——其の略傳——其の特質——
村落——劇作家シエリゲン——當時の劇壇

十八世紀第三期の詩壇は其の第二期に於て幾分か消却せんとしたりし散文時代といふ貶稱を再び回復せし詩壇なり詩人を以て稱せらるゝ者は夥多ありしが莊嚴クレイの如き作家もどより無く溫柔ゴリンスの如きもの亦たいでず自然を研

究することトムソンの如く篤志なるもの將た遂に現れざりき。彼等はあしなへて能文の士なりき散文家としては或は有数の名家たるを得しも詩人としては流麗なる韻語家たりしのみ。Akenside (一七二二生一七七〇死) Grainger (一七二二生一七六六死) Smart (一七二二生一七七〇死) Auster (一七二四生一八〇五死) Foote (一七二二生一七七七死) Hoellly (一七〇六生一七五七死) Townley (一七一四生一七七八死) Kelly (一七三九生一七七七死) Lloyd (一七三三生一七六四死) Worton (一七二八生一七九〇死) Falconer (一七三二生一七六九死) Darwin (一七三一生一八〇二死) Chatterton (一七五二生一七七〇死)等多少の優劣はありと雖も要するに皆第三流以下此の小史中に特筆すべきの價值なしと信ず。按ふに此の期の詩人にしてやゝ注意すべき品位ある者は第一に「廢村落の作者」オルヅル、ゴールドスミス、第二に劇の作家として知られたるリチャード、プリンスリー、シエリダン此の二作家なるべし。

オリヅル、ゴールドスミスは千七百二十七年愛蘭ロングホオド洲の一小村なる一貧牧師の家に生まれき。幼にして痘瘡に罹り十七歳ダブリン大學に入りて給費

生たり。性來懶惰放恣、不規律と不謹慎と教師に對しての不柔順と女性的慈仁とによりて學友に知られき。彼の夜陰竊に街衢に出で、流行歌を聞き自ら之れを作じ一作を五シルリングに賣りて小遣錢を得しはこの頃のことなり。大學を出でし後教師僧侶狀師醫者とさまざまに試みしが一も其の職を遂ぐる能はざりき。一千七百五十五年より翌年にかけて獨歩故山を去り和蘭佛蘭西獨乙瑞西伊太利を漫遊せりき。始め此の行を起すや懷中只一キニー替衣は只一枚の襯衣而して手には只一管の笛ありしのみなりしかば巡歴中の大半は乞食にひとしく農家に就きて笛を弄し夕餉と宿りとを請ひきと云ふ。『廢村落』の姉妹作として併せ稱せらるる『遊子』(The Traveller)と云へる詩はこの巡歴中に結構せしもの也。同五十六年本國に歸り亦後八年間は糊口に苦しめられ或は化學家の助手となり或は私塾の助教となり又其の自白せる所によればアックスレーンと云ふ處の乞食仲間の醫者となりしこともありと云ふ。一活版所に入りて校正係となりしも此の頃のことなり。そのうち最も長く從事せしは筆耕の職なりき。或は學校用の教科書或は小兒向きの物語類或は書籍の緒言索引等を物し又は種々の雜誌に投書し次第

に文學的生涯に入りき。支那の旅人の名にて風俗を寫せる作『世界の一市民よりの書翰集』(Letters from a Citizen of the World)『ボーマンシノ傳』(Life of Beau Nash)及び一貴族が其の子に與ふる手翰の昧にもせる『英國史』等を著し、は此の際なり。同六十四年『遊子』を出版し同六十八年『ウェイクフィールド牧師』(The Vicar of Wakefield)翌年更に『好人物』(The Good-natured Man)喜劇を出だせり。此の喜劇舞臺にては失敗せりと雖も其の報酬は五百磅を得たりき。之れより先き文名漸く高く其の收入はた少小ならざりきと雖も之れを右に得て直ちに左に散ぜしが故に窮乏依然時としては錢の爲に彼の『羅馬史』の如き駄作を物せざるを得ざりき。同七十年其の傑作『廢村落』を著し詩名ます、高く僅々三四ヶ月にして五版を重ねき。後三年喜劇『She Stoops to Conquer』成り非常の好評なりき。今やゴールドスミスの名譽其の頂に達し其の交遊には名ある詩文人あり美術家あり政治家あり就中博士チヨンソンと親しかりき。さもあれ其の矯め難き放縱の性の爲に生計上の困難依然として舊に變らず彼れは殆ど書肆の奴同様の姿にて本意ならぬ述作に醜態たりき。『希臘史』の如きまたは『History of Animated Nature』の如き是れなり。千七百七

十一年病没す享年四十六。

英國の詩人中ゴールドスミスばかり廣く愛せられたるはあらず。彼れは尊敬せらるべき作家にはあらず但し愛憐せらるべき性を具せり。柔和俠氣厚情輕忽懶惰放縱小供らしき猜忌名聞を好み酒食に耽るの癖等是れ其の性質のあらましにして就中著きは慈善心と薄志弱行となり。婦人めく慈善心は其の生まれながら具へし一種の病にして其の一生を貧困中に送りしが如きもの其の一因こゝに在り。其の貧民乞食に對するや前後を顧ずして惠與し爲に裁縫師の拂ひにすら窮せしと屢々ありき。其の遊りしや朋友愛讀者は更なり貧民はた追悼惋惜しきと云ふ。彼れ薄志弱行なりし故に常に浮世の束縛の堪へ難きを歎じ靜に處りては動かんことを念ひ動いては靜ならんことを求め暫くも現在に安じ得ざりき。サッカレー評して曰はく彼れは明日の空を空想し若しくは昨日のことを歎じて今日を送り必要迫らざる限りは現在を閑却すと。按ふにゴールドスミスは日をも月をも年をも生涯をも斯の如くにして送りし也。其の名作『廢村落』の如き『エーケフイーールドの牧師』の如き皆過去を回想して今昔の感を寫せるに外ならず。如上の

性質に加ふるに輕忽雅氣名聞等を以てす人誰れか愛憐せざらんまた誰れか輕ろしめ笑はざらん。彼れは時の文學社會の寵兒たりしと共に笑柄たりき。さて此の性の其の作の上に現はるゝや美しき悲哀となり優雅なる惻隱となり柔和なる微笑となりにき。さればレーノルズの妹某は曰へらく『遊子』を讀めばいかにしても其の作者を痘痕斑々の醜男子と思ふ能はずと。げにや彼れの作を讀まん者は多少此の種の感無きを得ず思ふに當時にありてなべての人に寵せられたりしが如く其の作の存せん限り彼れは永く讀書社會の寵兒たらん。

『廢村落』の詩は作者か二歳の時より棲みなれたりしリスノイと云へる一寒村を追懐して物せしにて其の中に描ける牧師は暗に其の父チャールスゴールドスミスを書せるなりとも云ひ一説には詩中の村オーパーンはリスノイとは別なりとも云ひ種々説あれど要するにオーパーンはリスノイならんと云ふ説多數なり。尤もオーパーンをリスノイなりとするも或は誇大にし或は附加したる所ありて實寫ならざると勿論なり。

『廢村落』は作者が當時目を逐うて華奢贅澤の風の旺なるを見ていたく歎き訓誡の

意ありて作せしものにて處々に作者が經濟說ほの見えたれば此の點に就きて或はゴールドスマスを咎めたるものあり。其の大意に曰はく蓋しゴールドスマスは彼の『國財論』の著者アダム・スマスが經濟學の眞理を唱へつゝありし時に其の正反對の謬説を傳へんとせしものなり彼れの説は事實上、理論上、共に誤れり。當時の人口の減せしことを信ぜしは事實上の誤にして此の事實の原因を纏めて商業の繁昌に歸せしは推理上の誤なり、更に商業の繁昌と奢侈の弊習とを以て必然相離れざるものと見做しゝも誤なり。またゴールドスマスは小地主の大地主の爲に併せらるゝを非なりとす、此の點に就きては未だ定説あるにはあらねど輓近の實驗は大農の利あるを證す。また移住民の狀態の如きも誇大にせし處ありて實際とは大なる相違あり云々と。按ふに此の詩をば訓誡として見ば或はかゝる非難を加ふるも適當あらめど詩歌として之れを見んか經濟說の是非眞妄豈深く問ふを要せんや。彼の詩を論ずる者は専ら作者か田舎生活を愛する念の厚き、其の平民に對する同情の純清なる、其の同感の溢れて或は豪商の驕奢に對する公憤ともなり慷慨ともなり、或は窮民に對する愛憐とも慈悲ともなれる、至切至誠なるを

味ふべし。

ゴールドスマス其の作『世界の一市民よりの書翰集』中に曰はく、如何なる浮沈に逢ふも如何に勞するも如何なる所を流浪するも再び故國に歸りて平和を得たしといふ希望は吾れも人も有するものなり、生まれし處にて死なんことは皆人の希望所にして此の希望ありてこそ目前の痛苦をも暫時は忘るゝを得るなれど。蓋し再び故國に歸りて悠々自適以て老後を送らんの願は平生彼れが心頭に往來せし希望なりしが如し。彼れ年齒四十三(『廢村落』)を作りし年死前三年)に達して已に人生の大半を経過し遍く浮世の辛酸を嘗め人情の冷熱常なきを知りし時身は倫敦大都の紅塵中にありて目前に生存競争の活劇を見ながら、中宵徐に往事を回想せしや、去來集散の常なく、榮辱得失の定めなくして、人事の夢の如きを感じ、人生の眞相は果たして如何との問題に撞着し、寧ろ名利を抛ちて故園に歸らん、平生の希望は更に禁ずる能はざりしならん。而して其の故園なるリスノイの孤村を尋ぬれば滿目蕭條として草笑ひ水謠ひし昔日の儂をどゞめず、土地は悉く大地主の有に歸して半は荒蕪に委し質朴なる住民は姿をかくし奢侈俗を成すを見る。

是に於てか舊時の故園を追慕し質朴なる住民を愛するの情奢侈を惡むの念は漏らすに處なく遂に一篇の『廢村落』となりて現るゝに至りき。

按ずるにゴールドスミスは詩學的傾向よりいへばむしろ保守的傾向即ち退歩的傾向を代表す。其の詩律に於てもゴールドスミスは一旦廢れたりし「ヒロイックカプト」(英雄句格)を好みて用ひ彼のトムソンが用ひたりしスペンセリアン解^{ハズン}及び没韻^{メト}若しくはゲレー、コリンズ等の用ひたりし句格の如きは彼れの痛く排斥せし所なりき。彼れは自然主義の詩壇に其の名を著しながらその詩統はポーア一流に屬し流麗と閑雅との詩の第一義となしゝに似たりされば其の風調のうつくしきと其の詞句の洗鍊^{セン}而も素樸なること(に於ては往々にしてポーアの上に出でたり。而して其の感想の高からざれども清く奇ならざれども醇なる所彼れをして長く英國詩史中に其の詩名を留めしむるに足る。

散文劇脚本の作家としてエリザベス朝以後の有數作家たる Richard Brinsley Sheridan (一七五二生、一八一六死)は二十二歳にして「The Rivals」と題せる滑稽劇を著し且つ「The Duenna」と題せる滑稽劇^{コメディ}を作し忽ちにして女名を世間に知られ、引き

つゝき種々の作あり「A Trip to Scarborough」「The School for Scandal」「The Critic」「The Rehearsal」是れなり。其のうち「The School for Scandal」は今尙廣く歡迎せらるゝ英國喜劇の絶好なるものゝ一なり。シェリダンが作は當時普く悦ばれたりし佛の大喜劇作家モリエールの作に倣ひたるものといはんよりはむしろ王政復舊時代の諸作即ちキャッテリー等の美所を取り其の醜所を除き得たるものと評すべし。シェリダンの作は尙あれども他は或は翻案に屬し且つこゝに特筆すべき價值なし。所詮彼れが劇詩人としての生涯は二十七歳までなり、爾後はむしろ政治界に名聲ありし時代なり。

シェリダンの喜劇に成功せし當期は比較的喜劇昌盛の時代なりき。例へばゴールドスミスの作に「She Swoops to Conquer」あり Richard Cumberland の作に「The West Indian」あり Arthur Murphy の作に「Three Weeks after Marriage」あり Hannah Parkhouse (Mrs. Cowley) の作に「The Bell's Stratagem」ありいづれも佳作なり。其の他梨園よりいでたる作家には Garrick あり Foote あり(以上俳優) Colman (座長) 父子あり、喜劇のみの上よりいへば内亂時代に優るとも劣らず而してシェリダンあるが爲に當期をして英

國劇詩史中の注意すべき一期たらしむ。

五五〇

第十六章 十八世紀の英國文學と外國文學

英國文學と大陸との關係——十八世紀の英國著述の佛國名士に於ける影響——獨逸文學に於ける影響——十八世紀末葉の風潮

英國十八世紀文學の史を結了するに臨みて特に注意することを要するは其の歐洲大陸の諸文學に於ける影響なり。文學としての價值よりいへばエリザ王朝の文學こそ曾て英國に産出せし尤も偉いなる文學的所産なるべしと雖も、其の外國民の感想上に於ける影響よりいへば第十八世の英文學こそ尤も著明なる効果を成したれといふべきなり。

按ふに從來の英文學は直接若しくは間接に始終大陸の感化を受けにき、古くはチヨウサーの佛伊の作に負ふ所ありしが如きエリザ朝の諸名家のルチッサンスの風潮に搖かされ且つ伊佛の名著に私淑する所尠からざりしが如き若しくは十七世紀、十八世紀の諸作家が佛國の劇詩若しくは審美的評論又は西班牙の小説に動かされしが如き、いづれか英國の弟子にして大陸の師表たるを證せざりしぞ。然

るに時運漸く變化し第十八世の末ごろに至りては局面いつしか轉換して政治上に於ても文學上に於ても英國はやゝ師位に立ち大陸は却りて弟座に下れり。例へば彼の政治上の革命の如きも英國まづ先導し北米之れを擴大し佛國其の響を受けて破裂し其の餘波全歐に及び竟に漲溢して全世界を振蕩するの洪濤となりにき。又純文學の上より見るもボープが技巧的時歌の譽は普く大陸に喧傳せられ口耳曼の名家も之れに模倣し伊瑞和蘭諸國の諸作家はた彼れが蹤に追隨せり。トムソンの如きも頗る佛人に感賞せられ Saint-Lambert といふ者牛耳を取りて佛にトムソン風の一詩派を起すに至りき。若しくはフィールデングスモート作の同じく佛人に激賞せられ就中リチャードソンの諸作の彼のルッソーに愛讀せられて其の『新エレナ』の模範となり延いて獨の大詩人キヨオテの名作に影響せしが如き、若しくは史傳の方面よりいへば、ヒューム、ギッポンの新著作の普く佛伊の諸家を驚かし明かに歐洲に於ける史傳の新紀元を劃せしが如き、いづれも英國の文學史に於て未だ曾てあらざりし所なり。而して此の關係を語るに當たりて自然に念頭に浮びいづる著大なる大陸の三詞客あり英國文學の大陸に弘布せられしは

蓋し件の三名家の力に因るなり。

所謂三名家とは第一、佛のモンテスキュー第二、獨のレッシング第三、佛のルソーなり。彼のモンテスキューが名著『方法精理』(一七四八發刊)中に英國々憲を激賞せる文あり、こはロックが學説及び思想に深く通じたる者にあらざるよりは決して物し得ざるべき所なりといふ。蓋しモンテスキューは最善く英國を解し且つ頗る英國的風俗を愛好し其の家に在るや庭園は之れを英の好尚に倣うて設置し、書を讀めば常に英國の諸著を求めき、若し夫れレッシングが英の諸著に通じたりしはモンテスキューにも越えたり彼れは深く英國の劇詩に通じ英國十八世紀の小品文にくはしく且つや英國美文學の偉大なることを唱破せし大陸最先の批評家たり。さて佛の文豪テルテールも其のシェイクスピアを非難せしに係らずまた多少同じ方面に力を盡くせり。さもあれ佛國の詞客中に於て尤も英國文學の弘布に與りて力ありしは彼のジャンヂヤック、ルソーなるべし。此の燃ゆる如き天才が溶解せし許多の雜然たるあらがねのうち於て第一の多量を占めしは英國十八世紀の諸名著なり。彼れはロックに其の他の無神論者に、ロックに其の他の政治論者に、クラークに、

リチャードソンに、或は結構脚色に於て或は着想措辭に於て、負ふ所尠からず。さてまた特に小説の方面より見るに十八世紀英國小説の大陸文壇に於ける影響は更に一段著き者あり。そも十八世紀の起頭に於て英の讀書社會にもてはやされし小説といふは佛の流行小説の孱弱なる模倣なりき。當時尤も好評なり *Madame de La Fayette* (一六二一) 生、一六七〇死の *Partenissa* の如きは彼の佛の女作家 *Sunday* の末流を汲める劣作にして今の所謂小説を標準としていへば、殆ど齒牙にだにかゝるに足らず。然るに同世紀のなかばより此の方面の文運は、すでに前にも叙したる如く、勃然として興隆し、デホーイで、リチャードソンいで、フィールドング、スモーレット、スターンの徒頻々相ならびて創新なる筆を揮ひ、翻然小説の局面を一變し、精微靈活なる一新體を開き、所謂寫實小説及び心理小説の基礎を置きにき。しかも此の空前の革新の英の小説壇に興せしは他の大陸の小説壇が尙依然として舊窠を脱せず、陳套に安んぜりし時なりしかば、其の一たび海外に知られて、『ロビンソン・クルーソー』『バメラ』『クラリッサ』『トム・チونس』の普く大陸にて玩讀せられ、其の清新の致のよろこばるゝや、かなたの著作界讀書社會はた靡然として其の好尚を一

新し延いて全歐の小説壇に於ける一大變遷を招きしこと蓋し異しむに足らざるなり。彼のスコットや、ゲーテや、サッカレーや、 Dickens や、トルストイや皆其の遠祖を尋ね來たればリチャードソン、フィールディング等に多少の血統を繋かざるはなし。最後に哲學上よりいふも十八世紀の英國は鮮少なからざる感化を歐洲大陸に與へたり。ロック、バルクリー、ホブズ、マンデヴィル、シャフツベリ、バトラー皆な大陸の名家に對して多少勢力を有したり就中勢力大なりしはシャフツベリなり。佛にありては Diderot, Voltaire 獨に在りては Herder, Lessing, Wieland 等いづれもシャフツベリが徒弟たりき。而して彼等がシャフツベリに感服せりし點は主として其の倫理説にありしに似たり。さて這般思想上に於ける大陸と英國との關係は今こゝに詳叙する餘地無しと雖も、近世英文學を講ずるに先だち全歐洲の大變就中其の思想感情上の趨勢を聊かわきまへ置く必要あれば、予が嘗て他處にて講ぜし十八世紀末期の概論を引かん。其の論はいまだ悉さずと雖もまた以て其の趨勢の概を知り、兼ねては十九世紀英文學史に移る一假橋を作る材たるに足らん。

歐洲の思想海は、最近一百年間に於て前古未曾有の大動搖を経たり。我が國

人のみが近年の大動搖前古未曾有の開化に驚愕せりと思ふ勿れ、彼等歐洲人も所謂學藝復興に於て一たび驚き、北米發見に於て再び驚き、佛國革命に於て三たび驚きつゝいて最近百年間の急灘の如き思想海の潮流に驚難の聲を絶たざりしなり。彼等は且驚き、且悟り、且絶望し、且希望し、七顛八起遂に今日の文化を致せり。就中最近百年の急思潮は、彼なたの思想海を震撼せり、恰も彼の山嶽を顛覆して江河となし、海洋を倒にして平地となせる概あり。所謂十九世紀の文物制度即ち現世紀の諸文物は、悉く最近數百年間の産物なり、否、其の最も勢力ある諸特質は、最近百年の所産といはんも、殆ど争ふと能はざるべし。見よ、彼の自由主義や、民權主義や、社會主義や、平民主義や、個人主義や、宇宙主義や、國家主義や、財政の整理や、憲法の確定や、女權論や、勞力者問題や、凡そ政治上、社會上、經濟上にあらはるゝ諸精神は、悉皆當世紀の結果ならずや。若しは學藝にあらはるゝ所を見よ、驚くべき科學上の進歩、驚くべき哲學上の進歩、驚くべき神學上の動搖、驚くべき工藝上の進歩、彼の超絶哲學や、經驗説や、審美論や、社會學や、心理學や、進化説や、新器械や、新製造法や、寫實主義や、專美派

や、いづれか當世紀の所産にあらざる。然り、最近一百年は歐洲の全局を一變せる前古空絶の紀元期なり。

此の驚くべき大變動は、そも如何にして起こりしぞ。思ふに近世史に通じたる讀者は、此の答を聽くを要せざるべし。彼等は歐洲の十八世紀が如何に一革新を促しつゝありしかを知らん、如何に十八世紀の全歐洲が腐爛の至極に沈滞して百事悉く非なりしか、如何に惡習慣が重疊して社會百般の事に累をなし、か政治上の惡習慣が如何に固著して王侯門閥の專横となりしか、宗教上の惡因襲が如何に殘敗して僧官等の墮落となりしか、如何に虛儀虛式の盛行して偽善矯飾のよろこばれしか、文學の如何に擬古に泥み彫蟲をよろこび塗飾是れ力め、濃厚是れ事とし、ひたすら纖巧にのみ流れたりしか、如何に惡習俗が全權を握りて各個人の志望を拘束せしか、如何に虛偽が跳梁して誠意を抑へしか、如何に人工が跋扈して天然を防げしか、要するに不正なる習俗即ち當世の輿論輿情と輿情習俗に反挑せる正直なる個人が意思との間に如何なる激烈なる軋轢ありしか而して其の結果は常に個人が失意に終は

り天道是か非かの歎世を怨み俗を憎むの聲如何に全歐に充滿せりしか、これらは近世史に通じたる者の説明を俟たずして知れる所ならん。所詮歐洲の十八世紀は偽善矯飾沒誠實の時世なりき、即ち假面の時代なりき。政治家は表に公衆の利福を唱へながら裏には私福是れ求め、僧侶は陽に天道の崇敬すべきを講じながら陰には卑しむべき塵欲に耽り、言行背馳而も恬として耻づる色なかりき。如何に當時の文學諷刺嘲罵に富めるかを思へ、又如何に諷刺嘲罵を事とせる文學の世に歡迎せられしかを思へ。是れ豈當社會の腐敗せる好證左にあらざや。諷世嘲俗の文學を讀みて毫も發憤せざる社會は自家を嘲けられて平然たるの社會なり、即ち虛偽に慣れて之を怪しざる厚顏の社會なり。彼の十八世紀の名家たるボープを見よ、スフットを見よ、若くはポリングプロークを見よ、又は轉じてルーソーを見よ、ゾルテールを見よ、や、降りてフィールデンスモレットストルンを見よ、いづれか世を嘲罵し俗を諷刺せしを以て其の名を一世に博せざりし。夫かも彼等の行爲せし跡を見るにほとんど一人の行爲Actの其の言Speechに副へりし者なし。チェストルフィールドの其の

兒に矯飾を庭訓せしを思へ、ルッソー、ボープ、ストルン等の如何に俳優に似たりしかを思へ。彼等はた假面時代の兒にして自家を諷刺して恬然たりし者なり。先輩尙然り其の末流の腐敗は推して知るべきなり。全社會の墮落はます／＼悪習俗をして其の毒を逞うせしめ、たま／＼正人君子あるも、此の悪周囲と戦うて毎に敗れ、數奇不幸を歎せざるはなかりき。かゝる悪社會と正しき人との衝突並びに其の衝突より生ずる幾多の弊害は到底看過せらるべきものにあらずこゝに於てや、十八世紀のはじめより、其の末に至るの間に、激烈なる社會對個人の激論は沸騰せり即ち社會罪あるか、個人罪あるか、罪は人にあるか、罪は習俗にあるかといふ疑問、自然に識者間に囂然たるに至りぬ。まづ英にありては、哲學者ロック、風紀に政治及び宗教の弊害を道破し個人が固有の自由を唱へ其の弟子シャフツベリー、ボリングブローク等續いて頻に其説を敷衍し彼の有力なる自由思索家、トランド、モルガン、コリンズの徒、半無意識にして他面より之れに聲援しボープ、スウィフト等の諷刺家はた其の旨意を承けて悪習俗を攻撃せり。試に英國十八世紀の文學を掃き見よ其の最も傑

出せる諸作家はいづれも皆聲を揃へて政治的組織の流弊を攻撃し教會及び神學の悪習を非難し、偽善を罵り謬信を嘲り不自然と不道理とを喝破せざるはなり。而して社會壓制、即ち悪習俗の最も甚しかりし佛國に於ては此の般の論難も竟に其の極頂に達せり。彼の萬法精理に惡制度を説破し、*Persian Letters* に惡習慣を罵倒せしモンテスキウ嘲難家の大王と稱せられて後の大破裂の緒を發きしデルテールの徒は孰れもロックを愛讀せし論客にして明に當、社會の勁敵なりき若しは『民約説』に一世を震蕩し、『新エレナ』に鋭く醜俗を諷刺せしルッソー、*System de la Nature* を著しドルバク『精神論』を唱へしエルゼンオス、若しはデテロ、ダロムヘルの徒、其他所謂エンサイクロピヂストと稱せらるゝの徒は、皆是れ多少社會對個人の疑問に對して、新解説を與へんと試みし者也。若しくは『人權論』を著し、英のトマス・ペイン若しくは『政治的正義』を著し、英のフィアム・ゴドフィン其他枚擧するに遑あらず。蓋し十八世紀の後半は思。索。討。議。の時代なりき、個人に罪あるか、社會に罪あるか、之れを明めんと力めたりし時代也。此の討議、思索の結果は所謂人間科學、即ち人間を研

究するの學をして驚くべき發達をなさしめたり。心理學、社會學、政治學、經濟學などいふ、總じて新らしき學問にして、就中人間に關する者は皆此の思索、間に芽をいだせり。眞理を追求し自然の状態を考察するの傾向は、すなはち此のときより盛になれり。今日に所謂科學的精神、哲學的精神、人權論、自由論、平等論、自然論、平民主義、個人主義、社會主義、信仰の自由、學問の自由、研究の自由などいふ思想はすべて此の間より生まれいでたり。而して其の結果はすべて社會の惡習、俗の非を鳴らし各個人が海運の不當背理なるを認定せり。更に前段にいへるを總括して略説すれば、十八世紀の後半におよび社會と個人とが軋轢の究極せんとせしや、社會と個人といづれか罪あるといふ疑問起こり自然に討議の時代を醸し所謂純理論盛行し、其の結果個人に罪なし、社會に罪あり、人間其の物は本來善美なりといふ結論生じたり、即ち各個人には罪はなけれど、惡習慣、惡制度、及び之れを代表せる當社會に罪あり、所詮此の惡制度、惡習慣の行はるゝ間は、個人の幸福を得るに由なし、個人の權利と自由とを伸ぶるに由なし、惡習、俗は悉く蕩攘すべし、惡制度は悉く破壊すべし、所詮、大改

革は必要なり、といふ結論生じたり。彼の革命の煽動者として知られたるブルテール及びルツソーの二人が、パスチル破壊前にみまかりながら、共に大革命の方に旦夕に逼れるを豫言して逝りしを以ても、此の潮流の轉々急なりしを断定するに足るなり。(下略)

第五編 近代の文學

第一章 歐洲近代の革命思潮

精神上物質上の變動——英國社會の進歩——佛國の大革新——獨逸の勃興——思想上の二大潮流——バルンス——其の畧傳——其の諸作——文致と好尚との革新——クーバー——其の特質

第十八世紀の末より第十九世紀の始めへかけて歐洲に思想上物質上の大革新起り政治上社會上の大變動を呼起し其の大變動の餘波としても新文學勃然として興りたり。かゝる大變化の如何にして起りしかは前章にほゞ叙べたる如し。蓋し物極まれば必ず變ず第十八世紀に至りて爛熟に達せし文物は其の末に及びて一轉化し靜勢は俄然として動勢となり引きしぼりたる強弩の機をはなるゝが如

く突飛の勢ひ當るべからず先づ政治上に於ては自由主義大いに起り有形無形の諸拘束一時に取り除かるゝ有様となりしかば國民の眼界忽然として擴大し思想も感情も急激に開發せられ學術技藝はた頻りに進暢し諸般の事業悉く前代未聞の觀を呈するに至りき。

英國のみに就きて見るも蘊蓄せられたる學術的研究の結果今や實地に應用せられて或は蒸氣機關の發明となり或は紡績器械の發明となり處々の都會は之れを用ひて殖産工業を助け加ふるに耕作法の進歩するあり從來に幾倍せる收穫は能く劇増せる人口を養ひ需要増し供給加はり輸入の額以前に三倍すれば輸出もまた六倍となり生活の路隨うて開け上流はいふに及ばず細民はた時間と金錢とを娛樂教育讀書旅行等に費す餘裕を生じき。是に於てや彼の新聞紙の如きも其の始めて出でし時(千七百九年)は僅に掌大の紙面にして當年の發刊高は諸雜誌を合して數千號にも満たざりしに一千八百四十三年に於ては印刷局の調査は七千一百萬號と注し中には危然たる大冊も夥多ありき。諸般の事業のかゝる進歩擴張の狀にありしと同時に嘗て少數の専有なりし諸特權は今や公衆の有となり町人

職工の如き昔は我が徳川期の商工にひとしく無學小心只管社會の規矩にのみ従ひしものも今や其の才と力とを以て任意に好位地を作るを得て奮然社會の舞臺上に現はれ他の名門顯族と共に優勝劣敗の活劇を演ずるに至りき。」

以上は英國に於ける當時の概況なるが此の大反動の勢は政治的革命の中心たりし佛蘭西に於ては更に甚しく例へば彼のナポレオンが部下の諸將は概して皆賤家の子なりしなり。要するに一千八百三十年の大革命は佛國民に取りては名譽財寶を賭せる全庶民が智力勞力の大競走たるに外ならざりき。

更に注意すべきは社會外部の變化と共に人々の内部即ち精神もまた制すべからざる自然の勢を以て變化せしとなり。政治的革命戦争の先づ佛國に起こりしや之れに因縁して列國各々兵を起し戦雲全歐の天を掩ひ從來特立せりし英佛以獨は此の戦争を媒として相接觸し而して相互の文明は其の衝突する毎に光を加へ思想の範圍はた自ら膨脹し狹隘なる個國的思想は漸く跡を絶たんとせり。從來爲すなかりし獨國は眠獅の俄然として覺めたるが如く猛然一吼して革命的旋渦のたゞ中に突入し社會的制度的革命を成就せる佛國と共に精神的革命の主動

者となりぬ。然り爐邊に喫烟して讀書に餘念なかりし此の質朴なる人種は今や新思想の先達となりて他國民の企及し得ざる窮理と思索とに従事したり。彼等が求むる所は宗教の儀禮にあらずして其の精神にありき作文の法則にあらずして詩美の本相にありき小説の結構にあらずして批評の眞理にありき。要するに絶對の眞善美を追究する傾向は彼等を経て近世の思潮となりき。

かゝる時運の大勢は合して自由主義と哲學思想との二潮流となり一は佛蘭西に發源し一は獨逸に濫觴しやかて滂湃としてドーヴー海峡を越えて英島に押し寄せたり。されはれ英國國民の沈毅なる特性は堅固なる堤防となりてしばらくはこの潮波の侵入を許さざりき而も氾濫の大潮勢は竟に長く支ふべからず。蟻蝼の穴はこの水を導いて先づ文田を浸さしめこゝに所謂ローマン派及び哲學派の二流を生じ遂に全島を振蕩するに至りき。

最初に此の潮流にたゞよへりしものを蘇國の農民ロバルトバルンスとす。バルンスは一千七百五十九年スコットランドの寒村に生れき。彼れは此の天然不幸なる瘠地に於て赤貧洗ふが如き窮迫の間に成長し十二歳父の農事を扶け十

五六歳に至りては全然一個の労働者たりき。激烈なる勞苦は其の身軀を殘害し此の天才をして終生心臟病と不眠症とに苦ましむる種子を醸しき。時に其の父漸く老い家計いよ／＼困難なりバルンスすなはち人に備はれて苦役に従へり。この間天運はます／＼拙く先づ父を喪ひ次に戀に失望し辛苦落膽の間更に幾春秋を送りぬ。多感多情にして功名の心燃ゆるが如き詩人がかゝる逆境に立ちたる時の感想果して如何ならん。竟に止むを得ずして西印度島に出稼ぎせんとせし折から會々扶助する人ありて其の詩籍出版せられ僅かに數ギニーの財を得て辛くも此の不幸をまぬかれにき。さはあれ滿腔の功名心は常に其の満足を得ざるを憤り幾度か其の身の卑賤なるを歎ぜり而も不義と卑劣とは彼れの敢てする能はざる所彼れは所詮器械的に労働して其の生計を爲さざるべからず。然れども詩歌は其の捨つる能はざる所こゝを以て日々に農車を押しながら常に其の愛する詩集を讀めり就中蘇國の古謠を玩味し夜に入れば家に歸りて破窓の底屢これを回讀して靜に其の詩思と詩形とを練磨せりき。彼れはかゝる境遇にかくの如くにして人となりしかば後に社會に立つに及びても富豪權門を畏敬せずして

常に弱者賤者に同感し之れを保護するを以て任どなし且つ全力を盡くして社會を攻撃し教會を批難し又所謂文明的生涯を罵りき。其の筆鋒の鋭利なる往々にしてルツソーザルテールを凌がんとせり。かくて絶對の平等主義を主張し人生の尊卑は其の位階にあらずして本性にありとなせり。其の有名なる句に曰はく「如何なる有様にあるに拘らず人は人なり」美服は裁縫師之れを造り官符は式部寮之れを製る所詮位階は貨幣の印章人こそは黄金と。彼れが平等の同情は畑の鼠路傍の雛菊にだに及びき否彼れは惡魔をすら不幸なる同僚をもて視若しくは形相の醜き豎子と見なしき。

一千七百八十五年 Jolly Beggars を公にす是れバルンスが傑作の隨一なり。種々の乞食の亂醉戲謔せる言動描き得て睹るが如く筆々躍動すシエークスピア以後稀に見る所の劇詩的神筆と稱すべし。バルンスが作は尙單純なる抒情詩中に一讀三歎すべきもの夥多あり而も其の筆致は何れもよく其の天真朴直なる精神を現じ創新を以て勝る。按ずるに十九世紀の後半期より古法舊格を準細とする次第に廢れ一に誠實なる自家の情感を本とする風起これり而してバルンスの如き

は實に先づこの方向に馳騁したる一人なりき。バルンスの詩は自由に野語俚言を混用し殆ど日常の會話と一般最も嚴格なる思想の間にも滑響の文字を雜へ最も悲哀なる處にも間々卑俚の語をまじへたり。

以上革命思想の誘導者としてのバルンスが生涯の大畧なり。テーンは曰はく「時運に先だつものは常に悲境に陥るを免れずバルンスは實に其の人にして時世は未だ彼れに及ばざること四十年なりしなり」と。而してカーライルは曰はく「バルンスをして若し相當の家に生れて相當の教育を受けしめば彼れは立ちどころに英國文學の趨勢を一變せしならん」と。カーライルが此の語はバルンスを過重せる嫌あり而も彼の時代に拘泥して個人力を輕むたるテーンが前説の短を補ふに足るべし。バルンスは中ごろ大に名を知られて一時は好地位を得たりしかど又忽ち地位を失ひ貧困の中に其の生を終へき時に一千七百九十六年、齡僅かに三十八。

當時英國に於ては保守主義尙依然として勢力を有し專制的政治も尙深くは忌まれずしてむしろ國民の保護者として歓迎せられ人民はた政界事なく天下太平な

るを謳歌せり。彼の教會の如きも其の頗る爛熟せりしに係らず尙ほ道義の支柱として多數の國民に尊奉せられ未だ遽に瓦解すべしとも見えざりき。されば自由革新などいふ主義は輿論の嫌惡撥斥する所なりき。聰明なる宰相ピットの如きすら多數政略上の理由ありきとは雖も痛く革新の風潮に抗し佛蘭西革命を目して宗教を滅絶し社會を破壊する暴舉なりと罾りし程なれば俗論の之れより甚しきものありしこと推して知るべし。

状態かくの如くなりけれども世界の大勢は終に竟に拒む可からず革新の氣運はいつしか變相して英國に潜入せり。固より佛蘭西若しくは獨逸にての如く全國を振盪する底の勢をなさいりきと雖も最初先づ文學に入りて其の文致と好尚とを變動し文致好尚の變化すると共に思想上感情上道念上風俗上に於ける其の他の革新を促し來たれり。社會上政治上に自由と革新とをほしいまゝにする能はざりし不平は隠然破裂して文學上に於ける革新となりしなり故に詩學上文學上の革命は英國を以て最先の國となすべし。さて所謂文致上の改革はそも何れの邊よりか行はれし。左に先づ第一にこの方面に力を盡くし、一抒情詩人の閱歷

を略叙せん。

文學に平等の主義を持して革命思想を鼓吹せしものは已にバルンスあり而して文致の上に舊檢束を解脱して自由創新の體を起し、もの之れを井リアム、クーパーとす。クーパーは一千七百三十一年に生れき。爲人小膽多病にして物に感じ易き性なりしが六歳母を喪ひ早く世の辛酸を味へり。さてさらぬだに悒鬱なりし彼れが性を更に甚しく殘ひしものは其の幼うして入りし學校なり。當時の學師等は學童を罰するに毎に鞭撻を用ひ且つ年長の生徒等は常に幼弱を虐遇せり。クーパーの小膽にして多感なるや此等虐待の爲に痛く神經を刺衝しやがて精神病を惹起し習ひ性となり終生懊惱としてまた樂むこと能はざりき。長じて後伯父某の傳手によりて上院の書記官たりしが彼れ其の勤務に堪へずして煩悶苦惱し就中其のはじめ試験場に立出でんとせし折の如きは恐怖厭嫌の餘り始ど自殺せんとなしにきといふ。其の後牧師アンソン夫妻の厚意によりて其の家に寄寓せしが素より行ひに露ばかりの表裏なき小心謹直のクーパーなれば深くアンソンの妻女に愛せられ交誼殆ど眞の姉弟の如くなりき。されど悒鬱は暫くも去

らず無垢清浄なる身心をも自ら責むると極めて厳しく常に我が罪障の深きを畏怖し神に愧ぢ神を愧るゝこと彼のペンヤンと相似たりき。かゝる性質なれば其詩歌を作するや譬へば慰鬱の爲に琴を奏し繪を物するに同じく概してその悶を散ぜんが爲のみ功名の念などは絶えてなかりき。且つや彼れが滿腔は悉く是れ詩歌の雅情詩神は常に其が頭に宿りき遠く題を求めて思を構ふる要なかりしなり。テーンはクーバーが作を稱へて曰はく

「これに山りてこれを觀れば吾人はもはや希臘羅馬に旅行するを要せず古詩歌を研究するを要せず詩歌に美なる材料は全く吾人の周圍に充満せり宇宙の萬物は盡く美なり。之れを認むるものは心なり唯夫れ心なり故に吾人はもはや舊法格を墨守する要なきなり。是に於てヤクーバーの作の如きもの起る」

と。蓋し模せず飾らず單に「誠」を以て優る者はクーバーが詩歌の特質にしてサウヤーをして此の詩篇に比ぶれば如何なる名作も天然の山水と比較せられたる庭園の如しと激賞せしめたるもの是れなり。

彼れは又一定の理想若しくは主義を立てし之れによりて進退するやうなこともなく只ありのままに其の感想を叙せしのみ求めずして湧き出づる自然の感想を

抒せしのみ。是れ其の詞句の活動せる所以也。彼れは英國に於ける一大桂園派の詩人なり但し嘗て敢て論辯して自家の主義を唱道せしことなし。詩歌は唯々「誠」を旨とすべし法格に泥むべからずと唱へしは所謂ローマン派及び湖畔派の詩人すなはちサウヤー、ナルゾナス等にはじまる。

クーバーが作のうちにて最も名高きは『タスク』と題する長篇の詩なれど可憐なる佳什は間々其の小品の中にもあり例へば彼のアンフィン夫人の家にてものせし滑稽の作『ジョン、ギルビン』の如きいと妙なり。蓋しクーバーは恠辭の性を有しながら不思議にも滑稽の才を具へき。

第一章 ローマン派

ローマン派の由來——新思潮の二大派——史詩派の特質——其の代表者——サウヤーの諸作——スコット——其の諸作——韻語——小説——スコットの長短

さる程に文學革新の機運漸く熟し一千七百九十三四年の頃に至り所謂ローマン詩派英國に興りたり。此の派の由來主義及び影響はその長所弱點と共に獨逸佛蘭西の同派に類似せるものにて其の興起せし初めに於ては「詩界の異端」をもて目

せられきされど彼等少しも屈せず盛に創作し親密に結托し大膽奇警なる議論を吐き以て舊派を駁撃せり。蓋し此の派の起りしは其の實當社會の固陋腐爛到底頼むに足らざるを憤慨せしに基くされば其の結果の文學上にもみ顯れしに拘らず社會の非を攻むるの意彼のルーソーが非社會主義に勇猛たるものあり。されば其の主唱者の一人たるサウソーは其の新主義を實行せん爲めに屢々激烈なる政黨員と交り『ワットタイレル』といふ劇詩を作しては暗に革命を鼓吹せり而して同じく其の一人たるコールリッチは口に筆に之れを唱ふるをもて足れりとせずして進んで同志と共に亞米利加に航し國王僧侶の專横を受けざる一理想的共和國を建立せんと空想し遂にはユニテリアン教會に入り一種の神祕説を唱説するに至りき。後には隱君子と見做されたりしナルツマスだに其の尙壯なりしや此の氣運に煽られて革命を鼓吹し國王を罵つて "scaped child to clay" と激語せりき。然れども英國は所詮英國にて着實を主とする國なり革命の急潮も早晚抑止せられざるを得ず。年壯氣鋭なりし三詩人すらいつしか前説の行ふべからざるを覺り次第に着實に戻り來たりし程なれば其の他の追隨者は自然に其の勢ひ挫けたり。

されども此等革新思潮の爲に趣くとも文藝上の賞玩力は著く進歩し彼等は明かに十七八世紀の作に模倣するの愚なるを知り遠く文藝復活時代と中古時代とより其の醇粹なる模型を取らんとせり。是に於てや盛に埋没せる俚謠俗歌を研究し諸外國の古詩古謠を蒐集し其の清純なるを激賞し其の無邪なるをもてはやし漸く詩風を革新し來たりぬ。彼等は戮力して貴族的織巧と能辯的綺麗とを攻撃し卑言俗語豈に忌むべけんやと唱へたり。されば其の調格韻律の如きも或は十三世紀の韻律により或は十六世紀のを用ひ而してコールリッチサウソーの如きは全然たる新式を創造せり。此の大紛亂は竟に二大詩派を生じたり一を歴史派ヒストリカル・スタイルとし一を哲學派フィロソフィカル・スタイルとす。歴史派は彼のローマン派と同じ流れにして哲學派は其の支流なり。前者の著なる者をサウソー及びスコットとし後者を代表せるものをナルヅマス及びシャリエーとす。而して此の二派の起りしはひとり英國のみならず佛獨共に同様の詩潮を現せり蓋し時勢の然らしめし所なり。

史詩派(ローマン派)の主唱する所に曰はく理想は時代と共に變遷す今日の理想は到底明日の理想にあらず將た昔日の理想にあらず。今日見て醜となすものは古

蠻人若くは封建武士の見て美となししものにあらずや。されば古へを描かんとする者は自ら古人とならざるべからず彼れ等と共に無知ならざるべからず彼れ等と共に殺伐ならざるべからず彼れ等と共に情に脆からざるべからず彼れ等と共に鬼魅を畏信せざるべからず彼れ等と共に熱帯に住し或は城堡に籠らざるべからず。豫め理想を設けて寫描の上に古人を左右するは大なる誤謬なり。外國人を寫す亦然り要はたゞ己れが一時一處の理想を尺度として人を裁斷せざるにあり。古人恐なり蠻人野なり而も竟に事實なるを奈何せん。詩人の筆は過去を現寫し異境を直狀すれば足る是非の沙汰を加ふべからず。汝の成心を没却せよ汝の主觀を没却せよこれ眞を寫さんが爲めなり以て汝の見識を損するにあらずと。

史詩派の主義の實現せらるゝや考古の風あらゆる美術の上に流行せり。彼の獨の大詩人ケーテが作の如きは實に此の派の率先たり彼れの想像の普遍にして平等なるや描寫今古に涉り同感東西に通じたり。さもあれ第二流以下の諸作家は只徒らに往時を回顧し風俗人情の擬古を事とし臆斷穿鑿却りて詩の眞に背ける

もの比々こゝに於て讀詩社會漸く倦み以爲へらく所謂史詩は到底古記録の質實なるに如かず擬古の俗謠は所詮眞成の古謠に如かず過去を知らんとせば須からく詩人を去りて史家若しくは批評に聽くべきなりと。

此の派の中にて著かりしものを擧げんか佛人に似て快活なりしトマス、ムーアあり古劇を復興せんとせしチャールズ、ラムあり批評家思索家にして詩人を兼ねたりしコールリッチあり教誨の旨を歌ひしカムベルあり中にもサウザーの如きは其の率先者の隨一人なり。天資穎敏幼うして幾多失行あり迷語落魄を経て名を詩壇に著し所謂貴族的虚飾体的勁敵となりぬ。學博く作多く想像に富み議論に長ぜり。其の詩論の斬新なると毎に作に序して辯論すると其の奇異なる事物を寫すに巧なると稍々佛の詩人ユーゴーに似たり。案ずるにローマン派に屬せりし英才はサウシー以下數十を下らざるべし。其の質を殊にすと雖も要するに皆史的詩人或は太古に或は中古に或は印度に或はヘルシアに材を宇宙の八隅に求めて縦横に描寫を試みたれど概ね皆皮相の模寫燦爛たる密畫を示せるのみ眼ある者は竟に其の擬作たるを見ざる能はず。彼等の表はしゝ光景は樂劇(オペラ)能く